抑圧と無意識の主体の倫理

小長野　航太

目次

序論

第一部　フロイトにおける抑圧

A　メタ心理学的理論における抑圧

第一章　『夢解釈』期における抑圧の理論上のアポリア
第一節　「心理学草稿」における心的構造　―フロイトにおける抑圧 1
第二節　フリースへの手紙 112 における記憶の三層構造と「書き込み」　―フロイトにおける抑圧 2
第三節　『夢解釈』第七章における無意識と抑圧　―フロイトにおける抑圧 3
第二章　メタ心理学再構築期におけるフロイトの回転と抑圧理論の練り上げ
第一節　仮説としての欲動の導入とフロイトにおける性的なもの
第二節　欲動の運命としての抑圧　―フロイトにおける抑圧 4

B　実践的理論における抑圧

第三章　フロイトにおける実践的理論
第一節　エディプス・コンプレックスにおける性的なもの
第二節　エディプス・コンプレックスと抑圧　―フロイトにおける抑圧 5
第三節　抑圧の原因としての去勢コンプレックス　―フロイトにおける抑圧 6
第四章　オオカミ男症例にみる抑圧にかんするメタ心理学的理論と実践的理論の綜合
第一節　オオカミの夢
第二節　原光景と原抑圧
第三節　事後性の導入

第一部の結論

第二部　ラカンにおける抑圧

第一章　抑圧と言語活動
第一節　想像界・象徴界と抑圧
第二節　言語活動と抑圧の構造
第三節　ディスクールにおけるしくじりとしてのパロール

第四節　愛の要求と欲望　―ラカンにおけるシニフィアン概念１
第五節　大他者の欲望にかんする無知とシニフィアン　―ラカンにおけるシニフィアン概念２
第六節　ラカンにおける愛とフロイトの肛門期における愛の交渉
第二章　シニフィアン連鎖と抑圧
第一節　フロイトにおける揺動とラカンにおけるシニフィアン連鎖
第二節　メタ心理学的図式のシニフィアン連鎖による読み替え
第三節　抑圧と主体の脱中心化

第二部の結論

第三部　抑圧と真理

A　ハイデガーとラカン

第一章　ハイデガーにおける真理概念の展開
第一節　『存在と時間』における真理概念
第二節　『存在と時間』における真理と現存在の乖離
第三節　『存在と時間』における不安と自由
第四節　真理の本質としての自由
第五節　有らしめることにおける隠れ
第六節　秘密と迷い誤ること
第二章　精神分析における真理
第一節　ラカンとハイデガーにおける真理
第二節　脱-存と抑圧
第三節　抑圧における知と真理

B　抑圧と倫理

第三章　四つのディスクール
第一節　主人のディスクールとハードウェア
第二節　主人のディスクールと「存在」
第三節　大学人のディスクールと情報化社会における知
第四節　分析家のディスクールと知られざる知の書き込み、あるいは主体的出来事
第五節　ヒステリー者のディスクールと新たな知の産出
第六節　ソシュール言語学における主人のディスクールへの回転

第四章　フロイトにおける無意識の発見と倫理
第一節　フロイトの抑圧理論の変遷にみる主人のディスクールから科学者のディスクールへの回転
第二節　フロイトとフリースのもの語り
1)出会い
2)魅了
3)亀裂
4)決別
5)確信
6)再生
第三節　知の更新と倫理

第三部の結論

むすび

序論

精神分析は心理療法のひとつであり、そこで提出された概念や理論はたしかに第一には分析の実践のためのものである。だが、精神分析が提出した概念や議論は哲学・思想の領域においても多く取り上げあれ、話題にされてきた。ここではそのなかで、抑圧を中心に取り上げてみたい。

あまりに基本的でありかつ議論しつくされた理論のように思われるかもしれない。しかし、われわれはこの理論がけっして議論しつくされているとは思っていない。それどころかこの理論は、精神分析の考えを受け入れるか受け入れないかの合言葉のようにはたらいてしまい、精神分析を認めない立場では当然取り上げられることはなく、またいっぽう受け入れる立場においても前提とされてしまい、それ自体の仕組みや、フロイトにおける理論形成自体を問うといったことは、十分議論しつくされたとはとてもいえない。

たとえばサルトルは抑圧を、みずからのいう自己欺瞞のひとつであると頭ごなしに受け付けない。これにたいしメルロ=ポンティは抑圧を認めてはいるが、自身の身体論のヴァリエーションのひとつとして抑圧という現象をとらえ、抑圧自体の仕組みについて検討することはない。フーコーやドゥルーズにいたると、無意識という領域を前提としたうえで、いっぽうは権力の議論を展開し、たほうは欲望する機械という概念を提出するようになる。

フロイトもまた、「自我とエス」のなかで、無意識こそ「精神分析の最初のシボレート[1]である」(IE283)と述べている。無意識がシボレート、つまり合言葉であるなら、当然、それに直接アプローチするための抑圧もそのように扱われることになるだろう。

だが、いったん精神分析と距離を取ってみると、抑圧とは非常に受け入れがたい理論であるだろう。自分では意識されずにある力がはたらいて、特定の表象や考えが意識に浮かぶのを妨げているという考えはなかなか受け入れられるものではないように思える。ここでは、もういちどサルトルのような立場からはじめてみたい。つまり、抑圧理論を前提とすることなく、その仕組みがどのように説明されているかに注目したい。そのため、フロイトにおける抑圧の理論構築をていねいにみていくことになる。

このようにフロイトを読み直してみると、フロイト自身、抑圧理論を構築するのに非常に難航していたことがわかる。たとえば、『夢解釈』において抑圧が議論されるさい、性に

---

1 「シボレート」とは、旧約聖書に由来することばである。士師記のなかに、闘いに敗れたエフライム人をギレアデ人が見分けるのに、エフライム人が“Schibboleth”(「麦の穂」の意)をうまく発音できなかったため、この語がエフライム人かどうかを見分けるためにもちいられたという話がある。このことから、「シボレート」ということばは、合言葉というような意味で使われるようになった。

かかわることがどのように抑圧されるかというその仕組みにかんしては説明されていない。つまり、その理論形成にかんして、もっとも肝心な点が取り上げられていないのである。それにもかかわらず、フロイトはこの理論を捨て去ることはなかった。このようにフロイトがいったんは挫折した理論を再構築するという過程に、本稿では注目することになる(第一部)。

またフロイトの抑圧の理論構築を追っていくと、異なる出自の理論が混同されていることがわかる。本稿では、いっぽうをメタ心理学的理論、たほうを実践的理論として区別しながら扱っていく。

精神分析が拒否されることになる理由のひとつに精神分析の扱う性にかかわることにたいする嫌悪感をあげることができるだろうが、それは、この二つの理論を混同してしまうことから生じた嫌悪感であると考えられる。本稿はこの点についても、明らかにしていきたい(第一部)。

また、メタ心理学的理論のほうはとくに、精神分析内部においても重要視されていないように思われる。しかし、フロイトが精神分析の提出する概念や理論を「科学的」なしかたで提出したのはこのメタ心理学的理論のほうであり、これを軽視することはできない。

いずれにせよ抑圧理論は、精神分析の提出する議論を受け入れるか否かの踏み絵のような役割を担ってしまったため、それ自体が議論の主題として取り上げられることはそれほどなかったと考えられる。

これにたいし、ラカンは抑圧理論を主題として取り上げ、それをみずからの観点すなわち言語活動と関係づけるしかたで、再構築した。このとき、フロイトの議論と対応させながら、ラカンによる再構築の正統性を検討したい(第二部)。

そしてラカンの議論を経ることで、抑圧はディスクールの問題へと発展することになる。つまり、ひとが語るときすでにそこに抑圧が生じているという考えが提出されることになる。

このとき精神分析は、なにをわれわれに明らかにしてくれるのだろうか。それは、“Verdrängung”あるいは“refoulement”の日本語訳が示すとおり、語る存在が「抑圧」されつづける構造をわれわれに示すだけなのであろうか。そうではないだろう。

ラカンは、抑圧をシニフィアン概念の練り上げによって言語活動の観点から捉えたのち、さらにそのときの抑圧を真理概念と結びつけることで、言語活動の構造を四つのディスクールのマテームによって提出した。それは、主人のディスクール、大学人のディスクール、精神分析家のディスクール、ヒステリー者のディスクールである。われわれは、これらを詳細に検討することで、語ることの可能性を探究していく(第三部)。

そして、最後にこの四つのディスクールのマテームによって、フロイトの抑圧理論の再構築の過程がどのようなものであったかを考えなおしてみたい。これらの考察を経て、われわれは、ある種の知の伝達に倫理的なものが要求される構造をみることになるだろう。そして、このとき示される知の伝達こそ、ヨーロッパにおいて哲学が担ってきたことだと

考えられるのである。

第一部　フロイトにおける抑圧

フロイトは無意識を探究するのに、抑圧 Verdrängung という概念を提出した。「無意識の概念を、われわれは抑圧理論から獲得している。抑圧されたものは、われわれにとって無意識的なものの原型である」(IE284)。そのさい、抑圧されるものにかんして、フロイトははじめからそれを性にかかわることとしている。「抑圧は例外なく自我に苦痛な情動を引き起こす表象に行使されており、(…)それは性生活からの表象である」(EP442)。第一部では、このようにいわれる抑圧の理論構築の変遷をみていきたい。

その過程でわれわれは、フロイトの理論構築について二つの立場と遭遇することになる。ひとつは、フロイトがメタ心理学と呼ぶものであり、本稿ではこれをさらに二つの時期にわけて考察する。もうひとつは、自己分析と臨床経験から練り上げられた理論構築である。われわれはこのような理論を実践的理論と呼ぶことにする。つまり、われわれはフロイトの理論を、メタ心理学的理論と実践的理論を区別して扱うことになる。この二つの立場をどのように受容するかによって、たとえばその二つに連続性をみるかあるいは断絶をみるかということは、フロイトのテクストを読み解くうえで重要なことのように思われるからである。

一般のフロイト理解においては実践的理論を代表するエディプス・コンプレックスのみが流布しているようである。つまり、母親へ向けられる性的満足が抑圧され、それが無意識を形成するという考えである。

またフロイトの後継者とされる精神分析家の多くの理論構築は、臨床経験から練り上げられたものであり、この観点からフロイト理論への引き受けや批判がなされている。たとえば、ユングのエレクトラ・コンプレックスやアドラーの劣等コンプレックスは、フロイトのエディプス・コンプレックスを批判するものとして提出されたわけだが、このようなコンプレックスにかんする議論は実践的理論に属するものであり、フロイト理論を扱うのに、この実践的理論ばかりが取り上げられているのである。

それにたいして、メタ心理学の理論のほうはあまり注目されていないように思われる。だが、ラカンとかかわりながらフロイトを読む者は、メタ心理学の理論に注目しなければならない。本稿では、メタ心理学的理論構築と臨床経験から練り上げられた理論構築(実践的理論)に連続性をみることになるが、そのさいも、メタ心理学における理論を基盤にして実践的理論を理解することになる。それゆえ、ここではまずメタ心理学の理論構築をみていく。

ところで、精神分析とは症状形成とその治療にかんして、以下のように考える立場であると一般に知られているだろう。つまり、性とかかわる観念あるいは表象が抑圧されるこ

とで無意識へと押しのけられ、それらがかたちを変えて表出し、症状を形成している。それゆえ、症状をなくすためには、その抑圧された観念あるいは表象をことばにすることで意識化すればよい。

このような理解においても、抑圧が重要な概念であることがわかる。しかし、抑圧のこのような機能の明解さにもかかわらず、それがどのように生ずるのかという仕組みの話になると、フロイトの説明には困難さと曖昧さがともない、難解なものとなる。

いったい、性とかかわりをもつ表象が無意識へと抑圧されるということをどのように考えればよいのか。ある表象が性とかかわりをもつとされるためには、意識の関与が必要であるとするのが通常の考えであろう(サルトルはそのように考えた)。それが無意識へと抑圧されるということを、どのように説明すればよいのか。

精神分析の立場からすると、素朴とされ棄却されてしまうこのような問いこそ、われわれはフロイトのメタ心理学の理論構築において重要な役割をはたしていると考えている。第一章と第二章においては、理論とその理論構築をおこなう論者としてのフロイトに、ある回転が生じているが、この回転はこのような問いが力点となり生じていると考えられる。そして、この回転を経て、無意識は、扱いうる唯一のしかたでフロイトによって提出されるのである。第一部では、このような点をみていきたい。

A　メタ心理学的理論における抑圧

フロイトは精神分析の理論を、みずからメタ心理学 Metapsychologie と呼ぶものによって構築しようとした。もともと神経学者であったフロイトは、心的活動を量の移行によって単純明快にモデル化しようとしたわけである。それがフロイトみずからがメタ心理学と呼ぶ理論構築である。だが、その理論化において、抑圧の説明がうまくいかないのである。

本稿ではまず、このメタ心理学によって提出された理論がどのようなものかを確認しながら、なぜ抑圧の説明がうまくいかなかったのかを明らかにしたい。ここではこのメタ心理学的理論構築を二つの時期にわけて考えていく。最初のものをわれわれは『夢解釈』期における理論構築と呼び、あとのものをメタ心理学再構築期の理論構築と呼ぶことにする。

本章では『夢解釈』期として、メタ心理学の構想が開始された、1895 年の「心理学草稿」(以下「草稿」と記す)、1896 年のフリース宛の手紙 112、1900 年の『夢解釈』の第七章を取り上げる。メタ心理学再構築期としては、1915 年に『メタ心理学序説』という表題のもと完成されるはずだった論文のなかからいくつかを取り上げる。

第一章　『夢解釈』期における「抑圧」の理論上のアポリア

はじめに、フロイトによるメタ心理学的理論構築にかんして少しふれておきたい。1915年にフロイトは、迷信的にもう二、三年しか生きられないと信じ、これまで練り上げてきた精神分析の理論を綜合するテクストを書き上げようと決意する。それは、十二の論文からなり、『メタ心理学序説』という表題で完成されるはずであった。しかしフロイトは、「欲動とその運命」(1915)、「抑圧」(1915)、「無意識」(1915)、「夢理論へのメタ心理学的補足」(1917)、「悲哀とメランコリー」(1917)という五つの論文を書きあげたのち、その計画を断念し、ほとんど完成されていたとされる残り七本の論文を破棄してしまう。

では、メタ心理学的理論構築とはどのような試みのことであろうか。論文「無意識」のなかでフロイトはメタ心理学について、次のように述べている。「私は、もし心理学的過程をその力動論的 dynamischen、局所論的 topischen および経済論的 ökonomischen 関係によって記述することができるならば、それはメタ心理学的な叙述と呼ばれてよいものだ、と提案したい」(DU140)。

力動論的観点とは心の仕組みを力の拮抗関係によって捉えることである。たとえば、この考えにもとづいて錯誤行為が妥協の結果であるといわれるが、それは、表出されようとする力にたいして、それを抑えつけようとする力が干渉した結果の妥協形成として錯誤行為を捉えることによって、そのようにいわれるのである。

フロイトの出す簡単な例をあげるなら、これから開かれる会議をおもしろく思っていない議長が、開会の宣言のさい言い誤って「閉会します」といってしまうような場合である(VE57)。症状形成も、この観点から考察されることになる。

局所論的観点とは、心的装置を二つないしは三つの場所にわけて捉えることである。これによって、力動論的観念が可能になった。つまり、次の場所へ進むのを拒む観念あるいは表象があり、そこにそれらを押さえつける力がはたらくと考えるのである。

最後に、経済論的観点だが、これがさきの二つの観点を支えているといえる。経済論的観点とは、心的装置のはたらきをエネルギーの移動によって捉えることである。心的装置のなかに、観念あるいは表象が維持されたり、移行することが、このエネルギーの観点から捉えられているのである。これら三つの観点から心的装置の仕組みを説明すること、さらにそれを明快に図示すること、これがメタ心理学の目的であった。

著作名として「メタ心理学」をもちいようとしたのは1915年であったが、そのことば自体はかなり前から使われていた。それは、1896年2月13日付のフリース宛の手紙にもみ

られる[2]。そこでの内容は、これからみていく「草稿」について語ったものであることは明らかであり、つまり「草稿」によってメタ心理学の試みははじまるのである。

だが、このメタ心理学的な理論構築において抑圧を位置づけることがうまくいかない。それは、この時期のフロイトの欲望と関係している。以下では、それがどのような欲望であったかを、「草稿」、フリースへの手紙 112、『夢解釈』と、それぞれで提出された心的装置をたどりながら、みていきたい。

第一節　「心理学草稿」における心的構造　―フロイトにおける抑圧 1

「心理学草稿」について

「草稿」からはじめよう。このテクストこそ、メタ心理学の構築を目指した最初のテクストだからである。だが、「草稿」のなかで抑圧は理論的にうまく位置づけられなかった。ここでは、フロイトの理論構築をたどりながら、その点をみていく。

W・フリースは、1895 年 10 月 8 日に、フロイトからいつもの手紙とはべつに、二冊のノートを受けとる。これがまさに「草稿」であった[3]。内容は三部構成になっており、第一部では心の構造にかんする神経学の観点からの理論化が、第二部では症状形成の仕組みにかんして臨床経験から練り上げられた理論の報告が、第三部では第一部で練り上げられた心的装置と第二部における症状形成にかんする理論を綜合した議論が、それぞれなされていた。のちにメタ心理学と呼ばれるようになるのは、第一部における理論化である。

フロイトにはこのときさらにもう一冊、抑圧について書かれていたはずのノートがあった。しかしそれは、未完成であることを理由に送られていない[4]。この事実からも、抑圧の理論化が難航していたことがうかがえる。

さらに同日の手紙には、次のように記されている。「僕にとってしっくりいかないのは、(…)抑圧の解明です。ついでながら、抑圧の臨床的な知識は大きく進歩しました。(…)しかし、その仕組みの解明には成功していません」[5]。このようにいわれていることから、フロイトは臨床家として分析経験から考えられうる心の構造と、神経学者としての知識からえられる材料をもちいて打ち立てたメタ心理学的考察を結びつけることの困難さに行き詰っているようである。ここではまず、フロイトが神経学的基盤に則ったしかたでどのような心的構造の理論を提出したかをたどっていきたい。それこそがメタ心理学的な理論構築な

---

2 『フロイト　フリースへの手紙』、ジェフリー・ムセイエフ・マッソン編、河田晃訳、誠心書房、2001,p.175.

3 フリース宛の書簡のなかで、「草稿」について最初にふれられているのは、この半年まえの 1895 年 4 月 2 日である。

4 このノートは紛失している。

5 『フロイト　フリースへの手紙』,p.142.

のである。

心的装置の構築１：量と神経-慣性の原理

フロイトは、「草稿」の冒頭で、その目的にかんして、「心的な諸過程を、限定可能な物質的諸要素によって量的に規定される諸状態として記述し、この試みをとおして心的諸過程を具象的でしかも一貫性のあるものとして把握すること」(EP387)と述べている。このように、心的営みを「量 Quantität」によって記述することで、「自然科学的心理学 naturwissenschaftliche Psychologie」を構築することが、「草稿」の目的であった。ここにすでに、経済論的観点をみることができるだろう。つまり、心的活動を量の移行によって捉えようとするのである。

フロイトは当時、ヘルムホルツ学派の影響をつよく受けていた。その学派の考えにしたがい、心的現象にかんしても量に還元して捉えようとしたのである。まず、心的装置をつかさどる原理として、神経-慣性の原理 Prinzip der N [erven] - Trägheit が導入される。この原理にしたがって、有機体は体内の量を一定に保とうとし、刺激によって体内の量が増大したなら、その量を「ニューロンが解放しようと努め」(EP388)ると考えた。ニューロンとは、当時の神経学でさかんに研究された分野であった。それは神経系を構成する細胞であり、刺激を享受し、他の細胞に刺激を伝達する能力をもっている。

フロイトの提出する神経-慣性の原理とは、有機体は、外部からの刺激により体内の量が増えすぎると苦痛を感じるため、なるべく体内の量を少なく、一定に保とうとする、というものである。そして、「神経-慣性の原理が反射運動にその動機を与える」(EP388)とあるように、心的営みを、刺激による有機体内の量の増加とそれにたいする放出という反射運動をもとにして捉えようとしている点に、神経学者としてのフロイトの側面をみることができるだろう。

さて、刺激には、外部からのものと内部からのものがある。外部からの刺激であれば、その対処は容易である。刺激を与えてくる外部の対象から離れればよい。たとえば火であれば、その火から遠ざかればよい。このことは、フロイトの心的装置によって、次のように説明されるだろう。つまり、火のように熱いものに近づくと、刺激がニューロン内に大量に伝達され、体内にその量が増大するため、神経-慣性の原理に則り、量が排出され、その排出によって火から遠ざかる運動が生じる、と。

しかし、フロイトの問題領域において重要視されるのは、外部からの刺激ではなく、内部からの刺激、つまり食欲や性にかかわる量の増大である。フロイトはこれらを「生の困窮」Not des Lebens と呼ぶ。フロイトはこのときすでに、神経症者の症状の原因には性にかかわることが関係しているという考えをもっている。その観点から、内部からの刺激に注目するのである。この内部からの刺激には外部からのものにはみられない困難が備わっている。外部からの刺激と違い、それを避けるために遠ざかるという手段をとることができない。このため、この内部からの刺激から逃れるためには、「外界における変化(栄養摂取、

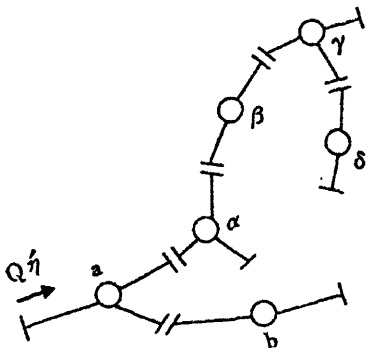
性対象への接近 Nähe des Sexualobjektes)」という、「特殊行為 spezifishe Aktion」と呼ばれるはたらきが必要となる(EP410)。

心的装置の構築 2：特殊行為と有機体内における量の貯蓄

しかし、ここにはさらなる問題が生ずる。外部からの刺激と違い、内部からの刺激の場合は、量が外から備給されないため、有機体に運動を、この場合は特殊行為を、引き起こさせるための量の放出が生じてこない。それゆえ、特殊行為を引き起こすために、有機体内にある程度の量が貯蓄されていることが必要となる。この貯蓄のはたらきを、フロイトはニューロンに設定した。フロイトは心的装置の構築において、ニューロンを以下のようなものとして導入する。

> 神経系は、同じような構造をもち、互いに区分されたニューロンから構成されている。ニューロンは未知の素地に媒介されて接触しており、お互いに末端をもち、同じようにそれ以外の組織の部分にも末端をもっている。ニューロンには、その細胞突起で受容し、軸索で受け渡すという仕方で、一定の伝道方向があらかじめかたちづくられている。さらにニューロンは、種々の径の豊富な枝分かれをもっている。(EP390)

このように、ニューロンは一定の方向性をもつ、量の通り道として捉えられている。方向というのは、外部からの刺激であれば、外皮に想定されている刺激を知覚する「知覚細胞」(EP392)から、内部に想定されている運動を引き起こすための運動神経系へという方向である。刺激が量として受けとられ、有機体内のニューロンを移行し、運動のために使われ、放出されるというのが一連の過程である。外部からの刺激であれば、その刺激とともに外部から量を受けとり、その量の放出が運動を引き起こすと説明されたが、刺激には内部からのものもある以上、特殊行為を引き起こすためにはある程度の量があらかじめ有機体内に貯蓄されていなくてはならない。このとき、うえの引用に見られるようなニューロンの構造が取り上げられるのである。フロイトはそれを下のようなモデルによって図示した。



では、このようなモデルを提出することでフロイトは、有機体内の量の貯蓄の仕組みをどのように説明しているだろうか。

図では Qή が量を表わしている。引用にあるように、量が通ることになるニューロンは、細胞突起と軸索によって区切られた、細胞としてのひとつの単位であり、それらが無数につながったものとして考えられている。このとき量の貯蓄にかんしては、ニューロンどうしは切り離されており、その切れ目が量の伝達にたいしある程度の抵抗すなわち防壁としてはたらくとされており、この点に貯蓄の場所が想定されていると考えられる。「(心的装置は)量の貯蓄を必要としているが、それが可能であるには放出に対抗する抵抗を想定する必要がある。そしてニューロンの構造からすると、抵抗を総じて接触部分におくのが自然である」(EP391)。つまり、それほど強くない刺激であれば、その防壁を量が突き抜けることができず停滞し、そこに滞留するというのである。このようにフロイトは、この滞留によって、有機体内の量の貯蓄を説明するのである。

心的装置の構築 3：疎通と記憶

このようにニューロン間の切れ目に接触防壁を想定することは、精神分析における無意識の問題とも関連している。無意識とは、意識化されない記憶であるということができるからである。「接触防壁理論はさらに次のように活用することができる。神経組織のひとつのおもな特質は記憶、すなわち、ごく一般的にいえば、一回的な過程によってその後も存続する永続的な変化を受けるような能力である」(EP391)。

記憶とは、簡単にいえば、それ自体同一性を保つことになる痕跡が残されることである。このとき接触防壁が、その痕跡の残される場所とされる。ニューロン間の「接触防壁」は、量が伝達されるさい、なんの障害もなく通過されるのではなく、いったんは量の進行を防ぎ、一定の量がたまったら弁が開くように量を通過させるはたらきをもつものとフロイトは考える。そして、いちど量が通過した防壁には、抵抗の減退が一定の比率で残るとされる。これをフロイトは「疎通 Bahnung」と呼ぶ。それが、記憶を形成すると考えるのである。「記憶は(…)疎通によって表わされる」(EP392)。

また、記憶をこの疎通によって捉えるとき、記憶がけっしてひとつではないという経験から、必然的に二種類のニューロンを想定せざるをえなくなる。つまり、記憶の形成のためには抵抗と疎通の生ずるニューロン間の接触防壁がなければならないが、無数の記憶がある以上、新たな刺激を受けとるためのニューロンもつねになければならない。すなわち、接触防壁がなく、量を通過させるだけのニューロンが想定されていなくてはならない。

このことから、量を通過させるだけのニューロンと、ニューロン間に防壁があり、そこに疎通の生ずるニューロンという二種類のニューロンが想定される。前者はφニューロンと呼ばれ、知覚のはたらきを担わされ、後者はψニューロンと呼ばれ、記憶のはたらきを担わされることになる。

φニューロンが、外皮に近い側に位置づけられ、外部からの刺激を受容し、このニュー

ロンがより内部にあるφニューロンへと刺激を伝達するのである。伝達された刺激は、ある一定以上の量のものであれば、φニューロンにおける接触防壁を疎通し、その疎通のさいに残された減退の比率が記憶として残されることになる。また無数に枝分かれしたニューロン内を、さまざまな強度の量が通過し、さまざまな疎通の経路が築かれることによって、無数の記憶が形成されるということも説明されるようになる。

ここまで接触防壁についてふれながら、二つのことを検討した。まとめるなら、ひとつは内部からの刺激にたいする有機体内の量の貯蓄の問題である。内部からの生の困窮にたいして特殊行為を引き起こすためには、有機体内にあらかじめある程度の量の貯蓄が必要であった。そのため、接触防壁を突き抜けるまでにいたらない量が、そこに貯蓄されると考えられた。もうひとつは、記憶の問題である。これは接触防壁の疎通によって説明された。

心的装置の理論構築４：無力な存在である人間の幼児と充足体験

ではもう少し、この「草稿」における心的装置に踏み込んでいきたい。以上みてきたような、ニューロン間の量の移行によって、心的営みはどのように説明されているだろうか。フロイトがこのようにメタ心理学的理論構築によって心的過程を理論化しようとするとき、彼の関心の中心にあったのは、内部からの刺激、つまり生の困窮がどのように処理されるかということである。このとき、φニューロンがさらに二つの過程にわけて考えられるようになる。

内部からの刺激は、外部からのものと違い、φニューロンが直接関与することはなく、φニューロン内に貯蔵された量が放出されることで、特殊行為を引き起こそうとする。しかし、ここでもまた問題が生ずる。人間の幼児は、生まれてからかなりの期間、無力な個体 **hilflose Individuum** であるため、生の困窮から生じる内部からの刺激にたいして特殊行為を自力でなすことができない。このことから、成熟した他人の補助を必要とせざるをえない。この無力な状態の時期に他人によって遂行される特殊行為が、充足体験 **Befriedigungserlebnis** として、以後の人間の生の営みに重大な影響をもつようになる。

この考えは、のちのフロイトの理論化においても非常に重要なものとなる。というのもこのことが、φニューロンを、二つの過程にわけることの動機となり、その二つの過程のいっぽうが無意識という着想ともかかわるようになるからである。無力な状態と充足体験については、まず次のように述べられている。

> (…)人間という有機体は、生まれたばかりではこの特殊行為を引き起こすことができない。それは他人の補助 **fremde Hilfe** によって起こる。(…)人間のこのはじめの無力な状態 **Hilflosigkeit** は、すべての道徳的動機の根源 **Urquelle aller moralischen Motive** である。
>
> 補助してくれる個体 **das hilfreiche Individuum** が、無力な個体 **das hilflose**

のために、外界で特殊行為をおこなったとすれば、無力な個体は反射的な機構によって、内部からの刺激を中止するのに必要な作業を体内でただちにおこなうことができる。この場合、この全体の過程が充足体験 Befriedigungserlebnis を意味してい(る)。(EP410)

このように、人間という有機体は、内部からの刺激にたいする打開策である特殊行為にかんして、かなり長い期間、成熟した他人からの補助に依存しなくてはならない。このことから、のちの精神分析の理論化においても要となる、二つのことが導出される。

ひとつは、この充足体験が他人に依拠したものである以上、それを自分の望むときに、こころゆくまで堪能することができないということ、二つ目は、これと関係したことだが、充足体験を自分の思うように操作できないために、その打開策として想像による仮の満足産出の過程が心的装置のなかに形成されるようになるということである。この点から、心の構造に二つの過程が導入されることになる。これについて、「草稿」でどのように扱われているだろうか。

心的装置の構築5：幻覚と、一次過程、二次過程の導入

有機体が生の困窮に陥り、そのとき近くに成熟した他人がいない場合、どのようなことが起こるとされているかをみていきたい。

ϕニューロンが記憶にかかわっていることはさきほどみた。そのことから、このようなときにはこの記憶を手がかりに、ϕニューロンにおいて、その緊張状態を少しでも緩和させようと有機体内で記憶にもとづいてかつて経験した充足体験を「幻覚 Halluzination」によって再現しようとするはたらきが生ずるとフロイトは考えた。「外皮において、ある対象の知覚に相当するひとつ(あるいは数個)のニューロン備給が起こる」(EP411)。

この「対象の知覚」とは、じっさいの充足体験のさいに経験した知覚であり、たとえば母親の知覚であったり、さらにいえば母親の乳房の知覚であるだろう。このように、充足体験が、その体験を引き起こすための特殊行為をおこなった他人の知覚と結びつけられる。こうして、生の困窮に陥ったとき近くに成熟した他人がいない場合にも、充足体験と結びつけられた知覚への備給がおこり、それによって幻覚によるごまかしが一時的打開策として生ずる。つまり、特殊行為をおこなえないために、量の放出が幻覚の形成のためにもちいられるのである。しかし、もちろん幻覚はあくまで一時的なごまかしであって、根本的な解決にはならない。

最初に欲望によって生気づけられるのは、おそらく対象の回想像であろう。

そしてこの欲望による生気づけがまず引き起こすのが知覚と同じもの、すなわち幻覚であることを私は疑わないが、幻覚にもとづいて反射的な行為が引き起こされるならば、必ず失望を招く。(EP412)

このように、生の困窮の打開策として幻覚が形成されるとしても、それはあくまで幻覚にすぎないため、当然、根本的な解決にならない。「(…)欲望状態にありながら対象への回想に新たな備給をおこない、放出をおこなう場合、対象が(…)幻想の表象のなかにしか存在しないので、満足は起こるはずがない」(EP420)。そこで、新たに「知覚と表象を区別するため」(EP420)の過程が心的装置のなかに要請される。いつまでも幻想の表象では真の満足を獲得することができないので、それがじっさいの知覚であるのか、その知覚の回想つまり幻覚であるかを吟味することが、有機体にとって不可欠となるのである。つまり、現実吟味ということが問題として生じ、このときφニューロンが二つの過程にわけられることになる。

こうして、「幻覚にいたるまでの欲望備給 Wunschbesetzung」の場となる一次過程と称されるものと、「現実標示 Realitätszeichen を正確に扱う」二次過程が、心的装置のなかに想定されることになる(EP422)。

まとめてみよう。人間の幼児は、かなり長い期間、特殊行為を他人に依拠せねばならないため、幻覚による知覚の回想をとおして一時的に生の困窮を回避するという一次過程が形成される。しかし、この過程のみでは、有機体の存続自体危険をきたすことになってしまう。たとえば栄養摂取にかかわる生の困窮にたいする幻覚によるごまかしは、当然のことながら根本的解決にはならない。それゆえ、現実にかんする吟味、具体的にいうなら目の前の対象が幻覚でないかを探るためのはたらきが不可欠となり、それをおこなうために二次過程が形成されるのである。

心的装置の構築 6：メタ心理学的観点と記憶にかんする議論の不徹底

ここまでの議論において、メタ心理学的構想の経済論的観点と局所論的観点を確認することができる。心的装置の原則とされた神経-慣性の原理は経済論的観点のものである。また、φニューロンを二つの過程にわけたことが局所論的観点に通じている。だが、この「草稿」の段階ではこの二つの過程によって、無意識にかんして、フロイトが自己分析と臨床から直観したものを十分に描き出せていない。ニューロン間にある接触防壁の疎通による記憶の説明は、無意識という意識化されない記憶の複雑な構造を理論化するには、限界がある。

フロイトはこのときすでに無意識のものであるような記憶が神経症の病因にあると考えていたわけだが、それを理論的に説明するのに「草稿」における記憶の説明は十分なものとはいえない。無意識を、フロイトの直観どおりに理論的に説明するためには、少なくとも記憶を三層構造によって捉えなければならないからである。その理論的図式は、次節にみる手紙 112 における局所論の図式によってはじめて表現されるようになるだろう。

「草稿」における抑圧

では、本節の最後に「草稿」における抑圧についてみておきたい。だが、さきにも述べたとおり、「草稿」における抑圧について書かれた章は破棄されていた。そのため、ここではわずかになされている発言だけを確認する作業となる。そもそも、なぜこの「草稿」において抑圧をうまく位置づけることができなかったのか。それは、端的に述べるなら、抑圧はフロイトの自己分析と臨床経験から考え出された理論であるいっぽうで、「草稿」はフロイトの神経学の知識を手がかりに、彼が思弁的に構築したものであり、その理論形成の出自自体にずれがあったからである。つまり、抑圧という現象を、量に還元して説明することができなかったからである。

「草稿」の第二部(さきにも述べたが、ここでは臨床経験から得られた理論形成がなされている)で、「抑圧は例外なく、自我にとって苦痛な情動を喚起する表象と関係があり(…)、その表象は、性生活から生じた表象である」(EP442)と述べられている。しかし、ここでいわれている「性」にかかわることを見分ける仕組みについては、第一部で提出されたような純粋に量に還元された心的装置においてまったくふれられていない。たしかに、知覚と表象にかんしては扱われており、それとのかかわりから二次過程が導入されてはいたが、知覚と表象をそれとして認識することと、その表象が性とかかわりをもつものであると判断することには、大きな隔たりがあるといわざるをえない。

また第一部でも、わずかであるが抑圧にかんしてふれられている。そこでは、「敵対的回想像」にたいする防衛のため、あらかじめ備給をおこなわないはたらきとされている(EP415)。ここには、のちの力動論的観点の萌芽をみることができるだろう。しかし、このようなはたらきを想定するためには、「敵対的回想像」をそれとして見分けるための装置ないし審級が必要となるが、第一部の議論においてそのような装置は考え出されていない。そのため、ここには、第二部における臨床経験から導き出された考えが、すでに入り込んでいるといわざるをない。このようなことから、この「草稿」の段階ではまだ、神経学者としてのフロイトがなそうとした理論化と、臨床家としてフロイトが直観から獲得したものとが、いまだ大きく隔たったままなのである。

しかし、この点についてフロイトを非難することはもちろんできない。フロイトもこの点に自覚的であったはずである。だからこそ、この「草稿」は草稿のまま発表されることがなかったのであり、また抑圧にかんする章はフリースに送られることさえなかったのであろう。

さらに、1896年1月1日付のフリース宛の手紙に同封された「草稿K」において、フロイトは次のように述べている。「不快というものがある。それは早すぎる性的刺激によって放出されるらしく、それなしでは結局のところ抑圧を説明することができないのだが、そのような不快がなんに由来するかという問いは、心理学的な謎の深部に通じている。もっとも考えやすい答えは、羞恥心と道徳が抑圧する力であること(…)であろう。(…)しかし、私はこの説明はより深い試験に耐えないのではないかと恐れる。(…)性的過程の正しい理論

が存在しないかぎり、抑圧にさいして作用している不快の発生についての問いはいつまでも解かれないままである」[6]。ここで述べられている「羞恥心」と「道徳」は、フロイトが「草稿」の第一部で試みた枠内で扱うには不可能な主題であるといわざるをえないだろう。またこの発言は、「草稿」を完成させることのできなかったフロイトの反省点であるとともに、神経学の枠組みでは収まりきらない、精神分析という新しい学問を開拓しなければならないことの表明ともとれる。

とはいえ、「草稿」には、のちのメタ心理学の三つの観点の萌芽を確認することができ、さらに、以後フロイトの考察や理論化において基礎となるような着想をみることができる。それらの多くはラカンにまで引き継がれ、展開されていくのである。

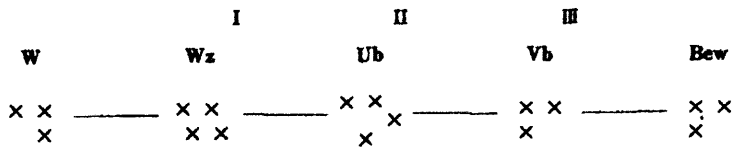
第二節　フリースへの手紙 112 における記憶の三層構造と「書き込み」　―フロイトにおける抑圧 2

記憶の三層構造

ここでは、1896 年 12 月 6 日付のフリース宛の手紙 112 をみていく。これは「草稿」と『夢解釈』の第七章とをつなぐ意味で重要なテクストであり、またラカンがシニフィアン概念の練り上げのさい、フロイトのテクストにその根拠を求めるのもまたこの手紙 112 である。

簡単なあいさつののち、フロイトはさっそく理論的な話に入り、次のように述べる。「記憶 Gedächtnis は単層的ではなく、多層的に存在していて、さまざまな種類の記号のなかに書き込まれている niedergelegt」[7]。このようにフロイトは、この手紙のなかで、無意識の記憶にかんする理論を打ち立てようとする。

前節でみたように、記憶を扱うことは「草稿」のときからすでにフロイトの関心のなかにあったが、「草稿」で提出したニューロン間にある接触防壁の疎通という考えは、記憶のはたらきを彼の思うように描き出すことができなかった。とくにここでいわれている記憶の多層構造を、「草稿」での着想では表現できない。そこで、以下のような新しい図式が提出される。



6 『フロイト　フリースへの手紙』,p.166.
7 石澤誠一『翻訳としての人間』、平凡社、1996,p.38.

この図は、左端のWから右端のBewまで量が伝わっていく過程で、その量にかんする記憶が痕跡として残る仕組みを記したものである。右端のBewとは「意識 Bewußtsein」を示している。

Wは「知覚 Wahrnehmung」を示している。「Wとはニューロンであり、そのニューロンのなかで知覚が生起し、それに意識が結びつく。しかしこうしたニューロンは、起こったことの痕跡 Spur をなにひとつ保持しない」[8]。これについては、「意識と記憶とは互いに相容れず、排除しあう」[9]とはっきり述べられている。この定式ともとれる発言は、『夢解釈』のなかにも現われ、1925年の「マジックノートについての覚書」にまでみられることから、フロイトの一貫した考えであるといえる。もちろん、ここでいわれている「記憶」は一般に考えられるような意識に現われる記憶ではなく、無意識を想定せずには考えられない記憶である。つまり、知覚と意識のあいだに知覚の痕跡が、三層構造をとって意識されないしかたで記憶される、とフロイトは考えたのである。

Wzは「知覚記号 Wahrnehmungszeichen」を示し、「知覚の最初の書き込み Niederschrift であり、まったく意識化されることはない」とされる。Ubは「無意識 Unbewußtsein」を示し、「二番目の書き込み Niederschrift であり、ほかの類の連関、たとえば因果的連関にしたがって配置される」[10]。Vbは「前意識 Vorbewußtsein」を示し、「三番目の書き替え Umschrift であり、語表象 Wortvorstellungen と結びついて」いる[11]。知覚記号と無意識における痕跡が「書き込み」と表現されているのにたいし、ここでは「書き替え」となっている点は重要である。ここに意識において表象として現われるか否かの境目が想定されているからである。

ここには、『夢解釈』においてのちに第一次局所論と呼ばれるようになる図とほぼ同様のものをみることができる(第三節参照)。この記憶の三層構造(知覚記号、無意識、前意識)は、臨床における症状形成の仕組みと夢の考察をとおして獲得された着想である。まず、知覚と知覚記号がわけられているのは、そもそも記憶が単一のものではなくいくつもあることから、刺激を受容する場所と保存する場所とがわけられていなければならないという考えからである。もしこの二つの場所が同一であるなら、新しい知覚にたいしてそれ以前の記憶の痕跡が影響を及ぼしてしまうだろう。「草稿」におけるφニューロンとψニューロンの区別に相当するものである。

次に、無意識が想定されているのは、意識においてなされる思考や論理的経過にはまったく支配されない作業が心的装置内でおこなわれていることを、臨床と夢の経験からフロイトが直観していたからである。知覚記号における痕跡は、単独で意識に現われることはない。それは、必ずべつの痕跡と結びつけられる。その結びつきが理にかなったものであ

---

8 石澤、同上,p.39.
9 石澤、同上,p.39.
10 石澤、同上,p.39.
11 石澤、同上,p.39.ここでは、これまで「書き込み」とされていたものが「書き替え」となっている点に注意していただきたい。

るかそうではないかは、この無意識という場所では問題にならない。しかし、記憶痕跡は必ずなにか他のものと結びつくのである。この場所を想定しないかぎり、症状形成と夢形成を説明することができないとフロイトは考えたのである。

そして、それが前意識において語表象と結びつく。このようにことばと結びつくことで、記憶痕跡は意識における思考に耐えうるものとなり、また思い出そうとする意図によってたやすく意識のなかに現われることができるようになる。無意識から前意識への移行が書き込みではなく書き替えとなっているのは、前意識における記憶痕跡と語表象との結びつきを強調したかったからであろう。フロイトは、以上のような図式を提出することで、無意識であるような記憶にかんするみずからの考えを示すことができた。この記憶の三層構造は、独創的なものであり、のちのフロイトの理論だけでなく、ラカンのシニフィアン概念の練り上げもまたこの図式に則ってなされる。この意味では、フロイト/ラカンの無意識の理論にかんする支柱であるといえるだろう。

手紙 112 における抑圧

では、この手紙 112 において抑圧はどのようにいわれているだろうか。ここでは、書き込みや書き替えという表現との関連から、翻訳のやり損ないとして提出される。

> 翻訳 Übersetzung がうまくいかないこと、それが臨床上、抑圧と呼ばれていることです。こうした抑圧が起きる動機は、翻訳によっていつも生じる不快の放出です。それは、放出されるかもしれない不快がさながら思考障害を引き起こすかのようであり、この思考障害が翻訳作業を許容しないのです。[12]

ここで翻訳と呼ばれているのは、書き替えといわれていた無意識から前意識への移行である。ここでの抑圧のはたらきも、「草稿」のときと同じように、不快が生じることにたいする事前策として導入されている。そして、この不快が生じる出来事としては性にかんすることがあげられている。つまり、性にかかわるものの痕跡は不快を生じさせるため、抑圧されるというのである。

さらにここでは、「すべての性的体験が不快を放出するわけではなく、性的体験は快を放出する」[13]ともいわれ、そこから強迫と抑圧の違いが説明される。この違い自体はのちのフロイトにおいても有効であるとはいえないのでここで取り上げることはしないが、この発言自体には注目しておきたい。なぜならこの発言から、多くの性的体験は不快を放出するということが前提とされていることがうかがえるからである。そしてその根拠としては、前節でふれた文化的な「羞恥心」と「道徳」を念頭においているとしか考えられず、そうである以上ここでもまた神経学的な理論化と臨床家としての直観が乖離しているといわざ

---

[12] 石澤、同上,p.40.
[13] 石澤、同上,p.41.

るをえない。つまり、ここでも抑圧はメタ心理学的考察の枠をはみ出したまま提出されているのである。

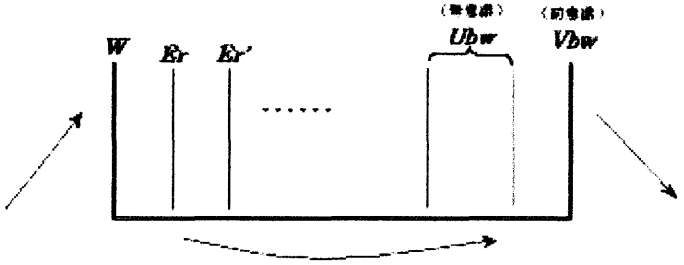
だが、もちろんこれもまた「草稿」と同様、フロイトみずからが発表したものではない。友人に自分の考えを検討してもらうために書いたものにすぎない。それゆえ、その内容を批判することはできない。そこでわれわれは、フロイトがメタ心理学的な議論をはじめて発表した『夢解釈』の第七章をみていくことにする。そこには、「草稿」とこの手紙 112 でふれた考察を発展させたものをみることができるだろう。

第三節　『夢解釈』第七章における無意識と抑圧　―フロイトにおける抑圧 3

『夢解釈』における心的装置の構築

『夢解釈』の第七章「夢事象の心理学」(以下『夢解釈』第七章とだけ記す)は、フロイトがはじめてメタ心理学的な理論をまとまったかたちで発表したテクストである。そこでは、のちに第一次局所論と呼ばれる図式が提出されている。この試みの根本的狙いには、精神分析の観点から、心的構造を図式化すること、それもなるべく簡明に図式化することがあったはずである。

しかし、じっさいのテクストは容易に読解可能なものとはいいがたい。とくに抑圧の説明は非常に難解なものになっている。それは、これまでみてきたように性にかかわるものを抑圧するということを、メタ心理学の観点から説明することの困難さに原因がある。さらにその原因を問うなら、フロイトの発見したものとフロイトの論者としての欲望が相容れないものであったということが考えられる。まずはフロイトがこの『夢解釈』第七章のなかで提出した心的構造の理論構築をたどっていくことにする。『夢解釈』第七章には以下の図式が記されている。これは、ほぼ手紙 112 と同じものである。



左端の右斜めうえを向いた矢印と右端の右斜めしたを向いた矢印は興奮 Erregung の伝わる方向を示している。このように、「草稿」において量とされていたものがここでは興奮となっているが、心的過程をエネルギーの移行によって捉えようとする観点は同じである。

『夢解釈』第七章においては、それを、知覚末端から運動末端へと興奮が伝わる経過として捉えようとしている。そのさい、興奮の伝達とともに記憶の書き込みの移行も同時に起こるという点が重要である。この記憶の書き込みの移行は、図の縦線によって区切られ

た、フロイトが組織 Systeme と呼ぶ三つの場所(回想組織、無意識、前意識)を、各々の規則したがった変形が加えられ、書き込まれることになる。

まず、図の知覚末端のすぐ右隣にある“Er”であるが、「回想 Erinnerrung」組織を示している。そこになされる書き込みは、回想痕跡 Erinnerungsspur と呼ばれる。これは、じっさい記憶がひとつということはありえず、無数あるという事実から設けられた。つまり、記憶が知覚末端に直接書き込まれるなら、次からのものが第一の書き込みの影響を被ってしまい、これでは記憶が無数にあるというじっさいの経験を説明できない。そのため、知覚の場所と記憶の場所とはべつに設定しなければならない。この記憶のはたらきを担うのが回想組織である。「草稿」では、ϕニューロンとϕニューロンの区別に、手紙 112 では、知覚と知覚記号の区別に相当する。

次に無意識が置かれているが、これは臨床経験から想定されたものである。「回想が無意識状態のままであらゆるその作用を展開できることに疑いの余地はない」(TD516)。つまり、夢と症状の考察から、回想痕跡がなんらかの変形、すなわち圧縮と移動あるいは転換がなされるということにフロイトは確信をもっており、その作業の場として無意識が記憶組織と前意識のあいだに置かれているのである。

「諸組織中のどれにわれわれは夢形成への動因を求めるべきか。それは無意識の組織である」(TD517)。この場所に書き込またものは、イメージ Bild と呼ばれる。ここに、手紙 112 でいわれていた「ほかの類の連関、たとえば因果的連関にしたがって配置される」という作用も考慮に入れるべきであろう。この連関が、『夢解釈』第七章では無意識における夢作業 Traumarbeit としての圧縮と移動として練り上げられたのであった。しかしこの連関は、われわれが意識において共通にもっているとされる感覚や思考形式によってなされるものではないため、そこでの形成物は、意味不明なもの、支離滅裂なもの、あるいは荒唐無稽なものとして現われるのである。

最後に前意識であるが、これは本稿で注目する抑圧とかかわりのある組織である。これは意識に直結した組織であり、この組織と無意識とのあいだの境界が強調される。「いっぽう(前意識)がたほう(無意識)の活動に批判を加え、その結果意識化をおこなえなくなるよう」(TD516)にさせる。「批判を加える側の審級 Instanz は、批判を加えられる審級よりも、意識にたいしてより親密な関係を保って」おり、「前意識は意識とのあいだに屏風のように立っている」(TD516)。ここで組織が審級といいかえられているが、それは、裁判の判決のように、いっぽうがもういっぽうへと移行することの是非を決定するからである。

この「批判を加える側の審級」が前意識である。ここに書き込まれたものは、思考 Gedanke と呼ばれる。この思考は、注意を向けさえすればいつでも意識に呼びよせることができる。また手紙 112 においては語表象が取り上げられ、言語と結びつけられていたが、『夢解釈』第七章のなかでも言語記号 Sprachzeichen とのかかわりが指摘されている(TD547)。このように、前意識における思考は言語と結びついており、そのため「ある程度の強度の獲得とか、注意と呼ばれるべき機能のある種の配分とかいうような条件が満たさ

れたならば、その組織中の興奮の諸過程は遅滞なく意識面にのぼ」(TD517)らせることができるのである。

充足体験と心における欲望満足という傾向性

以上のように提出された心的装置によって、心の欲望満足 Wunscherfüllung の過程が説明される。この観点と説明のしかたは、「草稿」において論じたものの焼き直しであるといえる。

フロイトはまず、「人間の心というものは最初、できるだけ自分を無刺激な状態におこうという努力をつづけていた」(TD538)と述べる。これは「草稿」における神経-慣性の原理に相当しており、この『夢解釈』第七章がメタ心理学的観点に立ったテクストであることを示している。ここでもまず、この原理に則り、外部からの感覚的興奮を運動的なしかたで放出するという反射装置の図式による心的装置の練り上げがなされる(TD538)。しかしここでも話題はすぐに、外部からではなく生の困窮(TD538)と呼ばれる内部からの訴えかけへと移っていく。

> 空腹の子供は、無力な状態であるため hilflos、泣き叫んだり、手足をばたつかせたりするだろう。しかし、状況は少しも変わらない。(…)子供の場合、他人の助け fremde Hilfeleistung をとおして、内部からの刺激を解消する充足体験 Befriedigungserlebnisses の経験がなされるときはじめて、ひとつの回転が現われうる。(TD539)

この発言は「草稿」における特殊行為の議論に相当する。「草稿」と同じように、ここでも最初の特殊行為が他人に依拠したものであることが強調され、この経験が充足体験となり、そのさいの知覚とともに記憶されるのである。

> この(充足)体験の本質的一構成要素は、ある種の知覚の出現(たとえば栄養摂取)であり、この知覚を回想するイメージは、そのとき以来、欲求興奮 Bedürfniserregung の記憶痕跡 Gedächtnisspur と連想的に結合されたままになる。この欲求が次に現われるや否や、さきに成立している結合関係のおかげで、ひとつの心的揺動 psychische Regung が生ずるであろう。この心的揺動は、充足体験の知覚の回想であるイメージへと備給され、知覚そのものをふたたび喚起しようとし、結局のところ最初の充足の状況をふたたび作り出そうとする。われわれが欲望 Wunsch と呼んでいるものは、この揺動にほかならない。知覚の再現が、欲望満足 Wunscherfüllung である。そして欲求興奮によって完全な知覚備給の起こることが、欲望満足への最短の道である。(TD539)

ここでいわれていることは、「草稿」において考えられていた心的装置と同じものである。このように、内側からの刺激にたいしてはまず、かつて経験した充足体験を手がかりに、その体験と連想関係をもつ知覚の再現によって対処するというのが、フロイトの考える心的装置の、「草稿」から一貫した基本構造である。これが、最初の心的活動 psychische Tätigkeit(TD539)とされる。

さらに、「欲望が幻覚形成 Halluzunieren に終わるような、心的装置の原始的状態を仮定することを妨げるものはない」(TD539)といわれ、充足体験とかかわる知覚の再現として、幻覚が取り上げられる。

ここで、フロイトにおける欲望というタームのもちいかたに注目しておきたい。フロイトがメタ心理学的観点から性にかかわることを定義するとき、ここでの欲望の捉えかたが重要なものとなる。うえの引用では、充足体験とかかわる知覚を再現しようとする心的揺動が、欲望 Wunsch であるとされていた。これは、「草稿」における着想をさらに推し進めたものであるといえる。「草稿」においても、欲望は「ϕにおける量の緊張の増大を含んでおり」、「内側からの刺激の加算によって生み出される」(EP414)とされた。ϕとは、記憶の書き込まれる場所であり、その書き込みから量の移行がはじまるとされていた。

『夢解釈』第七章における欲望も、この着想の延長上において定義されている。重要なのは、欲望が神経学あるいは生理学的観点からの断絶によって定義されている点である。たとえばうえの引用には、「この知覚を想起するイメージは、(…)欲求興奮の記憶痕跡と連想的に結合されたままになる」とあり、この結合から心的揺動すなわち欲望が生ずると述べられている。このとき、知覚の回想像が結びつけられる興奮の記憶痕跡とは、心的装置のなかに書き込まれたものにほかならない。これは純粋な生理現象とは一線を画するものであり、このときフロイトはこの書き込まれたものによって精神分析が扱うべき欲望の領域を切り開いているといえるだろう。それゆえ、ここでフロイトの扱おうとしている対象は、神経学や生理学におけるような有機体としての人間ではない。ここには、いずれラカンが言語に住み着いた語る存在と呼ぶようになる主体の萌芽を確認することができるのである。

心的装置の構造に話を戻そう。フロイトは、この幻覚のはたらきしかもたない心的装置は存在しないと述べる(TD572)。このはたらきのみであるなら、心的活動は破綻をきたすことになるからである。「ある悲痛な生の体験がこういう原始的思考活動を、より合目的な、二次的な思考活動へと変容させたにちがいない」(TD539)。「悲痛な生の体験」とは、「満足がやってこないのに、欲求がそのまま持続する」(TD539)経験である。この悲痛な生の体験を回避するため、最初の心的活動とはべつのものが想定される。それは、「回想イメージから出発して、外界との望ましい同一性の作成へと導くような」(TD540)心的活動である。こうして、この外界との同一性を目指すという意味での合目的な思考活動をおこなう過程が、心的装置のなかに想定されることになる。

「草稿」でなされた一次過程と二次過程という表現が、『夢解釈』第七章のなかでもも

ちいられる。だが、このテクストのなかではさらに、一次過程が無意識と、二次過程が前意識と結びつけられる(TD569)。ここに、意識、前意識、無意識と一般に呼称されている第一次局所論の成立をみることができる。

さらに、ここでの局所論では、回想組織、無意識、前意識それぞれの場所特有の記憶の書き込みが区別されている。回想組織のものは回想痕跡と、無意識のものはイメージと、前意識のものは思考とそれぞれ呼ばれていた。回想痕跡とイメージは一次過程に属し、内側からの刺激が生じたなら、欲望によって、充足体験の知覚の再現のためにもちいられることになる。これにたいし、思考は、二次過程に属し、一次過程によって獲得された回想が、外界と一致するかどうか吟味するのである。

『夢解釈』第七章における抑圧とその理論的説明の不備

そして、このとき二次過程は無意識のイメージが前意識へと書き替えられるさい、そこに批判を加えるという審級の役割もなしている。ここに抑圧が想定されているのである。つまり、無意識におけるイメージがそのまま意識に現われると、意識のなかで不具合が生じてしまうようなイメージがあり、そのようなイメージは、あらかじめ意識から遠ざけられるか、無意識特有の作用によって変形したかたちで意識に現われる、というのである。このように、意識に現われると不快が生じてしまうイメージを、あらかじめ意識から遠ざけておこうとすることが抑圧のはたらきである。。では、『夢解釈』第七章において抑圧はどのように説明されているだろうか。

> 幼児期に発し、壊れることなくかつ制止もされないこの欲望の揺動のなかには、それが満足されることで、二次的思考の目標表象との矛盾の関係へ入り込んでしまうようなものがある。これらの欲望の満足は、もはや快の情動ではなく不快の情動を喚起するだろう。そしてこの情動変換 Affektverwandlung こそ、われわれが「抑圧」と名づけているものの本質をなす。どのような原動力によって、このような変換がおこりうるかということに抑圧の問題があるが、ここではそのことについては簡単にふれておくだけにとどめておこう。われわれは、このような情動変換が発達の経過につれて起こるということ(子供の世界のなかにはじめのうちは欠けている嫌悪感というものが、どのように出現してくるかを考えていただければよい)、そして、この情動変換は二次的な組織の活動に結びつけられているということを確認しておけば充分である。(TD573,カッコ内はフロイト)

一次過程において快楽であったもののなかには、「二次的思考の目標表象と矛盾の関係に入り込んでしまう」もの、つまり意識において和解しがたいものがある。それにたいし情動変換が生じ、それらが不快なものとなる。抑圧はこの情動変換にかかわるものとされる。不快の表出は、心的装置の大原則つまり神経-慣性の原理に反するものであるため、な

んらかの方法によって回避されなければならない。そのためそれが意識にのぼらないための力がはたらく。こうして、不快の表象は抑圧によって意識から遠ざけられるのである。

ここには力動学的観点をみることができ、この考えによって夢と症状形成の説明がなされる。つまり、意識へいたろうとする力とそれを妨げる力の妥協として、不快な表象がそのまま意識されることの代わりに、夢作業であれば圧縮と移動がはたらいたり、ヒステリーの症状であれば身体に転換したりするということが起こるという、精神分析固有の考えが成立することになる。

しかし、このような考えにたいし、たとえばサルトルの立てたような次のような問いが当然提出されることは避けられないだろう。「抑圧されるべき衝動 impulsion を見分けるという意識をもつことなしに、どうして検閲は抑圧さるべき衝動を見分けることができようか」[14]。

サルトルによれば、無意識などというのは自己欺瞞 mauvaise foi のひとつであり、意識は知っているにもかかわらず知らないふりをしているにすぎない。この問いは、精神分析の立場からすると、もっとも素朴な問いのひとつのようだが、同時に核心をついたものでもあり、それゆえ精神分析を取り上げようとする者が何度もそこへ戻ってこなくてはならないような問いではないだろうか。

このような問いと遭遇するたびに、無意識の主張は、意識にのぼらない領域のものを扱うとはどういうことなのか、またそれを論じていく主体とはどのようなものなのか、という問いへ回帰せざるをえなくなる。だが、このような問いをわれわれが引き受けるためには、精神分析の理論にかんしてまだ多くのことを論じなければならないだろう。まず、精神分析が、サルトルが提出したようなたぐいの問いにかんしてどのように答えるかを検討しなくてはならない。そのために、抑圧の仕組みについて、それが意識されずに起こっていることにかんして納得のいく説明を要するだろう。しかし、『夢解釈』期のフロイトの説明は、けっして十分なものとはいえない。引用では、抑圧の本質とされる情動変換が、「発達の経過」すなわち成長する過程において備わること、またそれが二次的な組織すなわち二次過程によってなされることが述べられているのみである。

しかしここにすでに、困難な点がある。二次過程は、「草稿」においても、『夢解釈』第七章においても、充足体験にかかわる知覚を幻覚として再現する一次過程のはたらきにたいする、いわば現実吟味のはたらきを担わされた場所であった。それは、「外界との望ましい同一性」を目指すとされていた。このはたらきのなかに、「二次的思考における目的表象と矛盾」をきたす表象にたいし情動変換をおこなうはたらきを含むということは、二次過程に新たな機能を設定していることになるため、そのために説明が要されるはずであるが、それについてはなにもふれられていない。つまり、ここには議論の逸脱があるのだが、それについてなんの断りもないのである。

さらに検討すべきは、この「二次的思考における目的表象と矛盾」をきたす表象とは、

---

[14] サルトル『存在と無 I』、松浪信三郎訳、人文書院、1956,p.164.

引用では「幼児期に発」するものとされているが、そのすぐあとでそれが性にかかわることである明言されている点である。「幼児的なものから発する性的な欲望の揺動だけが、すべての精神神経症の症状形成の原動力を提供する」(TD574)。このようにここでも、「草稿」、手紙 112 と同じく、抑圧されるものは性にかかわることとされている。しかし、フロイトは性にかかわることが抑圧されることの仕組みを、メタ心理学的観点から追求しようとしない。「どのような原動力によって、変換がおこりうるかということに抑圧の問題があるが、ここではそのことについては簡単にふれておくだけにとどめておこう」(TD573)。さらに、抑圧されたものを一貫して性にかかわることに結びつける根拠については、「もしわれわれがすでに神経症、とくにヒステリーの心理学にかなり深く通じていなかったとしたら、ここで答えを出すことはできなかったであろう」(TD567)と、それが臨床経験からえられた直観にもとづいたものであることを主張するのみで、その仕組みを理論的に説明しようとはしていない。

このように、メタ心理学の理論形成にあてられた『夢解釈』第七章において、抑圧が導入されるとき、その仕組みの話題になると、臨床経験から獲得される直観を根拠とするのみで、二次過程がどのように性にかかわることを抑圧するかという説明はなされない。このように『夢解釈』第七章においても、フロイトの抑圧にかんする理論構築はうまくいっていないのである。

『夢解釈』期におけるフロイトの論者としての欲望と無意識という概念の齟齬

しかし、このうまくいかなさはじつは、抑圧が無意識と直接かかわりをもつ観念であることと、このときの論者としてのフロイトの欲望からすると、必然の結果であったとわれわれは考える。フロイトが無意識を想定することで扱おうとする性にかかわることは、生理学や生物学、あるいは神経学などによって扱うことのできないものである。だが、それでもフロイトが無意識にかんする理論を構築しようとするとき、彼はそれらの分野の考えかたに依拠しながらおこなおうとしたのである。

では、この時期の論者としてのフロイトの欲望とは、具体的にいうとどのようなものと考えられるだろうか。それは、臨床経験の直観によってみずからが発見したと確信している無意識を、万人の共有する知の場所に提出すること、つまり、「意識」において扱いうる学問の対象たらしめることであったとはいえないだろうか。

第一節でみたように、「草稿」では神経学のタームをもちいて理論が組み立てられていた。それにはもちろんフロイトのもともとのキャリアが神経学者であったことを無視することはできないが、それ以上に、無意識という厄介な概念を、さらにはそれを扱う精神分析を、新しい学問として承認してもらうため、それ自体すでに科学として成立している分野のものを拠り所とするためであったとも考えられる。つまり、無意識という概念を、また精神分析という新しい学問を承認してもらうためには、すでに共有されうるものとして認められている分野においてそれらがいいかえられる必要があるという考えから、神経学

がもちだされたのだと考えられるだろう。

さらに、このような欲望は、みずからの発見した新しい概念が存在していることを前提としている。それらが存在しないのであれば、学問の対象として万人が扱うことができないため、学問の領域から当然排斥されることになるからである。夢作業をおこなう場所として無意識について言及するさいの「回想が無意識状態のままであらゆるその作用を展開できることに疑いの余地はない」(TD516)といういいかたや、抑圧にかんして「もしわれわれがすでに神経症、とくにヒステリーの心理学にかなり深く通じていなかったとしたら、ここで答えを出すことはできなかったであろう」(TD567)という表現は、両方とも、個人的な経験を拠り所とした断言以外のなにものでもなく、そこでは無意識と抑圧がじっさいに存在し、そうである以上、学問の対象として共有可能であるということがなんの学問的手続きを経ることなく提出されているといわざるをえない。

しかし、このような欲望と、そこから前提とされるような存在は、フロイトが発見したものとはそもそも対立したものであった。無意識は、意識化されてしまうとき無意識ではなくなるだろうし、さらにラカンの考察を経るなら、抑圧と無意識にかんする考察は存在が前提とされる以前に、存在そのものを問いに付す契機となるような概念である(第三部第三章第二節を参照されたい)。無意識がこのような概念である以上、『夢解釈』第七章におけるフロイトの抑圧の説明は、フロイトという論者がその存在を証明しようという欲望をもったとき、その欲望自体にすでに、無意識の性質を逸脱したものが含まれていたといえるだろう。それゆえ、『夢解釈』第七章における説明は必然的にうまくいかなかったのである。

だがフロイトは、挫折や疑いをくり返しながらも、その学問にたいする真摯さゆえに、みずから直観したものを追及するという欲望のうえで譲らなかった。そして、抑圧をめぐる彼の議論は、時間をかけその議論自体が変貌を遂げることになる。その変貌とは、抑圧が存在していることを証明する素材が時間を重ねることで増えていったというような証明にかかわることではなく、フロイトが妥協することなく無意識とかかわりつづけたことによって、無意識を論じる主体としてのフロイトの立ち位置の変化から生ずる変貌である。

われわれは、次章で1915年の一連のメタ心理学の論文を取り上げながら、この変貌をみていきたい。

第二章　メタ心理学再構築期におけるフロイトの回転と抑圧理論の練り上げ

「科学的」ということが、よくいわれる。たとえば、「この商品の効果は科学的にも証明

されています」というように商品の宣伝文句などでよく耳にするが、このときこの「科学的」ということばにはどのような意味が込められているのだろうか。そこには、“science”の語源である“scire”(知る)の強調された意味が響いているように思える。つまり、実験や観察を経たことで、この商品の効果は万人の知りうるものになっており、保証されている、というようなことがこの「科学的」ということばから連想されるのではないだろうか。

もちろん、これが間違っているといいたいのではない。しかし、この意味は、「科学」の一側面しか捉えていないということを強調しておきたい。「科学的」といわれるとき、科学者にとっての科学の側面、つまり、なにか新しいことを発見するという科学の側面のほうは、しばしば忘れられがちである。たしかに、実験や観察をおこない、ある知を証明したり、万人の知りうるものにすることも科学者の仕事のひとつであろう。だが、当然のことながら、科学者は周知のこと、既知のこと、すなわちすでに知れわたっていることを証明しようとはしない。では、科学者は、なにを証明しようとしているのか。それは、みずからの立てた仮説である。

仮説とはなんだろうか。それは、科学者の思考のなかで生じた知である。科学者は、たとえば既知の知どうしを結びつけることで、新しい知を、みずからの思考のなかで仮説として立てる。そしてこの知を証明するために、実験や観察をおこなうのである。逆にいえば、仮説がなければ、実験も観察もないだろうし、新しい知の産出、つまり発見ということもなくなるだろう。この意味で、仮説とは「科学的」であることに不可欠なことといえる。

このようなことから、ある論者が新しい学や理論を打ち立てようとするとき、仮説を立てることは不可欠なのである。このとき、その学や理論の性質から度合いの差こそあれ、論者は必ず賭けの状況に置かれる。この賭けにおいて論者の立っている場所は、乱暴ないいかたに聞こえるかもしれないが、芸術家が立たされている場所と共通するところがある。この論者の賭けとは、たとえばメルロ＝ポンティがバルザックとセザンヌについて、彼らは「最初の人間が語ったように語り、かつて誰ひとり描いたことがなかったかのごとく描く」[15]と述べたことと関係している。「芸術家は、その作品を、ちょうどある人間が、最初のパロールを、それが叫び以外のものになるかどうかも知ることなく発するように、投ずる」[16]。ここに賭けがある。この賭けがなされないかぎり、新しいものが生じることはない。学問の領域でいうなら、つまり仮説が立てられることなしに、新しい知が獲得されることはないのである。

だがいっぽうで、これが賭けである以上、そこには困難がつきまとう。「セザンヌのぶつかった困難は、最初のパロールがもつ困難である」[17]。またセザンヌ自身は、絵を描くことの困難について、「私は画布を五〇センチほど埋めるために、自分を蝕み、死ぬ思いを

---

15 メルロ＝ポンティ『意味と無意味』、滝浦静雄他訳、みすず書房、1982,p.24 .
16 メルロ＝ポンティ、同上,p.24 .
17 メルロ=ポンティ、同上,p.25.

する」[18]と述べた。精神分析という新しい学を創設するときのフロイトもまた、これと同じような困難と遭遇していたにちがいない。だが、この困難こそ賭けをなすことの代償であり、そのためこの困難を引き受けることによって、論者としての立ち位置を回転させることができるのではないだろうか。

われわれは第二章において、フロイトが無意識を理論化するための仮説として欲動を導入する過程をみていく。この観点から、抑圧が欲動の運命として位置づけられるのが確認できるだろう。このときフロイトは、前章にみたように、無意識を導入するとき既存の学問を参照とすることはあっても、全面的にそこに依拠することはない。こうして抑圧は、『夢解釈』期のものより分析経験に密着したしかたで理論化されることとなった。だが、同時にそこには、新しい学問の被るべき試練が待ちかまえてもいた。しかしフロイトは、精神分析を新しい学を打ち立てようとする欲望のうえでの妥協することなく前進するのである。

第一節　仮説としての欲動の導入とフロイトにおける性的なもの

欲動という仮説の導入

前章において、フロイトがみずからメタ心理学と称する理論構築の初期のものにおいて、抑圧の位置づけがうまくいっていないのをみた。その理由としてわれわれは、無意識という知の性質と、その発見者であるフロイトの論者としての欲望が相反するものであったという点をあげた。このときのフロイトの欲望とは、みずからの発見した無意識を知として承認してもらうこと、さらにそれが存在しているということを万人に知らしめることであったといっていいだろう。だがそれは、無意識という概念を意識のもと扱うことを意味している。これは、無意識という概念に反することであった。この観点からわれわれは、抑圧という概念に注目したい。

抑圧は無意識を形成するものとして提出されたわけだが、フロイトはその抑圧の仕組みをうまく説明できなかった。その理由は、結局、抑圧されるものである性にかかわることが精神分析ではどのように捉えるべきかを明確に概念化していなかったためであったといえるだろう。1896年1月1日付のフリース宛の手紙に同封された「草稿K」のなかで、フロイトはすでに「性的過程の正しい理論が存在しないかぎり、抑圧にさいして作用している不快の発生についての問いはいつまでも解かれないままである」[19]と述べていた。

フロイトのいう性にかかわることを通俗的に表象やイメージによって捉えた場合、次のような反論が十分に考えられる。つまり、性にかかわることを抑圧するというのは、いち

---

18 ガスケ『セザンヌ』、與謝野文子訳、岩波文庫、2009,p.358.
19 『フロイト　フリースへの手紙』,p.166.

ど意識化されていなければ不可能ではないだろうか、そうであるなら、無意識などというものはなくて、そう思われているものは意識の操作のひとつでしかない、というような反論である。抑圧の仕組みを説明できない以上、このような反論はつきまとうだろう。しかし、抑圧とはそれ自体が無意識にかかわる概念である以上、実証的なしかたで説明されうる過程ではない。ここにひとつの困難があるわけだが、フロイトが探究している分野、つまり彼自身が創設することになる精神分析という学問は、それが無意識を扱うものである以上、はじめからこの困難に晒されている。つまり、もともと実証的かつ客観的という意味での科学的なしかたで提出可能な研究対象をもたないのである。

このときフロイトに要請されることは、仮説として、みずからの考えを提出することである。そして、1915年にメタ心理学にかんする論文がまとめて書かれた時期において、フロイトは精神分析の仮説として、欲動という概念を提出することになる。ここから、われわれはこの時期をメタ心理学再構築期と呼ぶことにする[20]。ここでわれわれが注目したいのは、メタ心理学期の五つの論文のうち、「欲動とその運命 Triebe und Triebschicksale」、「抑圧」、「無意識」である。まずは、論文「欲動とその運命」の冒頭を取り上げたい。その冒頭でフロイトは次のように宣言している。

> 科学というものは、厳密に定義された明晰な基礎概念のうえに構築すべきであるという主張が、これまで何度もくり返されてきた。しかしじっさいには、いかなる科学といえども、もっとも厳密な科学といえども、このような定義によってはじまるものではない。科学活動の本来の端緒は、むしろ現象を記述すること、そしてこの現象の記述を大きなグループに分類し、配置し、相互に関連させることにある。この最初の記述の時点から、記述する現象になんらかの抽象的な観念をあてはめることは避けがたい。この抽象的観念は、新たな経験だけによってえられるのではなく、どこからかもち込まれたものである。そして、経験的な素材を処理するさいにも、抽象的な観念を使用することはさらに避けがたいことであり、これがのちに科学の基本概念と呼ばれるものとなるのである。こうした観念には、最初はある程度の不確定性がつきものであり、明確な内容を示すのは不可能なのである。(TT81)

ここでフロイトが主張していることは、本章の冒頭でわれわれが科学者にとっての科学として取り上げた科学の側面である。つまり、それは新しい発見に携わる科学者の科学である。重要なのは、発見という出来事が、経験からのみ得られることではないということである。「科学活動の本来の端緒」とされている現象の記述、そのグループ分け、さらに分

---

[20] メタ心理学再構築期として、本稿では、1915年の「欲動とその運命」、「抑圧」、「無意識」のほかに、抑圧が三段階に分類される1911年の「自伝的に記述されたパラノイアの一症例にかんする精神分析的考察」を取り上げていく。

類された要素を関連づけること、これらはすべて科学者の思考のなかでおこなわれる。その関連づけから科学者は新しい知を仮説としてまず立てる。その仮説のために抽象的観念がもち出される。いかなる科学的活動のはじまりも、このようなプロセスを経なければならない。

この仮説のためにもち出された抽象的観念を、フロイトは「取り決め Konventionen」と呼ぶ。そして、「心理学の分野においても、必要不可欠でありながら、取り決めにもとづき、暫定的で、かなり不明確な基礎概念がある—それが欲動という概念である」(TT81)と、欲動概念を提出するのである。このとき抑圧は、欲動におけるひとつの運命として提出されることになる。これは、抑圧を仮説として提出したことを意味する。

メタ心理学再構築期においてフロイトは抑圧を、欲動の運命という仮説として提出した。ここに、フロイトの論者としての欲望の変貌をみることができるだろう。『夢解釈』期においては、みずからの発見を万人に認知させたいという欲望がみられた。しかし、このメタ心理学再構築期には、べつの欲望がまさっているようである。それを、ここでは前進することの欲望と呼びたい[21]。

フロイトは、1895 年 10 月 20 日付のフリース宛の手紙あるいは 1920 年の「快楽原則の彼岸」の最後で、フリードリヒ・リュッケルトの次の詩を引用している。「飛んで行けぬのなら、足を引きずってでも行かねばならぬ。(…)聖なる書も教える。足を引きずることは、罪にはならぬと」。「快楽原則の彼岸」では、この引用のまえに「われわれの科学的認識の道の遠さを慰めるかのように」(JL272)と述べられている。このメタ心理学の再構築も、みずから発見したものを証明するためだけではなく、前進させるために練り上げなおされたのだと考えられる。

欲動概念の練り上げ 1：精神的なものと身体的なものの境界概念

この時期の抑圧の仕組みがどのように説明されたかをみていくためには、欲動 Trieb という概念がどのようなものかを理解しておかなくてはならない。欲動は、ことばとしては、またそれに該当するような事柄は、フリース宛の手紙のなかや「草稿」[22]あるいは『夢解釈』のなかにも確認できる（ただし「欲動」というタームはほとんどもちいられることはない)。だが、この「欲動とその運命」においてはじめて、欲動は仮説として提出される。この欲動という仮説によって、精神分析という新しい学の前進がはじまるのである。

本稿において注目したいのは、この欲動という概念によって、性が精神分析独自のしか

---

[21] cf.ラカンはフロイトのこの欲望について次のように述べている。「真理を渇望するなかでフロイトはこういっています。「事情はどうあれ、ともかく、進まなくてはならない」、と。なぜなら、どこかに無意識が現われているからです」(Sé XI,p.34)。

[22] 「草稿」のなかでフロイトは次のように述べている。「ϕはここでは量(Q)に委ねられており、こうして組織の内部にはあらゆる心的活動を培う動因が生ずる。この力をわれわれは意志として、つまり欲動の後継として知っている」(EP410)。フロイトは、ここでニーチェへの力の意志を、欲動の後継として捉えようとしている。

たで扱われるのが可能になったということである。つまり、この概念によって精神分析における性は通俗的理解、つまりたんなる表象やイメージによる理解から切り離されることになる。このときはじめて、精神分析への抑圧のかんする素朴な批判、すなわち性にかかわることを抑圧するというなら、あらかじめ性にかかわることがなにか意識が知っていなければならないという批判を退けることが可能となったのである。

欲動にかんしてみていくまえにまず断っておかねばならないのは、この概念形成にはフロイトの歩みにおいてかなりの紆余曲折があるということである。ここではそのすべてをたどることはできないが、フロイトの理論形成において欲動が本格的に導入された「性理論三篇」(以下「三篇」と記す)と論文「欲動とその運命」における欲動にかんしてはみておかねばならない。

また、もうひとつ断っておかねばならないことがあるが、それは「欲動」という訳語についてである。フロイトの“Trieb”をどう訳すかは、フランス語、英語、日本語、いずれも言語においても訳者の解釈によってまちまちである。たとえばフランス語においては、“instinct”、“pulsion”など、英語でも“instinct”、“drive”、日本語では、「本能」、「欲動」、「衝動」というふうに訳されている。

本稿では、「欲動」という訳語を採用し、「本能」、「衝動」という訳語はもちいない。それは、「本能」と訳した場合その語の一般の響きにはどうしても生理学や生物学で扱われる分野がつきまとってしまうが、フロイトが“Trieb”を仮説として提出するのは、もともとそのような分野と精神分析とを切り離すためだからである。また「衝動」をもちいないのは、「衝動」という語の一般の響きには、教条主義に反し個人の解放を唄う広い意味でのロマン主義や、また秩序や規範を覆そうとするシュールレアリスムの傾倒と結びつくものが感じられるが、ラカンに則ってフロイトを読もうするわれわれとしては、そのいずれに与することもできないからである。以上のような理由から、われわれは学術用語の趣が強く、一般にもちいられることの少ない「欲動」という訳語を採用することにする。

欲動という概念がフロイトによって本格的にもちいられるようになるのは、1905年の「性理論三篇」からである。「三篇」以降、欲動にかんして打ち立てられた理論のなかで一貫していわれていることは、欲動とは内因性の力であるということ、またそれが身体的なものと精神的なものの境界概念であるということ(Cf.DS76/TT85[23])である。

まず内因性についてだが、「三篇」においては「われわれが欲動ということばで理解しているものは(…)つねに流動しつづけている体内の刺激源の心的な代表であ」り、「外部から訪れる単一の興奮によって引き起こされる刺激とは異なる」(DS76)といわれ、また「欲動刺激は外界からではなく、有機体そのものの内部から生まれる」(TT82)と述べられている。

この内因性ということについては、「草稿」以来指摘されていた(EP389)。しかし、それ

---

[23] 本稿で「身体的なもの」と訳したものドイツ語は、「性理論三篇」では“Körperlichen”であり、「欲動とその運命」では“Somatichem”となっている。「精神的なもの」は両論文において“Seelischen”である。

は神経学や生物学においても確認されるものであり、このことだけから精神分析に独特の領野が切り開かれたとはいえないだろう。だが「三篇」以降、欲動にかんして精神的なものと身体的なものの境界概念ということが強調されるが、これは神経学や生物学からは純粋に導き出されない考えである。この点からフロイトが、「草稿」の時期にはまだ神経学に依拠しようとしていたのにたいし、「三篇」からは、精神分析を新しい学問として打ち立てようとしていることをみてとれる。まとめるなら、欲動とは、人間を内側から突き動かそうとする力であり、身体的なものばかりでなく精神的なものもかかわっているような力である。この点について、さらに踏み込んでみたい。

フロイトの欲動理論は、新しい発見のあるたびに変更と修正を加えられることになる。しかし、その変遷において一貫しているのは欲動がつねに対のかたちで、たとえば性欲動と自己保存欲動、自我欲動と対象欲動、生の欲動と死の欲動として提出されている点である。本稿では、「三篇」と「欲動とその運命」においてみられる自己保存欲動と性欲動の対をみていきたい。

1905 年の「三篇」では自己保存欲動 Selbsterbaltungstriebe というタームこそもちいられていないが、内因性の欲動として栄養摂取を目指すものと性欲動との対比がなされている。そして、精神分析で問題となるのは性欲動であることが強調される。「わたしの経験から判断するかぎり、精神神経症は性的な欲動の力によって生まれる」(DS72)。これは以後、精神分析の基本的な考えかたとなる。論文「欲動とその運命」においても次のようにいわれる。「精神分析において、発展プロセスに応じたかたちで、ある程度の満足できる情報が得られている欲動は、性欲動だけである」(TT89)。

また、この自己保存欲動と性欲動の対比は、「草稿」から確認される[24]。「草稿」のなかでは、内側からの刺激の例として栄養摂取と性対象への接近の二つがあげられていた。この着想は、「隠蔽回想」(1899)のなかでフロイトがふれているシラーの「賢者たち Die Weltweisen」[25]という詩に、その出自を見出すことができる。この詩のなかでいわれている「飢えと愛」の二つを、フロイトは人間を内部から突き動かす代表的な力としてあげ、「飢え」と呼ばれているものを自己保存欲動として、「愛」と呼ばれているものを性欲動として理論化したのだと考えることができる。

---

[24] Cf.EP389/410,DS47,TT82.

[25] 関連のある節だけ引用しておこう。
Einstweilien, bis den bau der welt
Philosophie zusammenhält,
Erhält sie das Getriebe
Durch Hunger und durch Liebe.
哲学が世界という構築物を
説明しつくまでのあいだ、
とりあえず、自然がこの世の営みを、
飢えと愛によって維持している。

欲動概念の練り上げ2：自己保存欲動から断絶されたものとしての性欲動

ではまず、このふたつの欲動の区別をとおして、フロイトが精神分析における性をどのように練り上げていったかを「三篇」のなかでみていきたい。重要なのは、性欲動が自己保存欲動から独立したものであるという点である。そして、この切り離しの契機を見極めることこそ、フロイトとラカンの考えに連続性を見出すための鍵となる。

フロイトのいう性にかかわること sexuell の特徴として、それが性器的なもの genital ではないということ(Cf.DS87)、またこれと関連したことだが、幼児期における経験とかかわりのあるものであるということもあげることができるだろう。

『夢解釈』第七章においても、「幼児的なものから発する性的な欲望の揺動だけが、すべての精神神経症の症状形成の原動力を提供する」(TD574)といわれていた。つまり、フロイトのいう性にかかわることとは、成熟した大人の生殖器の満足にかかわることではない。しかしそれでも、この幼児における性にかかわることにかんする着想が、性にかんして厳格であった当時のヨーロッパにおいて受け入れられがたいものであったことはたやすく想像できる。それでも、フロイトはこの点で譲ることはなかった。では、フロイトはこの性にかかわることにかんしてどのように論じているだろうか。

「三篇」では、おしゃぶりが例としてあげられている。「しゃぶったり啜ったりする行為は、乳児の頃にすでにみられる現象であり、成人するまでつづいたり、一生にわたって維持されることもある。その特徴は、口でリズミカルに吸引しながら接触をくり返すが、栄養物の摂取を目的としていない」(DS87)。たしかに、おしゃぶりは幼児のころから執拗に確認される行為であり、栄養摂取を目的としていない。ここにフロイトは、幼児における性的なもののひとつをみようとする。だがこのとき、おしゃぶりがなぜ生ずるのかを考察するとき、自己保存欲動にかかわることからはじめられること、つまり栄養摂取の経験がまず想定されていることを見逃してはならない。

> さらにおしゃぶりをする子供は、ある快楽をもとめて行動しているのは明らかである。子供はこの快楽をすでに味わったことがあり、おしゃぶりをしながらそれを想い出しているのである。(…)子供の最初の活動、しかも生命にかかわる重要な活動は、母親の乳房(またはその代理物)を吸引する動作であり、そのさいすでにこの快楽がえられていたと考えねばならない。子供の唇は性感帯のようなはたらきをしたのであり、あたたかい乳の流れによって生み出される興奮が、この快楽の原因であっただろう。性的な活動はまず、生命を維持するために役立つ機能に依託しておこなわれるのであり、それが独立するのは、あとの段階になってからである。(…)子供に歯が生えてきて、栄養物を吸引するだけではなく、咀嚼するようになるとともに、この二つの欲求が分離するのは不可避のことである。(DS88)

引用中の「すでに味わったことのある快楽」が、「草稿」と『夢解釈』第七章のなかで述べられていた充足体験に相当するものであることは間違ない。『夢解釈』第七章のなかで充足体験は「空腹の子供」にかんして、つまり栄養摂取にかかわることとして取り上げられていた。生の困窮と呼ばれたこの状況を、幼児は自力で打開することができない。それゆえ成熟した大人の助け、「草稿」で特殊行為と呼ばれていたものが必要となる。それを満たすものが、充足体験であった。この体験が「三篇」においては、母親の乳房を吸引することによる栄養摂取として取り上げられている。これは、あきらかに自己保存欲動にかかわる出来事である。そして、フロイトが性的なものと考えているものは、この出来事の延長上に断絶が起こったとき生ずるのである。

「草稿」と『夢解釈』第七章のなかでは、性的なものをどのように捉えるかにかんする理論的練り上げはなされていない。とくに、『夢解釈』第七章のなかでは、性的なものは前面に出されているが、多くは見た夢の原因として措定されているのみであり、性的なものをどう捉えるべきかという理論的追求はなされていない。また第七章においても、性にかかわることが幼児期とかかわっていると指摘されているが、指摘のみで、その性にかかわることをどのように考えるかが理論的に追及されているとはいいがたい。性的なものSexualität にかんする理論的追求がなされているのは、表題の示すとおりこの「性理論三篇」においてなのである[26]。そして、この論文のなかで、うえの引用にみられるように、性的なものは、栄養摂取にかかわることから分離したものとして、言及されているのである。

この分離の契機にかんしてうえの引用では、「性的な活動はまず、生命を維持するために役立つ機能に依託しておこなわれるのであり、それが独立するのは」、「子供に歯が生えてきて、栄養物を吸引するだけではなく、咀嚼するようになる」ときであるといわれている。フロイトはここでは、歯が生えるという身体的な発達を、自己保存欲動から性欲動が切り離される契機として考えているようである。この考えは、ラカンへとつながってはい

---

[26] 本稿で「性的なもの」と訳した“Sexualität”について、断っておく点がある。石澤によれば、“Sexualität”というタームは、「現時点においてなお最大のドイツ語辞典でありつづけるグリム(Grimm)」のなかには掲載されていない(cf.石澤誠一「フロイトと性」、『I.R.S』,No.6 所収)。もちろん、フロイトが独自に作り上げたタームではないが、それが斬新なタームであることはたしかである。われわれはフロイトにおける「性的なものSexualität」の概念がひととおり確立されるのは、この「性理論三篇」であると考えている。本稿でも論じているが、それは、心的装置における痕跡によって自己保存欲動との切り離しがなされることによって、形成されるのである。「性理論三篇」の第二編「幼児の性的なもの」の原語は“Die infantile Sexualität”であるが、このことが象徴しているように、ここで、以後のフロイトが性欲動やリビードとして、みずからの理論の中枢に位置づけることになる性的なものにかんする概念が形成されたのだとみることができるだろう。しかし、この論文以前にフロイトが“Sexualität”というタームをもちいていなかったわけではない。『夢解釈』のなかでも、「エディプス伝説は、性的なもの Sexualität の最初の揺動のために両親にたいする関係が不快にもかき乱されるということをその内容としている」(TD268)とある。ちなみに、本稿では、フロイトにおいてまだ性的なものの概念が確立されていないと思われる時期を扱った第一章においては、抑圧されるものとしてフロイトが想定している性にかんして、「性にかかわること」という表現をもちいた。

かない。だが、これとはべつの考えもまたフロイトの考察のなかにみることができる。

性欲動が自己保存欲動から独立するようになるのは、あえてラカン的解釈にしたがうなら、歯が生え、その歯が快楽を享受するようになる瞬間ではなく、口が食べものを摂取するはたらきとはべつの、人間固有のはたらき、すなわち言語とかかわりをもつようになる瞬間であると考えられる。たしかにフロイトは、この瞬間を言語とのかかわりからは捉えていない。だが、うえの引用でも、おしゃぶりが「すでに味わったことのある快楽」、すなわち充足体験を想い出しておこなわれていることが述べられていた。つまり、おしゃぶりという性欲動とかかわりをもつ幼児の行為は、かつて体験された出来事の代理経験であるとフロイトは述べているのである。

この点からすると、性欲動が稼働するには充足体験の痕跡が書き込まれていることが不可欠であるということができる。この書き込みについては「三篇」のなかでも、「われわれが忘却している幼児期の印象 **Eindrücke** が、人間の精神的生 **Seelenleben** に深い痕跡 **Spuren** を残しており、それがその後の発達全体に決定的なものとなっている」(DS83)と述べられている。この痕跡の書き込みこそ、性欲動が独立する契機であると捉えなければならない。つまり、フロイトが性欲動と呼ぶものは、栄養摂取という生理学や生物学の分野のものに大きく傾いている自己保存欲動に、充足体験の痕跡の書き込みによって切り離しが生じたときに形成される欲動であるということが、フロイトの議論からも読みとれるのである。

以上のように、フロイトは欲動によって精神分析独自の性概念を提出した。それは、栄養摂取を目指す自己保存欲動の充足体験が痕跡として書き込まれ、それによって自己保存欲動自身から切り離され、その痕跡を出発点として稼働しはじめる欲動なのである。

ここで、『夢解釈』第七章の議論を想い出していただきたい。たしかに『夢解釈』第七章のなかでは性的なものをどう考えるべきかについての言及はなかったが、ここにわれわれがいましがた確認した性欲動にかんする萌芽をみることはできる。それは、欲望 **Wunsch** にかんする議論である。そこでは、欲望について次のように説明されていた。つまり、充足体験の記憶の痕跡 **Gedächtnisspur** が欲求興奮と連合しており、その連合によって生ずる心的揺動が欲望である、と。またこの痕跡 **Spur** というのは、フロイトが考案した心的装置のなかでは回想痕跡 **Erinnerungsspur** と呼ばれた場所における書き込みであり、知覚されたものにたいする最初の書き込みであった。『夢解釈』第七章における欲望とはこの書き込みを再現しようとするもの、つまりこの書き込みからはじまるものとされていた。このとき、この書き込みとは、神経学や生理学から精神分析独自の領域を切り離すものであると捉えることができるだろう。この欲望の領域における傾向性こそ、のちにフロイトが欲動という概念によって示そうとした性的なものの萌芽であると考えられるのである。

このように『夢解釈』第七章において導き出された欲望の領域を人間の営みのコンテクストであると捉えるなら、欲動とは欲望の満足へと人間を突き動かす力であり、そのための手段にかかわるものであると捉えられるだろう。

欲動概念の練り上げ3：欲動の四つの観点

では、フロイトによる欲動概念の練り上げをみてきた最後に、フロイトが「欲動の概念に関連してもちいられるいくつかのターム」(TT85)とした、衝迫 Drang、目標 Ziel、対象 Objekt、源泉 Quelle の四つをみておきたい。

衝迫とは「欲動の運動的要因、力の総和、あるいは欲動が代理する活動要求の尺度である」(TT85)といわれているが、これは欲望の満足しようとする傾向にしたがい人間を突き動かそうとする力の側面を示している。目標とは「欲動の源泉における刺激状態を除去することによってもたらされる満足である」(TT86)といわれているが、これは、人間の営みが欲望を満足させようとするコンテクストにあることを示しているといえる。くどいようだが、フロイトにおいて欲望の満足とは、書き込まれた充足体験の再現を意味する。対象とは「欲動がその目標を達成することができる対象または手段である」(TT86)といわれている。これは充足体験の記憶痕跡から形成される欲望に見合うものを、対象として探究しようとする欲動のはたらきを示している。しかし、「対象は欲動にとって非常に変動しやすいものであり、本来は欲動と結びついているものではなく、満足をもたらすうえで適切なものであるために利用されるにすぎない」(TT86)とされている。

源泉については難解な指摘がなされている。源泉とは「ひとつの器官または身体の一部において発生する身体的過程である」(TT86)が、「この身体的過程がつねに化学的な性質のものなのか、それとも他の機械的な力の放出などに対応したものであるかは不明である」(TT86)とされながらも、「この身体的過程の刺激が、精神的生 Seelenleben において欲動によって代理される」(TT86)とある。また、「欲動が身体的な源泉に由来するものであるということは、欲動にとって決定的な意味をもつ」(TT86)といわれながらも、「欲動の源泉を正確に認識することは、心理学の研究の目的において絶対的に必要というわけではない」(TT86)ともいわれる。

このような指摘は、さきほど確認した欲動が「身体的なものと精神的なものの境界概念」ということから理解できるだろう。つまり、欲動は身体の具体的な器官にその源泉をもつが、同時に精神的なものを代理したものであるかぎりで欲動となる。身体的のものにのみかかわるものであったなら、つまり神経学や生理学の分野に属するものであったなら、それは欲動とは呼ばれず、精神分析において扱われることはなかったであろう。しかし、人間の生の営みのなかに記憶痕跡が書き込まれ、充足体験の代理物が心的装置のなかで欲望を引き起こすとき、性欲動は問題となる。「身体的過程の刺激が、精神的生において欲動によって代理される」(TT86)とはまさに、欲動が、記憶痕跡の書き込みによって神経学や生理学の分野で扱われうることから切り離されていることを指しており、この意味で欲動は、「身体的なものと精神的なものの境界概念」であるといわれるのである。

以上、精神分析という学における仮説として欲動がどのように提出されたかをみてきた。次のようにまとめることができるだろう。欲動とは、内側から人間をせき立てる力であり、

精神的なものと身体的なものの境界概念である。さらに、精神分析で問題となる性欲動は、栄養摂取にかかわる充足体験の痕跡の書き込みによって、自己保存にかかわることから切り離されたとき生ずる欲動である。

このような欲動という仮説の提出によって、フロイトは精神分析という新しい科学の分野、あるいは新しい学問を創設しようとするのである。それは、性にかんする科学であるといえるが、このときの性とは、自己保存欲動、すなわち生物学的あるいは生理学的な側面から確認されうる欲動から切り離され、その痕跡から生ずる欲望のうえで蠢くことになる欲動によってはじめて示されるものであることを強調しておきたい。つまり、フロイトは、充足体験の痕跡が人間にどのような影響を与えることになるかにかんする科学を新しく創設したのである。

フロイトにおける性が性欲動であることが明らかになった以上、フロイトのいう性的なものをもはやたんなる表象やイメージによって捉えることはできない。さらに抑圧は、このような欲動の運命のひとつであるとされるとき、われわれは第一章でみたような抑圧の仕組みにかんする袋小路から抜け出すことができる。つまり抑圧は、意識とかかわりのあるものの操作ではなく、欲動という精神分析における仮説が被らねばならないひとつの運命なのである。次節では、この点をみていこう。

第二節　欲動の運命としての抑圧　―フロイトにおける抑圧４

抑圧と表象

フロイトは「欲動とその運命」のなかで、欲動の運命として、対立物への逆転 Verkehrung、自己自身への方向転換 Wendung gegen die eigene Person、抑圧 Verdrängung、昇華 Sublimierung の四つをあげた(TT90)。対立物への逆転は、前節で確認した欲動の概念に関連してもちいられる四つのタームのうちの目標にかかわっている。これによって、なにをもって満足とするかについて欲動が被らなければならない変化が示されている。具体的にいうなら、欲動の方向が能動性から受動性に変わることとしてサディズムとマゾヒズムあるいは窃視症と露出症があげられ、欲動の変化として愛が憎しみに逆転することがあげられる。自己自身への方向転換は、四つのタームのうちの対象にかかわっている。これによって欲動の観点から、性欲動がナルシシズム的に自己自身へと方向転換するという欲動の運命のひとつを示した。この二つの運命は、「三篇」などにおける性倒錯にかんする考察から導き出された欲動の運命である。昇華は特殊な欲動の運命であり、性欲動が対象を非性的なものへと置き換える能力とされる。ここではわれわれが問題にしている抑圧のみを取り上げたい。

抑圧を欲動の運命として提出することによって、抑圧とは、欲動に備わっている特徴から必然的にいたる帰結であるということになる。このように、抑圧はフロイトの思考のなかで欲動の運命のひとつという仮説として提出されるのである。「精神分析の研究がおこな

われるまでは、この抑圧という概念を措定すること aufstellen はできなかった」(DV107)。

では、メタ心理学再構築期の抑圧概念の練り上げをみていこう。フロイトは「自伝的に記述されたパラノイアの一症例にかんする精神分析的考察」(1911,以下「シュレーバー症例」と記す)や論文「抑圧」(1915)において、抑圧を、原抑圧 Urverdrängung、本来の抑圧 eigentliche Verdrängung、抑圧されものの回帰 Wiederkehr des Verdrängten の三段階にわけた。この考えは、晩年の「終わりある分析と終わりなき分析」(以下、「終わりある分析」と記す)においても採用されている。

ここで「草稿」、『夢解釈』第七章のなかで、抑圧がなににたいして、どのような仕組みによって起こるのかにかんして、どのように説明されていたかを改めて確認しておきたい[27]。抑圧は表象にたいして、それも意識において和解しがたい表象である性的表象にたいして生ずるとされていた。表象とは、フロイトにおいては「草稿」以来一貫して、量の備給によって生ずるものとされている。「草稿」においては、「(…)抑圧、つまり、敵対する回想像はできるだけ速やかに備給を受けないようにする」(EP415)といわれていた。

このことが『夢解釈』第七章のなかでは、より発展したかたちで理論化されていた。抑圧が、「二次的思考の目標表象との矛盾関係へ入り込んでしまう」のを避ける事前策とされている点は、「草稿」と変わりはないが、そこで抑圧は直接表象への備給を停止させることではなく、情動変換との関係で説明されていた。つまり、充足体験の痕跡が有機体を欲望の満足へと向かわせるわけだが、このとき表象として意識に浮かび上がるもののうちに二次的思考と矛盾するものがあるため、それにたいしあらかじめ不快の情動を喚起させるような情動変換を施しておくというのである。不快の表出は、有機体の第一原理である神経-慣性の原理に背くものであるため、それが意識に表象として現われることがあってはならないからである。いずれにせよ、抑圧は敵対する、あるいは二次的思考の目標表象と矛盾する表象が意識に現われることを、その表象への備給を停止させることによって事前に防ぐ作用として説明されていた。

さて、『夢解釈』期において取り上げられていた抑圧は、このメタ心理学再構築期においては本来の抑圧と呼ばれているものに相当する。『夢解釈』第七章のなかで抑圧は、「二次的な組織」(TD573)、すなわち前意識によって担われるものとされていたが、このメタ心理学再構築期においても、「(本来の)抑圧とは、前意識に属している意識的備給が表象から奪われる点に成立する」(DU139,カッコ内は引用者)といわれている。この点は、『夢解釈』期もメタ心理学再構築期も同じである。しかし、このメタ心理学再構築期においては、原抑圧が本来の抑圧に先行するものとして位置づけられている[28]。抑圧のはたらきを前意識に結

---

[27] ここに手紙 112 を省くのは、このテクストのなかで抑圧は「翻訳」のうまくいかなさとされているのみで、詳細に説明されているわけではないからである。

[28] 原抑圧にかんする着想自体は、フロイトのなかでかなり以前から確認される。たとえば、1897 年 5 月 25 日付のフリース宛の手紙とともに送られたものとされている草稿 M において次のような記述がある。「Vorb(前意識)と Unb(無意識)のあいだの抑圧を考慮に入れるだけでは十分ではなく、無意識系そのものの内部の正常な抑圧が考慮されなければならない。

びつけることは、前章においてみたサルトルの疑問のように、抑圧されたものという無意識に属するものもじつは意識において捉えられたものなのではないか、という批判を当然受けることになる。このような批判にたいし、原抑圧という契機が本来の抑圧のまえに位置づけられたと考えることができる。

原抑圧における固着と欲動の揺動

前節でみたように、メタ心理学再構築期においては欲動という仮説を中心に理論の再構築がなされている。そのためここではまず、欲動、表象、意識の関係を確認しておく必要があるだろう。「欲動は、意識の対象とはなりえない。ただ欲動を表わす表象だけが、意識の対象となりうる。しかし欲動は、無意識のうちにあっても、表象によって表わされるしかない。欲動が表象に付着するか、あるいはひとつの情動の状態 Affektzustand として現われるかしなければ、欲動についてなにも知ることができないだろう」(DU136)。欲動は、抑圧が問題となるとき、まずは表象に付着することによって取り上げられることが可能となる。だがさらにこの引用のなかで、欲動が表象に付着しない状態として、情動があげられている点にも注目しておきたい。

さて、原抑圧についてみていこう。うえでみたように抑圧のはたらきが前意識に位置づけられている以上、サルトルの提出するような、無意識とは意識における自己欺瞞のひとつでしかないという反論は十分に予想されうる。この点は、『夢解釈』期においては追及されてはいなかった。しかし、この時期のフロイトの考察においては、このような反論にたいし、原抑圧という概念によって応えることができる。この概念によって、抑圧が、はじめは意識ではなく、無意識の関与によって起こっていることが説明されるのである。「意識されたものから抑圧されたものに向かって作用する反発力だけを強調するのは誤りである。原抑圧を受けたものが、それと結びつく可能性のあるすべてのものにたいして行使する引力も考慮に入れる必要がある」(DV109)。

本来の抑圧において、抑圧されるべき出来事、つまり意識において和解しがたい表象をあらかじめ意識にのぼらせないようにするためには、そのような出来事あるいは対象と出会ったとき、それを抑圧するよう引き込むようなはたらきが必要となる。それによって、本来の抑圧が作動すると考えるのである。抑圧されたなにかがすでにあり、それと関連のある出来事と遭遇するなら、本来の抑圧がそのすでに抑圧されているなにかに引きつけられるしかたで、起こるというのである。「抑圧されるべき好ましからぬ心的志向とすでに抑圧されたもののあいだに結びつきが打ち立てられていなければ、嫌悪が抑圧を引き起こすことはないだろう」(FP190)。

この「すでに抑圧されたもの」に、原抑圧が想定されており、それが本来の抑圧のさい機能するのである。それゆえ、この本来の抑圧は、原抑圧にたいし後-圧 Nachdrängen[29] と

極めて意義深いが、まだ極めて不明である」(『フロイト　フリースへの手紙』,p.256)。

[29] cf.FP190,DU139/149,EU368.ただし「終わりある分析と終わりなき分析」においては、

も呼ばれる。ではまず、原抑圧では、どのようなことが起こっているのかをみていきたい。

フロイトは原抑圧において、固着 Fixierung が形成されると述べる。固着とは、「意識に取り込まれることが拒まれた欲動の(表象の)心的代理」(カッコ内はフロイト)が「変化せず存続し、欲動がその代理に結びついたままでいること」(DV109)とある。

固着を、ここでいわれている「欲動の(表象の)心的代理」という観点から理解するために、「シュレーバー症例」における指摘も確認しておきたい。そこでは、固着にかんして、「欲動が通常のあるべき発達を引き受けず、この発達の制止のために幼児期の段階に留まること」(FP190)と述べられている。この発言から、欲動には通常のあるべき発達したかたちがあるという前提を読みとることができる。それが、欲動が表象に付着することと考えられる。

しかし、そういうことが起こらず、つまり欲動が表象に付着せず、その代理となるものに結びつくことがここで固着としていわれているのである。ここから、表象に付着しない欲動というのが、フロイトによって想定されているのが確認される。

では、欲動が表象ではなくべつのものに固着するその状態をどのようなものとして捉えたらよいだろうか。表象に付着しない欲動の状態について、フロイトは論文「無意識」のなかで欲動が情動の状態にあることと述べている。しかし、この原抑圧における固着においては、またべつの状態が想定されているようである。確認のため、さきに引用した論文「無意識」の部分から、もう一度、その後半部分を延長して引用しておこう。

> 欲動が表象に付着するか、あるいはひとつの情動の状態として現われるかしなければ、欲動についてなにも知ることができないだろう。それでもわれわれは、無意識の欲動の揺動 Triebregung とか、抑圧された欲動の揺動とかといういいかたをするが、それは表現上の無害な怠慢とでもいうべきものである。そういう場合には、ある欲動の揺動について、その表象の代理が無意識になっているということをいっているのであって、それ以外のことが考えられているわけではない。(DU136)

この「無意識の欲動の揺動」あるいは「抑圧された欲動の揺動」といわれているものが「表象の代理が無意識になっていること」とされていることから、それらを原抑圧における固着と関係のあるものと捉えることができる。しかし、フロイト自身、このような表現は「無害な怠慢」と述べている。このように、フロイト自身、欲動にかんして表象の代理となるものがどのような状態にあるのか明言できていない。だが、いずれにせよ、この原抑圧における固着を抑圧の理論のなかに組み込むことによって、あらかじめ抑圧されたものが措定され、それによって無意識からの引力によって抑圧を考えることができるようになったのである。

「後-抑圧 Nachverddrängung」となっている。

本来の抑圧と抑圧されたものの回帰

次に本来の抑圧をみていこう。これは、原抑圧からの引きつけによって起こる後-圧であるとされる。「本来の抑圧は、抑圧された表象の代理となるものの心的派生物や、べつの場所で発生し、連想によって結びつくようになった思考傾向に関連したものである。このような結びつきのために、この表象は、原抑圧を受けたものと同じ運命をたどる」(DV109)。さらにフロイトは、原抑圧を受動的なものであるとし、本来の抑圧を能動的なものと述べている(FP190)。このように原抑圧にかんしてフロイトは、人間が被らねばならいひとつの契機として述べているが、本来の抑圧は、それにしたがうしかたで起こるのである。

最後に、抑圧過程の第三段階をみておこう。それは、抑圧されたものの回帰である。フロイトは、これについて「抑圧が失敗する段階、一度抑圧されたものの再突出」(FP191)と述べている。ただし、抑圧された表象がそのまま意識にのぼるのではなく、無意識における圧縮や移動の作業を受けて、もしくはヒステリーであれば身体に転換されるかたちで表出される。

ここで、フロイトは症状形成の仕組みを取り上げているのである。本稿で強調しておきたいのは、フロイトが抑圧と症状形成のおこなわれる場所をわけて考えている点である。「症状形成のメカニズムと抑圧のメカニズムとは一致するだろうか。それにたいしてさしあたりいえそうなことは、この両者はまったく違うものであり、(…)症状を作るものは抑圧それ自体ではなくて、まったくべつな過程から発生する抑圧されたもの回帰のしるしだということである」(DV114)。このようにフロイトは、抑圧と抑圧されたものの回帰を機能としてべつのものと捉えており、そのはたらきをつかさどる場所もそれぞれべつに想定している。明言されているわけではないが、文脈から抑圧は前意識が担い、抑圧されたものの回帰には無意識が一役かっているということが十分読み取れるだろう(のちに確認するが、ラカンはそれらを同じものとみなすのである。「抑圧と抑圧されたものの回帰は同じものである」(SéI216/ SéIII94))。

以上、メタ心理学再構築期における抑圧理論の練り上げなおしをみてきた。ここで抑圧は、仮説としての欲動の運命のひとつとして位置づけられている。これによってフロイトは、『夢解釈』期の議論においては追及されなかった問題点、つまり性にかかわることが、意識によってそれと認識される以前に、無意識のはたらきかけによって抑圧される仕組みを、原抑圧のはたらきを想定することで理論的に解決することができたのである。

このようにフロイトは、精神分析を新しい学問として打ち立てるため、みずから創始者の場所に立ち、その理論を仮説によって構築することを引き受けたのである。このときから、それらの仮説は検討あるいは検証されるものとなる。その過程で、仮説が修正されたり、あるいは破棄されたりする。このような方法が、科学的考察の基本的行程である。つまり、フロイトはみずから発見したもの、そこから精神分析という新しい学問を科学的なしかたで提出したのである。

だが、いっぽうで、フロイトには臨床経験から練り上げられる理論というものがある。それらは、メタ心理学的理論とはべつのしかたで構築されたものである。たとえば、エディプス・コンプレックスや去勢コンプレックスがそうであろう。われわれは本稿で、これらを実践的理論と呼び、メタ心理学的理論から区別する。フロイトの理論は、メタ心理学と実践的理論によって成り立っているのである。次に、この後者のものをみていきたい。

B　実践的理論における抑圧

われわれはここまで抑圧に焦点を絞りながら、フロイトのメタ心理学的な理論構築を検討してきた。そこで抑圧されるものとは、性にかかわることとされていた。それは、ここまでみてきたメタ心理学的な理論構築においては、性欲動という仮説として、生理学的なものとかかわる自己保存欲動から切り離されたものとして提出されていた。性欲動とは、その出発点としてかつての充足体験の痕跡が想定され、このかつての充足体験を再現しようとする心的揺動をフロイトは欲望と呼んだが、その実現を目指すため内側から急きたててくるなにかとして考えられた。このとき抑圧は、仮説としての性欲動の運命とされた。

だが、フロイトの理論とはこれまでみてきたようなメタ心理学的理論だけではない。臨床経験あるいは自己分析から得られたものからも、彼は理論を構築した。このような理論を本稿では、実践的理論と呼ぶことにする。その違いは、メタ心理学が、あらかじめ仮説を立てるという意味での科学的なしかたで、いわばいったん経験から切り離された思考の作業から練り上げられた理論であったのにたいし、われわれが実践的理論と呼ぶものは、臨床あるいは自己分析というフロイトの経験にもとづいて構築された理論であるという点にある。代表的なものをあげると、エディプス・コンプレックスや去勢コンプレックス、あるいは転移などもこのような臨床経験から練り上げられたものであるといえるだろう。

ここで、われわれが実践的理論という呼び名をもちいたことにかんして断っておきたい。「実践的」ということについて、そもそも精神分析における理論は実践のためのものなので、あえてこれをメタ心理学的理論と区別してもちいるのに違和感が生じるかもしれないからである。

そのため、われわれがメタ心理学的理論と実践的理論の区別の基準としているのは、それらの理論を取り上げるさいのフロイトの表現のしかたであるということを明言しておきたい。メタ心理学的理論については、たとえば「純粋に記述的な rein deskriptiver 方法で述べるにとどめよう」(DV109)や「われわれは、専門分野で日ごろ観察する事実について記述し Beschreibung 説明する努力を重ねながら、このような思弁的仮定 spekulativen

Annahmen に到達するのである」(JL217)といわれように、それらには、第二章第一節で確認したようなフロイト自身が科学的であると考えている方法に則っているという断りが入るのにたいし、実践的理論においては「直接的な観察によるものである」(IS171)や「臨床経験によって」(VE518)というように経験から直接導き出されたものであることが強調されている。このようにわれわれは、純粋な思弁にもとづいて述べられているのか、じっさいの経験や観察にもとづいて述べているのかの違いから、メタ心理学的理論と実践的理論を区別することにする。つまり、ここで「実践的」とわれわれが述べるのは、実践の「ための」ということではなくて、「実践」すなわち臨床経験「から」導き出された理論ということをさしているのだと理解していただきたい。

では、実践的理論における抑圧についてみていこう。

第三章　フロイトにおける実践的理論

フロイトには、メタ心理学的理論と実践的理論という、出自の異なる二つの理論がある。このとき厄介なのは、これら二つの理論が、フロイトの後継者や研究者、あるいはフロイトの読者、そしてときにはフロイト自身においても曖昧にもちいられる点である。これが、フロイト理論を読むさいの困難のひとつの原因となっているように思われるのである。

もちろん、この二つに連続性を見出そうとする読みが間違いだといいたいのではない。当然、フロイト自身は連続性を見出そうとしていただろう。しかしそれらが、理論の性質としてべつものであることを忘れてはならない。フロイトを読むさい、読者の側で、この二つの理論の区別を見失うことなく、接近させ、ときには読者なりの連続性を見出すことが必要となる。しかし往々にして、この二つの理論の区別はあいまいにされ、忘れられがちであるように思われる。フロイト理論にたいする嫌悪と誤解の原因は、このような点にも見出せると考えられる。

たとえばフロイトの性にかかわる議論は、フロイトがそれを主張しはじめた二〇世紀初頭にかぎらず現代にいたるまで受け入れがたいままであるように思える。フロイトは、神経症者の症状の原因として、幼児における性的なもの infantile Sexualität を主張した。さらに、そのとき彼はエディプス・コンプレックスをもち出す。幼児において性的なものを認め、これがエディプス・コンプレックスによって扱われるとき、これは幼児が文字どおりの近親相姦の欲望をもっていると解すこともでき、そのときこの主張は受け入れがたいものであるかもしれない。このような理論に嫌悪を抱くとき、ひとは、性的なものがメタ心理学的理論から導き出されたものであり、エディプス・コンプレックスが実践的理論から導き出された

ものであることをまったく区別していないだろう。

そして、本稿の主題である抑圧もまた、実践的理論によって取り上げられている。このとき、もちろんメタ心理学とはまったく異なるしかたで理論化されることになる。

ここではこの点にかんして、エディプス・コンプレックスと去勢コンプレックスと抑圧の理論構築をみていきたい。

第一節　エディプス・コンプレックスにおける性的なもの

エディプス・コンプレックスにおける性的なものにかんする誤解の原因

エディプス・コンプレックス、フロイトはこの理論を最後まで捨てることはなかった。未刊に終わった「精神分析概説」のなかでは、自信をもって次のように述べられている。「もし精神分析に、抑圧されたエディプス・コンプレックスの発見以外になんら誇るべきものがないとしても、この発見だけは、人類にとって価値の高い新たな収穫のなかに並べて加えることを要求しうるものであると、あえて私は主張しておきたい」(AP119)。

だがこの理論は、フロイトの理論が非難されるさいもっとも矢面に立たされるものでもある。しかし、このときの非難の多くは、メタ心理学的理論と実践的理論との混同から生じているものと思われる。そこには誤解—われわれはあえて誤解といいたいが—があるように思える。たとえば、1905 年に発表された「性理論三篇」の 1920 年に新たに付された註で次のような発言がある。

> エディプス・コンプレックスが神経症患者の核心的コンプレックスであり、これが神経症の内容の本質的な部分を構成しているのは確実である。そのなかでもっとも重要なものは、幼児期における性的なもの infantile Sexualität であり、その余波が成人の性に決定的な影響を及ぼすのである。人間として生まれた者は、誰でもエディプス・コンプレックスを克服するという課題に直面する。これに失敗した者が、神経症に罹るのである。(DS129)

エディプス・コンプレックスの重要性を指摘した註であるが、ここではエディプス・コンプレックスにおいて重要となるのが「幼児期における性的なもの」とされている。このときフロイトのいう性的なものがメタ心理学的理論構築において練り上げられたものということを考慮に入れず読んでしまうと、この一文におけるエディプス・コンプレックスとは幼児が母親と文字どおりの近親相姦を望んでいるという読まれかたをしてしまうだろう。

またフロイトは『精神分析入門』のなかで、「母親への結びつきが性愛的な本性 erotische Natur をもっていることは疑うことができない」(VE327)と発言しているが、このような

ことがいわれている講自体はリビードの発達を扱ったものであり、性欲動としての性的なもの Sexulalität にかんする議論からはじめられている。そのため、ここでいわれている「性愛的な」ものもそれが発達したものであることを理解しておく必要がある[30]。そうしなければ、フロイトがエディプス・コンプレックスで述べている、子の母親への愛着を、成人した大人の生殖にかかわる性器的なものにかかわる満足との関連で捉えられてしまうだろう。たしかに、フロイトは幼児における性的なものにかんして性器を取り上げている。しかし、それは成人した大人の性器とはべつの意味をもっている。この点を理解するためにも、フロイトの性的なものがメタ心理学的理論のものであることを忘れてはならないのである。

さて、ここでもまた、エディプス・コンプレックスにかんして抑圧とかかわりからみておきたい。うえの「精神分析概説」からの引用にも、「抑圧されたエディプス・コンプレックス」とあった。これと同じように、1924 年の「エディプス・コンプレックスの崩壊」においても、次のように述べられている。

> 自我がエディプス・コンプレックスから目を背けることを、「抑圧」と名づけることに反対する理由はない。(…)自我がコンプレックスの抑圧しかおこなえない場合には、このコンプレックスは無意識のうちにとどまり、後年その病的な作用を発揮するのである。(UÖ248)

これらの発言からは、抑圧されるものにかんして、それがエディプス・コンプレックスであるとしか受け取りようがない。だがいっぽう、第一章と第二章でみてきたようにメタ心理学的理論においては、抑圧されるものとは性にかかわることであった。このとき、メタ心理学的理論と実践的理論という区別を忘れてはならないだろう。これを忘れてしまうなら、両方とも抑圧されるものとされていることから、フロイトのいう幼児における性的なもの＝エディプス・コンプレックスというような即断がなされてしまう。

さらに、このときのメタ心理学的な意味での性的なものを、フロイトがほかのところでもちいる「性愛的なもの」として読んでしまうと、それはさきに述べたような誤解に陥ってしまうだろう。

このような文脈においてこそ、メタ心理学的理論と実践的理論が区別されなければならない。ひとつまえの「性理論三篇」の註からの引用においてこそ、エディプス・コンプレックスにおける性的なものとはどのようなことかという問いが問われる必要があるとわれわれは考える。

しかし往々にして、さらには精神分析内部においても、このように問われることは少ないように思える。これには、たしかにフロイトの書きかた自体にも問題があるかもしれな

---

30 だが、従来の日本語訳では、“sexuell” と “erotisch” は両方とも「性愛的」と訳されることが多々あり、訳語からだけでは判断できないことが多い。

い。このことに、さらに、フロイトのメタ心理学的考察は軽視されるという傾向が重なり、フロイトにおける性的なものは誤解されてきたのではないだろうか。

だが、フロイトにおける性的なものとは、前章でみたように、科学的なしかたで、いいかえるなら経験から切り離された仮説として、提出された科学的な概念なのである。それゆえ、検討・批判する場合にも、この点を踏まえていなければならないだろう[31]。だが、フロイトにおける性的なものは、不当にも、個人的経験を拠り所とする嫌悪感から生ずる非難を多く受けてきたように思える。

またフロイトの弟子たちや追随者たちが、精神分析を独自のしかたで引き継ぐ過程において、そのほとんどが新たなコンプレックスを提出してきたという事態(ユングのエレクトラ・コンプレックスやアドラーの劣等コンプレックスあるいは古沢の阿闍世コンプレックスなど)を眺めてみても、フロイトのいう性的なものが、科学的仮説あるいは概念として正当なしかたでその後継者たちによって検討されてきたかどうかは疑わしいといわざるをえない。彼らはフロイトにおける性的なものを理論的にではなく、実践から得られたものによって練り上げられたものとして受け取っていたのではないだろうか。

だが、このような誤解を受ける原因は、フロイト自身にもあったようにも思える。問題なのは、エディプス・コンプレックスを提出するそのしかたである。

コンプレックスという命名とユングの参照

このエディプス・コンプレックスの着想自体は、1896年の父親の死を契機にはじめられたとされるフロイト自身の自己分析から生じ、1897年10月17日付のフリースへの手紙のなかにすでに確認できる。つまりこの着想は、フロイトが精神分析という学問を創設しようとした時期からすでにあったことになる。しかし、フロイトは初期の理論化において、エディプス・コンプレックスについてはまったくふれていない。それがフロイトの理論化のなかではっきりと位置づけられるのは、かなりあとになってから、1923年の「自我とエス」においてである。

たとえば、『夢解釈』の第五章においては、まさにソフォクレスの『エディプス王』をあげながら、のちにエディプス・コンプレックスと呼ばれようになるものが取り上げられてはいる(TD265-268)が、それは類型的夢と題された節において、多くのひとにみられる夢のひとつである近親者が死ぬ夢を説明するためにもちだされているにすぎない。それは、フロイトの最終的に主張するように、すべての人間が経験し、それこそが神経症の原因であるという位置づけからすると、かなり消極的なものであるといわざるをえない。このような点から、フロイトがエディプス・コンプレックスを取り上げることにかなり慎重であったといえる。

---

[31] 本稿を先取りすることになるが、ラカンはこの意味で正当なしかたでフロイトにおける性的なものを取り上げている。彼がフロイトの知覚記号をシニフィアンとして読み替えるとき、それはある概念にたいする哲学的意味作用が生じているからである。

さらにこのエディプス・「コンプレックス」という呼称からも、フロイトの慎重さがうかがわれる。もともと、コンプレックス Komplex というタームはユングの使っていたものであり、フロイトはそれをもちいて自身の主要概念に呼び名を与えたのである。フロイト自身も次のように述べている。「精神分析による探究のもっとも価値のある成果のひとつは、神経症者も(…)C・G・ユングの表現を借りれば正常人も悩んでいるようなコンプレックスに悩まされているということを見出したことである」(IS172)。

フロイトがこのように、自身の主要概念にユングの使っていたタームをもちいたことには、たしかに純粋に学問的な理由以外の要素も確認できるだろう。1910 年に国際精神分析学会が設立されたとき、フロイトがユングを無期限の会長に推薦したこと、さらにときおりフロイトがユングを「後継ぎの息子」と呼んでいたことなどを考慮に入れるなら、フロイトがみずからの主要概念の命名にユングのタームを使用したことに感情的な理由があったことを否定することはできないだろう。だが、フロイトと出会ったころのユングの研究方法が実証科学的であったこともまた、フロイトがコンプレックスというタームをもちいるようになった理由として見逃してはならないのではないか。

ジョーンズによれば、「ユングは感情的な要素がどういうふうに記憶に干渉するかということについてフロイトがなした推論を確証する巧妙な連想試験をいくつか考案し、その試験を使用して自身が「感情コンプレックス」と呼ぶ抑圧されたものが存在していることを実験的に示すのに成功した」[32]。

当時のユングの研究は、ヴントの実験心理学の流れに属するもので、方法としてはたとえば刺激語としての語を 100 個あげていき、その語にたいする被験者の連想の反応時間をデータとして記録し、その記録から被験者の意識にのぼらない、つまり無意識下に表象の総体が潜んでいることを示す、というものであった。このように特別な感情によって結合している表象あるいは観念の総体を、ユングはコンプレックスと呼んだ[33]。

このように、フロイトが抑圧されたものにたいしコンプレックスというタームを採用した理由のひとつとして、ユングが実験という実証科学的な方法でフロイトの着想にアプローチしたということをあげることができるだろう。そこには、フロイトがみずからの着想を理論化するのに、神経学のタームをもちいたのと同じ理由があると考えられる。つまり、フロイトは無意識や抑圧という着想を、なにかすでに承認されているべつの科学に依拠したしかたで、つまりは意識のような共有可能な場所で扱いうるものとして提出しようとした、とわれわれは第一章において述べた。フロイトがユングの使っていた「コンプレックス」というタームをもちいたのも、これと同じ理由から、ユングの方法が実証科学的なも

---

[32] E・ジョーンズ『フロイトの生涯』、竹友安彦他訳、紀伊國屋書店、1969,p.256.

[33] それが、コンプレックス、つまり「複合体」と呼ばれるのは、ひとつの表象あるいは観念ではなく、いくつかが結合し形成されたものだったからである。フロイトもまた、初期においては、意識にのぼってこない病因と想定されたもの「観念の集合」や「心的集合」というような観念群として扱っていた。この表象あるいは観念の集合体が、コンプレックスと呼ばれるようになるのである。

のであったからだと考えられるのである。

それ自体はもちろん批判すべきことではないが、この慎重さによって、エディプス・コンプレックスは提出する時期が遅れ、そのためその概念的な練り上げを主題として考察する時期を逸してしまったとは考えられないだろうか。

フロイトがコンプレックスというタームをはじめてもちいるのは、1906年の「事実認定と精神分析」という犯罪心理を扱った論文においてであり、さらにエディプス・コンプレックスがタームとして取り上げられるのは、1910年「「愛情生活の心理学」への諸寄与 I」においてであるが、これはとくにエディプス・コンプレックスを中心に取り上げた論文とはいいがたい。この論文では、「少年はいわゆるエディプス・コンプレックスの支配下にある」(PL192)というように、エディプス・コンプレックスはすでに周知の概念としてもちいられている。

たしかに、『夢解釈』における記述をはじめとして、ドラやハンス少年などの症例報告などにおいてエディプス・コンプレックスについてはふれられている。このようにさまざまな論文で取り上げられ、またおそらくは弟子たちとのやりとりのなかで長い時間をかけて慎重に検討されたためであろうか、フロイトの論文のなかにエディプス・コンプレックスを主題としている独立した論文は存在していない。だが、このことがエディプス・コンプレックスにおける性的なものとはどのようなことをさすのか、というような問いを立てる契機を失くさせてしまったと考えられないだろうか。このことが、結果的に、エディプス・コンプレックスにたいする不当な嫌悪感を生じさせることになってしまったと考えられるのである。

第二節　エディプス・コンプレックスと抑圧　―フロイトにおける抑圧 5

エディプス・コンプレックスとは、正確に述べようとするなら、幼児期における性的なものの発達が性器期すなわち男根期にたっしたときに幼児が形成する幻想の構造であるといえるだろう。「男根期とともに、この時期が経過していく期間中に、早期の幼児における性的なものは最高潮にたっしる。(…)男の子はエディプス期に入り、男根を手で弄びはじめるが、それと同時に母親にたいして男根によってなんらかの性的なはたらきかけをおこなう幻想を抱く」(AP77)。

エディプス・コンプレックスとは、性的なものの内実ではなく、男根期の幼児の性的なものにともなう幻想なのである。またここでいわれている性的なものとは、成熟した男性が性交のときに感ずるオルガスムスとはまったくべつのことである。だが、エディプス・コンプレックスがもち出されるさい、性的なものにかんして考察されないことが、エディプス・コンプレックスを、幼児が母親との性交を望むことと誤解する原因となったと考えられる。

性器期あるいは男根期とは、フロイトにおいては自体愛的な快楽の部位が、口、肛門を

経て、性器にいたる時期のことであるが、このときの自体愛的快楽とは、フロイトがメタ心理学的理論構築において練り上げた意味での性的なもの、すなわちかつての充足体験を再現しようとする欲動の満足であると捉えねばならないだろう。欲動が、身体的なものとかかわるのは、その快楽が口、肛門、性器といった部位において現われるものであるからだが、さらにそれが精神的なものともかかわるとされるのは、かつての充足体験の痕跡から発せられるものだからである。このような欲動の満足を目指すという意味での性的なものが、性器期においては、エディプス・コンプレックスの幻想をともなわずにはいないとフロイトはいっているのである。ゆえに、性的なものが抑圧という運命をたどるのであれば、それにともなうエディプス・コンプレックスもまた抑圧されるべきものとならざるをえないだろう。

メタ心理学的理論と実践的理論とを区別することで、エディプス・コンプレックスが抑圧されるという表現にかんしても、エディプス・コンプレックスにおける性的なものとはなにかが問われる必要がある。くり返しになるが、性的なものの内実がエディプス・コンプレックスをさしているのではけっしてなく、エディプス・コンプレックスとは性器期における性的なものにともなう幻想の構造なのである。

このとき、エディプス・コンプレックスが抑圧されることにかんして、二つの理由をあげることができるだろう。ひとつはメタ心理学的理論にしたがうことによってであり、このときそれは、エディプス・コンプレックスが抑圧される運命にある性的なものにもとづいた幻想だからということになる。もうひとつは、実践的理論によってである。このとき、なぜエディプス・コンプレックスが抑圧されるかという点が、去勢コンプレックスによって説明されることになる。次にその点をみていこう。

第三節　抑圧の原因としての去勢コンプレックス　―フロイトにおける抑圧６

口唇期、肛門期におけるメタ心理学的な意味での性的なもの

ここまで、われわれはエディプス・コンプレックスを取り上げながら、フロイトにおけるメタ心理学的理論と実践的理論の区別の重要性と、その混同から生ずる誤解についてみてきた。フロイトのいう性的なものとはメタ心理学的理論の枠組みのなかで練り上げられた概念であるのにたいし、エディプス・コンプレックスは実践すなわち臨床や自己分析から導き出された理論である。これらがひとつの文脈でもちいられることがあるが、そのときこれらを混同してしまうと、フロイトの主張を誤解してしまうことになるだろう。このようにフロイトを読むさいはこれら出自の異なる二つの理論について、読み手の側で互いを区別しながら突き合わせていくことが必要となるのである。

ここでは去勢コンプレックスを取り上げるが、ここではこのコンプレックスが、実践的理論において抑圧の生ずる原因として考えられている点に注目したい。

去勢コンプレックスにかんする最初の言及が確認できるのは、「幼児期の性理論」(1908)

においてであり、それ以降、少年ハンスの症例(1909)や、次節でみることになるオオカミ男症例(1918)でもエディプス・コンプレクスと対をなすものとしてもち出される。いずれも、去勢威嚇に相当するような経験が患者にあったことが、記録されている。この点からも、これは実践的理論であるといえる。

では、去勢コンプレックスとはどのようなものとして説明されているだろうか。それが起こる段階は、フロイトによって「性理論三篇」のなかで練り上げた発達論のうちの性器期に割り当てられている。そのため、この発達論における性器期がどのように位置づけられているかをみておく必要があるだろう。

フロイトは、性的なものを「性理論三篇」のなかで、発達論の観点から、口唇期、肛門期という前性器的段階と、性器期[34]にわけた。これは、自体愛的な快楽の部位が身体内で、身体の発達にしたがって変化する過程を想定し、それにしたがったものである。

まずは前性器的段階として、口唇期と肛門期において、それぞれ口と肛門が快楽の場所の役割をはたす。このような発達論的観点にかんして、それをメタ心理学的理論と捉えるかそれとも実践的理論と捉えるかという困難な問題がある。これは、解釈にかかわることであるが、本稿ではこれをメタ心理学的理論として捉えることにしたい。たしかに、快楽の場所が口、肛門、性器へと発達するという考えかたは経験に依拠したものであることが想像されるため、メタ心理学的なものとはいえないと思われるかもしれない。しかし、ここでわれわれが注目したいのは、ここでの快楽が性的なものとのかかわりで扱われている点である。

また、快楽の場所としての口と肛門を捉えることも可能であるかもしれない。有機体の栄養補給のための部位となる口が快楽の場所となること、また糞便を体内にため込むことは有機体にとって不快なことであるはずだから、その排出部位としての肛門が快楽の場所となると考えることは、生理学的な観点からも十分に想定されうる。このように考えるなら、この理論は経験に依拠したものといえるだろう。しかし、フロイトがこの二つを快楽の場所とするのは、このような観点からではないとわれわれは考える。あくまでそれは、精神分析における性的なものにかかわる、前性器的な部位であると捉えるべきだろう。

フロイトが口唇期にかんして注目するのは、おしゃぶりであった。おしゃぶりとは、直接、栄養補給へとはつながっていない。また、ミルクなどをもらったあとにも、赤ん坊はおしゃぶりをする。ここにフロイトは人間における性的なものの萌芽をみたのであった。フロイトのいう性的なものとは、書き込まれた充足体験の痕跡をその出発点としていることはすでにみたが、この意味での快楽を、口という部位がまずは担いそれが口唇期と呼ばれるのである。つまりこのときおしゃぶりとは、書き込まれた充足体験の再現のための試みなのである。

---

[34] 1923年の論文「幼児の性器体制」より、この時期は男根期と呼ばれることになる。このいいかえには、精神分析における性別化の問題が絡んでくる。だが、本稿のここでのコンテクストでは、性別化はとくに問題としないため、性器期という呼び名にしたがった。

また、肛門にかんしても、糞便が、充足体験を与えてくれる者、つまりは母親の関心を引くものだからこそ重要になってくるということがフロイトによって主張されている。無力な存在である赤ん坊は、つねに母親が傍にいてほしいため、母親から愛される必要がある。このとき、糞便をきれいに、なるべく決まった時間におこなうことが、母親から愛されることにつながる。このように、糞便が愛の交渉のための道具となる。このように糞便が愛の交渉のための道具となるとき、その愛とは、書き込まれた充足体験の再現とかかわりのあることであり、その意味において、肛門期の快楽もまた性的なものであると考えることができる。

このように、フロイトの理論化における快楽の場所としての口と肛門とは、たんなる生理学的な観点からではなく、性欲動とのかかわりから扱われていると捉えることができるのである。このような理由から、われわれはフロイトのこのような発達論をメタ心理学的理論と捉えたいのである。

エディプス・コンプレックスの克服としての去勢コンプレックス

快楽の場所が口と肛門という段階を経たのち、フロイトによれば2-5歳のあいだに性器がその快楽の部位となる。そしてこの時期に、「去勢コンプレックスの影響のもと、幼年時代にもっとも激しい外傷を体験する」(AP117)とある。だが、ここで注意しておきたいのは、エディプス・コンプレックスと同様にここでも性にかかわること—ここではまさに性器にたいする愛着であるが—についても、メタ心理学的な意味での性的なものとして捉えねばならないだろう。ということである[35]。

だが、そのいっぽうで去勢コンプレックスの理論化自体は経験に則ったものであるため、実践的理論として導き出されることになる。

去勢コンプレックスとは、以下のようなことをさす。快楽になんらかのしかたで対象(多くの場合は母親)がかかわっていることをおぼろげながら感じとっている男の子が、性器期に入り、この時期の快楽の部位となった性器を、対象とかかわりをもつ幻想のもと弄んでいると、成熟した大人がそれにたいし「そんなことをしていると、おちんちんを切っちゃうぞ」というようないいかたでその行為の禁止を命ずる。いいかえるなら、まさにエディプス・コンプレックスの幻想のもとにある男の子にたいし、文字どおりの去勢にかかわることによってその禁止が発せられるのである。

それはまずことばによって発せられるが、このことは去勢威嚇と呼ばれる。しかし、このことばによる威嚇のみでは男の子は去勢を信じない。しかし、はじめはこの去勢の実行

---

35 しかし、フロイトは、口唇期や肛門期でなしたように、メタ心理学的と断定しうるしかたで、性器における快楽の説明をしていない。この理由は、結局のところ、本章の第一節でみたように、エディプス・コンプレックスにおける性的なものを考察する時期をフロイトが逸していしまったことにあると思われる。おそらく、自尊心やナルシシズムとリビードの関係から推察することはできるが、フロイト自身、該当する箇所でそのような説明はしていない。

にたいして疑いをもっていた幼児も、たまたま母親の裸を見たときペニスがないことを確認し、去勢がじっさいに起こりうると信じ、去勢にたいする不安を抱くようになる。これが去勢不安と呼ばれる。このとき、自身のペニスへの自尊心と対象(母親)への愛着が天秤にかけられるが、たいていの場合は前者がまさり、対象への愛着の断念とともに性器を弄ぶことを止める。つまり、去勢の禁止を受け入れるのである。この禁止の受け入れは、法の受け入れを意味し、父への同一化や超自我の形成の契機とされる。このような一連の経験が去勢コンプレックスと呼ばれる。この意味で、去勢コンプレックスは、エディプス・コンプレックスを克服するものとされるのである[36]。

また、このような去勢コンプレックスをうまく経ることのできなかった者が神経症の症状を現わすようになると、フロイトは考える。この意味で、去勢コンプレックスは、幼児期に経験される試練であるといえるだろう。さらにこの経験はいちどクリアすればよいというようなものではなく、成人した大人にとってもなにかのきっかけで退行が生じたさい、もういちど経なければならないものとなる。このようなことから、精神分析の臨床はこの去勢がくり返される場であるともいえるだろう。

以上のようにエディプス・コンプレックスを克服するものとして提出されている去勢コンプレックスはまた、抑圧を引き起こす原因としても捉えられることになる。それは、去勢コンプレックスをうまく経ることのできなかったケース、つまりそれが症状の生ずる仕組みであると考えられることと関係している。

抑圧の原因としての去勢コンプレックスとその着想から生ずる問題点

エディプス・コンプレックスにおける性的なものの満足、つまりペニスという部位において快楽を追及することに、突然、去勢という刑罰がつきつけられる。これによって、エディプス的満足の追求は、去勢を怖れて抑圧されるとフロイトは述べる。これは、去勢の法の受け入れや父への同一化として考えられるエディプス・コンプレックスの克服としての去勢コンプレックスではなく、去勢不安によってエディプス・コンプレックスが抑圧されている事態である。「子供が母親に愛着することの結果として子供が怖れている現実的危険とはなにか。(…)それは去勢という刑罰、ペニスの喪失です。(…)去勢不安が、抑圧の、そしてひいては神経症形成のもっとも頻繁でもっとも強い推進力のひとつなのです」(VE521)。このように、去勢コンプレックスは、抑圧の原因としてもはたらくことがあるのである。

フロイトは、神経症者の症状の原因として幼児期における性的なものを主張した。この点を説明するのに、フロイトは実践的理論を練り上げることによって、性器期における去

---

[36] だが、ここまでみてきたエディプス・コンプレックスと去勢コンプレックスは、1925年1923年の論文「自我とエス」において第二次局所論が打ち立てられるさいに、メタ心理学的理論のなかに取り込まれることになる。そして、この試みの延長に、ラカンのエディプス・コンプレックス解釈、さらに去勢コンプレックス解釈を検討することが可能だが、本稿は、抑圧に焦点を絞ったものであるため、その検討はのちの機会におこなうことにする。

勢コンプレックスをもち出すのである。このときエディプス・コンプレックスが抑圧されることが、のちの神経症の症状形成にかんし重大な位置を占めるようになるとフロイトは考えたのである。

だがそのいっぽうで、メタ心理学的理論構築によると、本来の抑圧のためには原抑圧されているものによる引きつけが必要であった。つまり、エディプス・コンプレックスが抑圧されるにしても、その抑圧がなされるときすでに原抑圧がなされていなくてはならないことになる。このとき、性器期以前、つまり2-5歳以前の時期に去勢にかかわる出来事がなにがしかのかたちで幼児に経験されるということが理論的に要請される。去勢コンプレックスを抑圧の原因として想定した以上、この困難は免れえない。この点をフロイトは、どのように説明しただろうか。

われわれは以上のような問題点について、オオカミ男症例にかんするフロイトの報告をみていきたい。この症例のなかで、フロイトは事後性という考えを提出することでこの問題を解決するが、本稿で次にみることになるラカンによる抑圧の再構築は、このフロイトの事後性を手がかりにおこわなれることになる。この点からも、われわれは次にオオカミ男症例を取り上げ、そこで抑圧理論がどのように提出されているかを確認することで、フロイトの抑圧にかんする議論をまとめていきたい。

第四章　オオカミ男症例にみる抑圧にかんするメタ心理学的理論と実践的理論の綜合

これまでみてきたように、フロイトの抑圧理論は、メタ心理学的理論と実践的理論という、出自の異なる二つの理論によって構築されていた。このとき、両方の理論を綜合させて考えようとするさい、ある困難が生ずる。

それは、実践的理論において去勢コンプレックスを抑圧の原因と捉える考えにたいして、メタ心理学的理論における原抑圧をどのように考えたらよいだろうか、という問題である。性器期をフロイトは2-5歳に想定するいっぽう、原抑圧は抑圧以前になされていなければならないため、そのとき性器期以前に去勢にかんすることが経験され、それが原抑圧されるという事態を説明しなくてはならなくなる。この困難にかんする理論的考察として、フロイトのオオカミ男症例をみていたい。

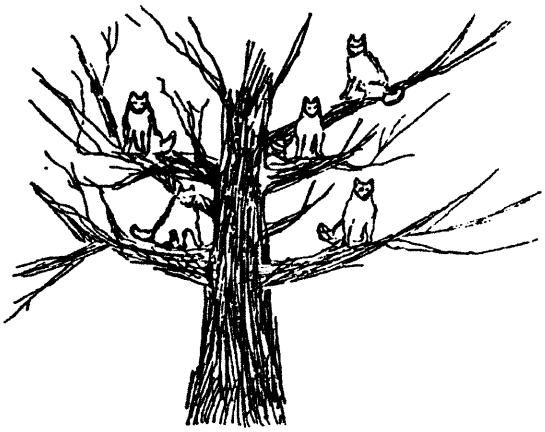
これは、いわゆる五大症例と呼ばれるもののなかでは最後に発表されたものであり、症状自体も多数取り上げられ、それにたいしフロイトは自分のこれまで練り上げた理論を総動員しながら、かなり複雑な解釈を提出している。だが、ここではそれらをすべてみるよ

うなことはせず、性的なものが抑圧されるということにかんして、フロイトがメタ心理学的理論と実践的理論の綜合によってどのような理論を打ち立てたかという点だけをみていきたい。

第一節　オオカミの夢

オオカミの夢について

ここではこの症例にかんして、抑圧がどのように説明されたかという点に絞ってみていく。このとき重要となるのは、オオカミ男という呼称の由来にもなっている、幼いころにみた夢である。オオカミ男はそれを次のように描いてみせた。



オオカミ男は、自分の寝室の窓からみえる木に数頭のオオカミがのぼり、こちらを見ているという夢をみた。フロイトはこの夢を不安神経症の症状形成の手がかりとして、原光景 Urszene の隠蔽されたものであると解釈する。ではフロイトは、この夢と、不安という症状の関連について、みずからの理論によってどのように説明しているだろうか。

オオカミ男について

オオカミ男と呼ばれることになる裕福なロシア人の青年がフロイトのもとを訪れたのは、1910 年、彼が 23 歳のときであった。それから 4 年間、彼は分析を受けることになる。この期間のものが、1918 年に「ある幼児期神経症の病例より」として発表されるわけだが、そのほとんどはすでに 1914 年に完成していたとされる[37]。

---

[37] この症例が最初に発表されたのは 1918 年であるが、1914 年には書き上げられており、そこから重大な変更はなされていない。cf.J・ストレイチー『フロイト全著作解説』、北山

症例報告のなかでは、4歳からはじまる不安神経症と恐怖症、4歳半からはじまる強迫症状、また5歳の少しまえの幻覚の体験などの症状がそれぞれ検討されている。これらの症状は10歳ころにはいったん鎮まり、中等教育を受けるころにはたいした障害もみられないが、17歳のときオオカミ男は淋病を患い、それ以降意気消沈し、フロイトのもとを訪れたころには神経症のため他人の世話にならなければ生きていけないほどの状態であった。

この症例のなかでフロイトがもっとも注目するのは、最初の神経症の症状が確認されるきっかけでもある、上述したオオカミの夢である。フロイトは、症状の原因にかんしては一貫して幼児期の体験に重きを置いていたため、これは当然の見解であろう。

この夢をみた時期にかんしてはじめはあいまいであったが分析を進めていくうちに、4歳の誕生日の直前であったことが明らかになる。これは、「性理論三篇」における発達論からすると性器期(男根期)の時期にあたるため、この夢の潜在内容には、この時期に経験される去勢コンプレックスにかかわることが含まれているとフロイトは考えた。つまり、オオカミ男は4歳の誕生日の直前に、みずからの性器に愛着を覚えることから生ずる、性にかんする満足とそれにともなう不安とを経験し、そのときの不安があまりに過大なものであったため夢として現われたとフロイトは解釈するのである。

このときの解釈において、さきほどわれわれの指摘したメタ心理学的理論と実践的理論の綜合において生ずる困難、つまり性器期における原抑圧としての去勢をどのように考えればよいかという問題が、事後性という考え[38]を提出することで解決される。この点をみていくために、オオカミの夢にかんしてまず去勢とかかわりをもつもののうちの主要な点を確認しておきたい。

第二節　原光景と原抑圧

オオカミと去勢の結びつく経験と本来の抑圧

まず夢のなかの木とオオカミにかんしてであるが、それには祖父から聞かされた次の物語が関係している。

ある仕立て屋が部屋で仕事をしていると、窓から一頭のオオカミが飛び込んでくる。仕立て屋は、このオオカミの尻尾を引っこ抜く。するとオオカミは飛んで逃げた。しばらくのちこの仕立て屋が森に入るとオオカミの群れに出会い、彼は木に登って逃げる。オオカミは順番に背中に乗っかって、仕立て屋のいる枝にまで近づこうとする。しかし仕立て屋は、そのオオカミのなかに自分が以前尻尾を引っこ抜いたオオカミが一番下になっているのを見つけた。そこで、「あの灰色のオオカミの尻尾をひっつかんでやれ」と叫ぶ。すると、尻尾のないオオカミは以前のことを思いだしたのか逃げだし、他のオオカミもみな崩

修他訳、人文書院,2005,p.333.

[38] 事後性という着想自体は、フロイトの思索のなかでこのときはじめて考え出されたものではない。この着想は、「草稿」の第二部のエンマの症例報告においてすでに確認できる。

れ落ちてしまう(DW150)。

この物語のなかでオオカミの尻尾が引き抜かれるくだりが、オオカミ男にとって去勢を連想させるものとなり、夢のなかでオオカミに関連づけられたのだとフロイトは解釈した。つまりこの夢は、去勢にたいするオオカミ男の不安が置き換えられたものなのである。

また、この症例においては、去勢コンプレックスを引き起こすことになるじっさいの経験が確認されている。それは3歳3ヵ月のころ、つまりこの夢をみる9ヵ月ほどまえの経験である。オオカミ男は、当時の性的対象であった老女の子守ナーニャのまえで自分のペニスを弄んでいると、ナーニャから「そんなことをしてはよくない。(…)そんなことをする子はそこに「傷」がつく」(DW143)と叱られるということがあった。この経験は、オオカミ男がこの時期に性器期に入ったことを示すと同時に、ナーニャから去勢威嚇を受けたことを表わしている。

つまり、フロイトは、オオカミ男はナーニャとのやりとりで去勢威嚇に相当する出来事を経験しており、これによって抑圧が生じ、このときの抑圧がのちの症状の原因であると考えた。このときの抑圧は、メタ心理学的理論の見地からすると本来の抑圧に相当する。だが、このとき本来の抑圧が生ずるためには、原抑圧がそれ以前になされていなければならない。そうでなければ、メタ心理学的理論との整合性がとれないのである。だが、性器期以前に去勢不安によって性的なものが抑圧されるという事態をどのように考えればよいのだろうか。

原光景と原抑圧

このような問題にたいする解決策を、フロイトはオオカミ男とのやりとりから見出すことになる。この問題の突破口を開くのは、原光景にかんすることである。

夢のなかに出てくる木には、じつはさきほどみた祖父の物語とはべつの要素も入り込んでいた。それはクリスマスツリーである。オオカミ男の誕生日はクリスマスでもあり、そのときにもらうプレゼントにたいし、おめでたい日が重なっているということから子供ごころながら過大な期待をよせていた。そして、四回目を迎えるこの特別な日のまえに、彼はオオカミの夢をみることになる。このようなことから、この夢は、性器期の段階に入ったオオカミ男の過大な期待から生じたものであると解釈される。そして、「この欲望が強烈であったために、久しく忘れてられていたある場面の回想痕跡 Erinnerungsspur がよみがえ」った (DW155)とフロイトは考える。

この「久しく忘れられていたある場面」が、原光景である。つまり、両親の性交の場面である。この原光景がオオカミ男とのやりとりのなかで浮かび上がってきたことで、フロイトは、この症例によって原抑圧が性器期以前にどのように生じたかという問題にかんする解決策のきっかけをつかむことができた。この時期を、フロイトはかなり強引にではあるが、一歳半であったと割り出すのである(DW156)。

このよみがえってきた原光景は、オオカミ男にとって性的満足への憧憬であると同時に、

去勢不安の生ずる契機でもあった。この点に原抑圧が想定されることになるのだが、これについてくわしくみていきたい。

なぜ、原光景は去勢不安の生ずる契機となりうるのか。フロイトは原光景において、オオカミ男が母親の性器も目撃していたと考える。つまり、このときの女性器の目撃によって、オオカミ男は去勢を目の当たりにしたのだと考えられる。こうして原光景はオオカミ男に、彼の待ち望んでいた性的満足を獲得するためには去勢という代償を払わなければならないということを通告することになるのである。

「適切であることを願いながら」と断りを入れながら、フロイトはこの夢を原光景と関連づけながら次のように解釈する。「お前は父によって満足させられたいと思うなら、母と同じように去勢を甘受しなければならない。けれども、ぼくはそれがいやだ」(DW165)。

このようにフロイトは、オオカミ男の原光景に去勢にかかわる出来事を見出す。これは本来の抑圧(3歳3ヵ月におけるナーニャから受けた去勢威嚇)に先行する時期に確認された(1歳半)ことから、ここにフロイトは原抑圧を想定することができたのである。

さらにこの原光景をもち出すときのタームのもちいかたから、フロイトが原光景と原抑圧を関連づけて理解しようとしていたことがうかがえる。

さきほど引用した、「この欲望が強烈であったために、久しく忘れてられていたある場面の回想痕跡がよみがえり、それによって父によって性的に満足させられるとはどういうことなのかを彼は知ることができた」(DW155)のあとにフロイトは、「その顚末は、この欲望の成就にたいする驚愕・仰天であり、この欲望をとおして現われた揺動の抑圧 Verdrängung der Regung であ」(DW155)ったと述べている。

この「揺動の抑圧」という表現に注目したい。このことから、「久しく忘れられていたある場面」、つまり原光景が原抑圧とかかわりをもつものであると捉えることができる。原抑圧とは、第二章第二節でみたように、本来の抑圧が表象を抑圧するのにたいし、表象の代理となるものつまり表象として現われる以前のものを無意識に固着させることであった。そのさい原抑圧において抑圧されるものは、揺動と呼ばれていた。

また、この場面が「久しく忘れられていた」と述べていることからわかるように、フロイトはオオカミ男がこの原光景と遭遇したのは、オオカミの夢をみた日よりもずっとまえだと考えている。フロイトはこの時期を、1歳半であったことを割り出したのであった。分析から獲得されたこれらの証言とみずからの理論からフロイトは、オオカミ男の症状形成にかんして次のように考える。

1歳半のとき両親の性交を目撃し、それが原抑圧された。この時点で、原光景は表象として抑圧されたわけではない。だが当時 1 歳半であったオオカミ男にとってこの原光景は、それにたいして生じた心的揺動の記憶が、表象とはべつのかたちで残されている。それをフロイトは、「回想痕跡」と述べている。メタ心理学的理論構築において、回想痕跡はイメージが形成される以前の痕跡とされていた。それが、4歳の誕生日まえに、つまり満足をえたいという欲望が性器期における性的満足として生成しはじめた時期に、表象またはイ

メージとしてよみがえってきた、と考えるのである。

このように、フロイトは、かつて原抑圧された原光景が、性器期の段階に達したことにより性器にかかわるイメージとしてよみがえり、そのイメージが性器にかかわる満足を表わすと同時に去勢の実現を通告するものでもあったため(本来の)抑圧が生じ、それによって不安や恐怖症などのさまざまな症状が引き起こされたと考えたのである。

第三節　事後性の導入

原光景にかんする事後性の導入

以上のように、この症例の解釈においては、メタ心理学的理論の練り上げにおいて導き出された原抑圧と本来の抑圧が時間的な隔たりのもとに確認され、さらに本来の抑圧の起こる時期とその契機が、実践的理論である去勢コンプレックスによって説明されている。

だが、ここに当然、次のような疑問が生ずるだろう。去勢コンプレックスの理論化において、まず去勢威嚇がなされ、そのあと去勢不安が生ずると説明されていた。だが、この症例においては、去勢威嚇がナーチャとのやりとりにおいて経験されるのは 3 歳 3 ヵ月とされ、去勢不安の契機となる原光景の目撃が 1 歳半とさていることから、順序が逆となっている。

また最大の疑問点は、1 歳半の幼児がどのようにしてこの複雑な出来事を記憶に留めておくことができたのであろうか、ということであろう。フロイト自身、「彼は(1 歳半のとき)目覚めると(…)後背位性交を目撃し、父のペニスも母の性器も見ることができ、それがどういう出来事であり、どういう意味のものなのかを理解した」(DW157,カッコ内は引用者)と述べるいっぽうで、「1 歳半といういたいけな年頃の子供がたいそう混み入った出来事の知覚を受け入れ、これほど忠実に無意識のうちに留めておくことができるのか」(DW157)と自問している。このとき、フロイトは事後性という考えを導入するのである。

フロイトは、うえの引用文の註で次のように述べている。「私の意味するところは、彼がこの出来事を理解したのは夢をみた 4 歳時にであって、観察時のことではないということである。1 歳半のときに彼が取り入れた印象 Eindrücke が、彼の成長・性的興奮・性的探究のおかげで、事後的に nachträgliches 夢の時期には理解できるものとなっていたのである」(DW157)。

つまりオオカミ男は 1 歳半に原光景と遭遇し、その印象が回想痕跡として残されることになるが、それが性的満足の場面であると理解しかつ去勢不安を引き起す契機となるのは、オオカミ男が性器期に入ったときなのである。このようにフロイトは、1 歳半の原光景の目撃が 4 歳の誕生日まえになってはじめて症状の原因として影響をもつようになることを、原光景の事後的効果として説明するのである。

オオカミ男症例にみるメタ心理学的理論と実践的理論の綜合

ここまでのフロイトの考えを整理してみたい。オオカミ男は 1 歳半のとき、両親の性交を目撃する。その印象が回想痕跡として原抑圧される。このときはたんに印象が記憶として残されるにすぎない。それが、4 歳の誕生日まえに、性器期に入りペニスに愛着を覚えるようになったことから、原抑圧されていた両親の性交の場面がよみがえる。つまり、原抑圧されていた印象は、性器期への発達を待ってはじめて、事後的に、オオカミ男にたいし性的満足のイメージをともなったかたちでよみがえってくる。しかしそれは同時に去勢の不安をも生じさせるものでもあった。それゆえ、ここに抑圧が生ずることになる。

このとき、この 4 歳まえに生じた抑圧にたいし、1 歳半のときの書き込まれた原光景の印象が、本来の抑圧において引力としてはたらく原抑圧の役割をはたしていると考えることができるのである。

フロイトは、神経症の場合、性器期におけるエディプス・コンプレックスの抑圧が症状形成の原因として考えた。このような考えにおいて、去勢コンプレックスを抑圧の原因として捉えた場合、この去勢コンプレックスをメタ心理学的理論における原抑圧とどのように関連づければよいかとい問題にかんして、事後性という考えを導入した。この考えによって、実践的理論とメタ心理学的理論は綜合されるのである。

第一部の結論

無意識を扱おうとする精神分析とって、その無意識へのアプローチのため抑圧を理論化することは最重要の課題のひとつであるといってよいだろう。しかし、その理論化は本稿でみたように、その概念の性質上、難航を余儀なくされた。

フロイトは、性にかかわることが抑圧され、そのことが症状の原因であると考えた。このような抑圧をどのように説明すればよいか。性にかかわることが、意識されることなく、抑圧されることの仕組みをどのように考えればよいか。

これを説明するための理論構築をフロイトははじめ、彼のもともとのキャリアであった神経学に依拠しておこなった。しかし、その枠組みのなかでは、抑圧をうまく説明することができない。なぜなら、フロイトが無意識に抑圧されると考えた性にかかわることを神経学の枠組みにおいて扱うことができないからである。そのため、なぜ性にかかわることが抑圧されるかについては、子供の成長とともに芽生えてくる嫌悪感という意識にかかわることをほのめかすしかできなかった。これは、無意識にかかわりをもつ抑圧の説明としては瓦解しているといわざるをえないだろう。

この瓦解の直接的な原因として、まずは神経学の枠組みでは性的なものを扱うことができないということがあげられるだろうが、われわれはそれよりも根源的なところに原因があると考えた。それは、フロイトが精神分析の理論を構築しようとするときの、論者としての欲望である。

精神分析がフロイトの発見にもとづく新しい学問である以上、その理論を構築するのにほかの既成の学問に依拠するということにはもとより限界があったといわざるをえない。たしかに、新しい発見を学問の領野において認めてもらうことには多大な困難が予想される。それゆえ、既成の学問に依拠しようとするわけだが、それが仮にそのとき依拠された領域のものによってすべて説明されるならば、それは新しい学問を打ち立てたことにはならないだろう。それゆえ、ある発見をなし、それにかんする新しい学問を創設しようとする場合、その発見者は、まさに創造者の場所に立ち、理論を構築する必要がある。

このとき科学的であろうとうするなら、仮説が提出されることになる。フロイトも述べるように、あらゆる科学はこのプロセスにしたがわなければならない。そしてフロイトは、既成の学問によって扱うことのできない精神分析における性的なものを、性欲動として提出したのであった。こうして、抑圧は、メタ心理学的理論の再構築が試みられたとき、欲動の運命として提出されたのである。

この仮説として提出された欲動の運命として、抑圧は次のように説明された。本来の抑圧においては性的な表象が抑圧されたわけだが、そのためにはあらかじめ性的な表象にかかわりをもつ揺動が無意識に固着していなければならない。このため、原抑圧という考えが新たに提出される。この原抑圧において固着されたものからの引きつけが、まさに無意識から引力として抑圧のときはたらくのである。このように、無意識とのかかわりによって抑圧が説明されることになったのである。

ところでいったん仮説が提出されたなら、それにたいする証明をおこなうのが科学的方法の順序である。このとき、精神分析は臨床経験を積み重ねていくことによって、その作業をおこなうことになるだろう。このとき、この実践から獲得された経験からも理論が打ち立てられることになる。われわれはこれを実践的理論と呼んだ。エディプス・コンプレックスや去勢コンプレックスがこれにあたる。そして、フロイトの理論構築は、メタ心理学的なものにたいし、この実践的理論が補足するかたちで形成されていく。たとえば、抑圧はメタ心理学においては欲動の運命とされたが、実践的理論から性的なものが具体的にどのように現われ、どのように経験されるかということが、エディプス・コンプレックスや去勢コンプレックスによって理論化されるのである。

しかし、この実践的理論において抑圧が説明されるとき、エディプス・コンプレックスが抑圧されるというようないいかたがフロイトによってなされる。このことから、フロイトにおける性的なもの＝エディプス・コンプレックスであるという誤解が生じ、そのことが精神分析の理論にたいする嫌悪と無理解のひとつの原因となっているように考えられた。

このようにフロイトの理論化においては、メタ心理学的理論と実践的理論という出自の

異なる二つの理論があり、フロイトを読む者には、それらを混同せず、みずから突き合わせていくという作業が要請されるのである。そうしなければ、彼の理論を誤解してしまうことになるだろう。

またこの出自の異なる二つの理論は、フロイト自身にたいしても、これら二つのあいだに整合性を見出すためのさらなる理論構築を要請することになる。

ここで取り上げたのは、去勢コンプレックスにかんする次のような問題であった。フロイトは去勢コンプレックスを抑圧の原因としても提出した。また、いっぽうでフロイトは性器期のさいに生じた抑圧が、神経症の原因になると考えていた。このとき、性器期において生ずる抑圧にたいする原抑圧をどのように考えればよいのか。つまり、フロイト自身が 2-5 歳に想定した性器期以前に去勢コンプレックスを位置づけなくてはならなくなるが、これについてどのように説明できるだろうか。

この困難な問題が、オオカミ男の症例から導き出された事後性という考えによって解決される。フロイトは、オオカミ男が 1 歳半のときに原光景に遭遇したと確信し、これが原抑圧とかかわりをもつ出来事であったと考えた。このとき原光景が、なんであるかはまったく理解されず、その「印象」[39]だけが書き込まれたと考えるのである。この印象は、1 歳半の段階では性的なものとしてではなく、たんなる印象として書き込まれたにすぎない。だがこれが、性器期を迎えたとき、事後的に、すなわち遡及的に、性的満足とそれにともなう去勢不安としての効果をもつようになるのである。

つまり、性器期における原抑圧について、あらかじめ印象としてのみ書き込まれた原光

---

[39] フロイトは「性理論三篇」やオオカミ男症例のなかで、「印象」ということばをそれぞれ次のようにもちいていた。「われわれが忘却している幼児期の印象 **Eindrücke** が、人間の精神生活に深い痕跡 **Spuren** を残しており、それがその後の発達全体に決定的なものとなっている」(DS83)。「1 歳半のときに彼が取り入れた印象 **Eindrücke** が、彼の成長・性的興奮・性的探究のおかげで、事後的に **nachträgliches** 夢の時期には理解できるものとなっていたのである」(DW157)。このとき、「三篇」において「印象」が「痕跡」とともにもちいられていることに注目したい。そして、もう一度『夢解釈』におけるメタ心理学のモデルを想い出していただきたい。そこでは、記憶が、回想組織、無意識、前意識の三層構造によって理論化されていた。そして、そこにおけるそれぞれの書き込みは、それぞれべつの呼称で呼ばれ異なったはたらきが想定されていた。回想組織における書き込みは、回想痕跡 **Erinnerungsspur** と呼ばれていた。これはたんに書き込まれただけのものであった。無意識における書き込みは、イメージ **Bild** と呼ばれ、ほかのイメージと連関するとされた。そして、前意識における書き込みは、思考 **Gedanke** と呼ばれ、言語記号とも結びついており、注意を向けさえすればいつでも意識に呼びよせることができるとされた。このように痕跡とは、『夢解釈』のなかで回想組織における最初の書き込みの呼称としてもちいられていた。このことを根拠として、『夢解釈』における記憶の三層構造に原抑圧を結びつけることはできないだろうか。『夢解釈』において抑圧は、無意識と前意識のあいだに想定されていた。このとき、原抑圧を回想組織と無意識のあいだに想定することができないだろうか。もしこれが可能な解釈であるなら、われわれは『夢解釈』における記憶の三構造をそのまま抑圧の構造として捉えることが可能になり、フロイト理論をより明快に理解することができるだろう。そして、この解釈は、ラカンのシニフィアン論を理解するうえで有効なものとなるのである。

景が、性器期において事後的に意味づけがなされ、そうして原抑圧のはたらきを担うようになり、これによってオオカミ男の性器期において抑圧がはたらいたと説明するのである。

以上のように、フロイトは抑圧理論を、ひとつはメタ心理学的観点から、もうひとつは実践的理論の観点から、構築するのである。また、そのさい生じた困難を、事後性という考えによって解決したのである。

われわれは次にラカンによる抑圧理論の構築をみていく。ラカンは、抑圧理論を言語活動との関係から再構築する。そのさいラカンが最初に注目するのがこの事後性なのである。

第二部　ラカンにおける抑圧

抑圧とは、無意識とかかわろうとする精神分析にとって、その無意識へとアプローチするための重要な理論である。フロイトは、「抑圧理論こそ、精神分析全構造の礎石であり、本質的部分である」(GP54)と述べた。第一部においてわれわれは、そのような抑圧理論の変遷をたどってきたわけだが、そこでは性的なものが抑圧され、これによって無意識が形成されるのであった。

ところで、精神分析が言語活動を媒体としておこなわれる心理療法である。このとき、抑圧は言語活動との関係からどのように考えられるだろうか。しかしフロイトは、抑圧理論と言語活動の関係にかんする理論化をおこなっていない。もちろんこの関係についての指摘や簡単な考察はあるが、抑圧と言語活動を直接結びつけるような理論を構築することはなかった。

フロイトは言語活動にかんすることを「知的な機能 intelledtuelle Funktion」と捉えており、抑圧や無意識が問題となるのはそれ以前の段階、フロイトが「情動的なプロセス affektiven Vorgang」と呼ぶものが問題となる段階であると考えていたからである(VN373)。だが、精神分析が言語活動のみを媒体とした心理療法である以上、抑圧と言語活動を直接に結びつけた考察、さらには理論が精神分析においてなされなければならない。これをおこなったのが、ラカンである。

ラカンは、初期のセミネールで「みなさんが真理を探究しようとするさい、情動的なものと知的なものという対置を使うこと、これを徹底的に放棄しなくてはなりません」(SéI302)と述べている。これは、さきのフロイトの考えにたいする批判と捉えることができる。さらに、ラカンは「無意識は言語活動のように構造化されている」(SéXI23)と定式化した。このような発言や定式化を提出するためには、抑圧理論と言語活動を直接結びつけた理論化がおこなわれていなくてはならない。第二部においてはこのような観点から、ラカンがフロイトの抑圧理論をどのように再構築したかをみていきたい。

第一章　抑圧と言語活動

精神分析はことばを媒体とした心理療法である。しかしフロイトは、ことばにかんして、

無意識の観点から直接臨床に通ずるような理論を提出することはなかった。フロイトは、次のような発言にとどまるのみである。「ことば Worte はもともと魔術でした。ことばは、今日でも昔の魔力を十分に保存しています。(…)ですから、心理療法において、ことばを手段としてもちいることを軽視してはならないのです」(VE43)。

たしかに、初期のテクストである『夢解釈』、「日常生活の精神病理」、「機知」においては無意識の観点からことばにかんするアプローチがなされてはいる。しかしそれらは、夢や言い間違いや機知という特別な言語経験を取り上げ、無意識を例証するにとどまり、言語活動と無意識を結びつけ、さらにそれを手がかりに治療の理論を構築するというようなものではなかった。ましてや、言語活動の観点から無意識に理論的なアプローチを試みるようなことはなされなかった。ラカンは、セミネールにおいてまずこの点から考察していくのである。

そしてラカンは、セミネールにおける理論的練り上げを経て、「無意識は言語活動のように構造化されている」(SéXI23)という定式を提出するにいたる。この定式が示すように、ラカンによって、言語活動の領野から無意識へのアプローチが可能となったのである。

晩年、テレビ公演のなかでは、次のようにも述べられている。「語る存在にしか無意識はありません。(…)無意識、それは話すのであり、このことが無意識を言語活動に依存させているのです」(AE511)。このような考えは、フロイトの発明した、最終的にことばのみを治療の媒体とするようになる精神分析にとって、必然的な帰結であるといえるだろう。

このように、ラカンは抑圧理論を言語活動と結びつけたしかたで再構築していく。初期のセミネールで彼は次のように述べている。「抑圧は言語活動の現象のように構造化されています」(SéIII75)。後期のセミネールにおいても、この考えは変わらない。「ひとが話しはじめるとき、厳密にいってその時点からであって、それ以前ではなく、まさにそこに抑圧があるのだと私は理解しています」(SéXX53)。このような発言の背景には、言語活動と抑圧とを直接に結びつけた理論があるわけが、ラカンはそれをシニフィアン概念の独自の練り上げによって構築するのである。本章においては、ラカンのシニフィアン概念の練り上げが、言語活動における抑圧をどのように説明するかを明らかにしたい。

第一節　想像界・象徴界と抑圧

ラカンによるオオカミ男症例解釈：事後性と象徴的なもの

ラカンは、抑圧を言語活動と結びつけて理論化しなおすために、1954 年 5 月 19 日付のセミネールのなかでオオカミ男症例を取り上げた。こうして、ラカンの言語活動を基盤にすえた精神分析理論の再構築がはじまる。

このとき、想像界 l'imaginaire・象徴界 le symbolique という、ラカンが最後までもち

いることになる三領域のうち二つがもち出される。ちなみにもうひとつは、現実界 le réel であるが、本稿では重点的に取り上げることはないだろう。というのも、われわれがこの章でみていこうとしている初期の段階ではこの概念はまだ十分に練り上げられてはいないからであり[40]、またこの概念がおもにもちいられるのは精神分析における対象(対象 a) を理論化するときであるが、本稿はラカンにおける言語活動の考察に注目することになるからである。では、ラカンがフロイトのオオカミ男症例を使って、どのように抑圧を言語活動と結びつけて理論化したかをみていきたい。

ラカンが注目するのは、事後性である。「オオカミ男症例のなかには、フロイトがほかのところでは示していない事柄、とりわけ純粋に理論的な著作ではけっして示していない事柄がたくさんあります。つまり、そこには彼の抑圧理論にとって本質的な補足があります」(SéI213)。ここでラカンのいう「本質的な補足」は、事後性のことをさしている。

フロイトにおいて事後性は、1 歳半のときそれ自体としては不明のままの印象または痕跡として書き込まれた原光景が、性器期においてはじめて、性的満足とその代償としての去勢を遡及的に示すようになることであった。さらにそれは、メタ心理学的理論と実践的理論のあいだの整合性を保つものとして提出されたのであった。つまり、本来の抑圧における無意識からの引力を説明するために理論的に導入された原抑圧が、2-5 歳に経験される本来の抑圧においてじっさいどのようにはたらくかを説明するために、導入されたものであった。

このように導入された事後性を手がかりに、ラカンは抑圧を言語活動から捉えようとする。このとき、想像界と象徴界の関係性が問題となる。ラカン理論においては、この二つの領域にかんして、想像界の先行性と象徴界の優位という性質が与えられている。そして、この関係性から、フロイトが抑圧と呼んだ現象を説明するのである。

では、ラカンが具体的にどのように述べているかをみていきたい。ラカンは、フロイトが原抑圧として位置づけた 1 歳半の原光景の印象の書き込みを想像界のはたらきと結びつけながら次のように述べる。

> 原光景によって生み出された想像的侵入 effraction imaginaire の外傷的価値は、けっしてこの出来事の直後に位置づけられるべきではありません。この情景が主体にとって外傷的価値をもつのは 3 歳 3 ヵ月から 4 歳のあいだです。(…)この想像的侵入は、フロイトの時代よりも確実に進歩したしかたで近年洗練された本能学説、とりわけ鳥類についての本能学の用語を使えば、「刷り込み Prägung」、つまり起源における外傷的出来事の刷り込みです。(SéI214)。

---

[40] cf.「1953 年 3 月 8 日にラカンは三つの名前(想像界、象徴界、現実界)を確立し、そしてフロイトへの回帰を開始する。(…)現実界はたんに命名されただけで、まだ明らかにはされていない(…)象徴界は想像界にたいする優位性によって、とくべつに推進され前面に出される」(Ph・ジュリアン『ラカン、フロイトへの回帰』向井雅明訳、誠心書房,2002,p.58,カッコ内は引用者)。

このように、オオカミ男による原光景の印象の書き込みを「想像的侵入」と呼び、それを「刷り込み」によってたとえている。これについてさらに、次のようにいわれる。「「刷り込み」は、主体の言語化された体系へと統合されませんでしたし、言語化 verbalisation、さらにいえば意味作用へといたることすらなかったといえるでしょう。この「刷り込み」は厳密に想像界の分野にかぎられています」(SéI214)。

ラカンは、フロイトが「子供が 1 歳半のとき十分な反応のできないある印象」(DW163)と述べたものを、みずからの理論を使ってこのようにいいなおすのである。つまりフロイトにおける原光景の印象が書き込まれるさいの主体におけるわけのわからなさを、より明確に「言語化されていない」という意味に限定する。また、フロイトでは原抑圧において固着が取り上げられていたが、ラカンはこの固着を想像的なものとしてみずからの理論に取り入れている。「想像的な道は固着と呼ばれるものを引き起こします」(SéV175)。つまりフロイトが原抑圧において想定した書き込みを、ラカンはたんにイメージが侵入してくるという意味での想像的なものとして理論化するのである。

この想像的侵入と呼ばれる第一の書き込みは、なにかを表わすはたらきをもっていない。おのれ以外のなにかとかかわりをもっていないからである。なにかを表わすためには、現代の言語学に依拠して述べるなら、ラングという体系が必要となる。ラングとは、他のタームとの差異だけによって成立するタームからなる体系であるとされる。だが、ここでラカンが想像的なものと関連づけて述べる最初の書き込み(＝想像的侵入)は、おのれ以外のなにかとかかわりをもっていない。そのため、ラングという体系を必要とする「意味作用へといたることすらなかった」といわれるのである。また、この想像的侵入を述べるのに、ラカンが動物行動学のタームをもちいているのも、言語活動以前つまり象徴界とかかわりをもつ以前の状況を表現したかったからであると考えられる。

ラカンは次に、「この「刷り込み」が(…)しだいに組織化されていく象徴的世界における主体の進歩の途上でふたたび出現してきます」(SéI214)と述べ、フロイトが抑圧を問題とした 4 歳の誕生日まえ、つまり性的なものが性器期にいたることにより去勢コンプレックスが問題として現われてくる時期に注目する。この時期に、「過去の再統合がなされ、「刷り込み」そのものが象徴のはたらきにおいて機能するようにな」(SéI215)る。このようにラカンもまたこの時期に抑圧を想定しているが、それはこの時期が、幼児がことばを覚えはじめる時期だからであり、それ以外の理由からではない。つまりラカンは、フロイトのように 4 歳の誕生日まえが性器期にあたるからではなく、人間が象徴的なものの関与にさらされる時期であるためにそこに抑圧を想定するのである。

ラカンによって考えられた抑圧の仕組みは、フロイトのもの(前意識による斥力と原抑圧によって無意識に固着しているものの引力)とはまったく異なっている。ラカンは象徴的なものの関与が起こるとき、そこに抑圧もまた生じると考えたのである。彼の考えによれば、言語活動それ自体が抑圧の構造をもって現われる。ここで事後性にかんする扱いかたが、

フロイトとラカンでは明らかに違っていることを確認しておくべきである。なぜなら、この違いは抑圧の捉えかたの違いを反映させているからである。

フロイトにおいて事後性は、性器期における抑圧の仕組みを説明するために要請された概念であった。フロイトは性器期になされた抑圧が、症状を理解するうえでもっとも重要なものと考えていた。彼は、成人における神経症のすべての原因をこの時期に見出そうとしていた。「エディプス・コンプレックスが神経症患者の核心的コンプレックスであり、これが神経症の内容の本質的な部分を構成しているのは確実である」(DS129)。それゆえ、性器期における抑圧はフロイト理論のなかで、なんとしても整合性の保たれたものとして提出されなければならなかった。このため要請されたのが、事後性という概念であった。

これにたいしラカンは、フロイトの導入した事後性に、抑圧と言語活動を結びつけることの根拠を見出す。なぜなら、さきほど想像界の先行性ということでみたように、言語活動を含む象徴界はあとから関与し、遡及的に意味を与えるものだからである。このとき重要なのは、分析主体が語るとき、まさにこの瞬間に抑圧がはたらくとラカンが考えている点である。「ひとが話しはじめるとき、厳密にいってその時点からであって、それ以前ではなく、まさにそこに抑圧があるのだと私は理解しています」(SéXX53)。なぜなら、ラカンの考えによれば、言語活動は抑圧の構造を備えているからである。このように、フロイトが抑圧にかんして性器期にかんすることもっとも重視していたのにたいし、ラカンの場合はまさに分析主体が語るその瞬間に抑圧を想定するのである。そのため彼の理論においては、ひとが語ることから無意識の領域が扱われることになる。

フロイトとラカンの相違点

だがフロイトが、臨床において患者が語ることについて、まったく興味を示していないわけではない。フロイトは、このオオカミ男症例の註のなかで、この 4 歳まえの不安夢において原光景が事後的にはたらきはじめたという出来事が、オオカミ男の分析時に、つまり 25 歳をすぎたときに臨床においてはじめて語られたことであることについて注目している。「子供が 1 歳半のとき十分な反応のできないある印象を受け取り、4 歳になってこの印象が再活性化されてはじめてそれを理解して心を奪われ、20 年後になってようやく分析によって意識的な思考行為として、当時自分のなかでなにが起こったのかを把握できるようになる」(DW163)。

このように、1 歳半時の原光景の目撃の時期、4 歳まえの原光景の活性化と抑圧の時期、25 歳すぎのそれらにかんして想起したことを語る時期と、フロイトは三つの時期に区分してはいる。だが、フロイトはすぐに「第二段階と第三段階の時期の距離は度外視してかまわない」(DW164)と述べ、オオカミ男が語ったという事実に抑圧における重要性を与えることはない。彼にとってなにより注目すべきは、第二段階における性器期つまり幼児期に生じた抑圧だからである。

この点こそ、抑圧にかんする、フロイトとラカンのもっともおおきな相違点であるとい

える。ラカンは抑圧を、あえていうならこの第三段階の時期、つまりオオカミ男が分析において語ることに想定するからである。ラカンは、べつの論文のなかで、オオカミ男が原光景を語ることについて言及したのち無意識つまり抑圧が生じることについて次のように述べている。「無意識は超個人的なもの transindividuel としての具体的ディスクールの一部です。これは、意識のディスクールに連続性を打ち立てようとする主体の傾向性における欠けているものなのです」(E258)。

まずいいまわしについてであるが、ここで「超個人的なもの」と訳した《transindividuel》にかんして、ラカン自身、このタームと関連した註において、この時期はまだ大他者という概念を練り上げていなかったためこういったいいまわしにならざるをえなかったという断りを入れている。ここで無意識を「超個人的なもの」としているのは、無意識を具体的ディスクール、つまり主体がべつの主体に話しかけることに位置づけるためである。その宛先を、ラカンはのちに大他者として練り上げる。ここで捉えておきたいのは、ラカンの考える無意識は個人的な段階、たとえば個人的な想起(結局のところ、フロイトそのように考えていたといえるだろう)に位置づけられることはない、ということである。

たしかにフロイトは、オオカミ男やほかの症例においても、過去の出来事を患者が想い出すことを強要しているようにみえる。ラカンは、無意識を「意識のディスクールに連続性を打ち立てようとする主体」には欠けているものとすることで、このような考えを退けるのである。ラカンにおいて、無意識とはひととひとが語るとき、つまり具体的ディスクールにおいて、第三項として生じるなにかなのである。そして、これは抑圧されたものとして生ずる。ひととひとが話すことにおいて、その話すことのなかには具体的なかたちによって現われてはこないなにか、あるいはその領域が形成される。ラカンは無意識についてこのように考えている。オオカミ男の原光景もまさにこのなにかにかかわるものなのである。

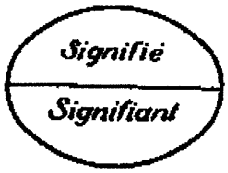
このように、ラカンは語ることそれ自体に抑圧をみる。だが、これはラカンのいっぽう的な解釈であるといえるだろうか。むしろ、フロイトが発見したものにたいして、フロイト以上にふさわしい理論であるといえないだろうか。精神分析が語ることを媒体とした心理療法である以上、そこには語ることにたいする理論が要請されるだろうが、フロイトの理論は抑圧にしろ、無意識にしろ、もちろん間接的にはかかわっているが、語ることにかんして直接的に理論化されたものはいえない。だが、ラカンは、フロイトの重要な概念のすべてを、語ることと結びつけて理論化しなおした。「抑圧は言語活動の現象のように構造化されている」(SéIII75)、「語る存在にしか無意識はありません」(AE511)、そして、「無意識は言語活動のように構造化されている」(SéXI23)。

では、次にラカンが抑圧と言語活動をどのように理論化したかをみていきたい。

第二節　言語活動と抑圧の構造

ソシュールとラカンの相違点

「無意識は言語活動のように構造化されている」。このようにラカンが「構造」というとき、ソシュール言語学が念頭におかれている。ここではまず、ラカンが抑圧の構造を図示するのにもちいた、ソシュールによる言語記号の表記について確認しておきたい。ラカンは、このアルゴリズムから抑圧を言語活動に結びつけて捉えることの着想を得たからである。ソシュールは、言語記号の構造を次のように明快なアルゴリズムによって提出した。



これは、図の下部に表記されている物質的な音の表出でしかないシニフィアンと、図の上部に位置づけられた意味内容であるシニフィエの関係性を示したものである。ラカンはこのソシュールの言語記号のアルゴリズムを変形させて、次のようなものを提出する。

$$\frac{S}{s}$$

ソシュールの表記法との違いを確認しておくなら、まずソシュールにみられた言語記号全体を囲っていた丸枠がはずされており、シニフィアンとシニフィエの表記が上下逆になっている（大文字のSはシニフィアンを表わし、小文字のsはシニフィエを表わしている)。さきに述べておくが、このラカンによる変形は、改善や修正という意味はまったくなく、言語学と精神分析のコンテクストの違いが反映されていると理解すべきだろう。

では前者の違いからみると、丸枠をはずすことで、ラカンは言語記号におけるシニフィアンとシニフィエがとくに固定されたものでないこと、べつのいいかたをすれば、流動的であることを示そうとしたのだと考えられる。次に後者であるが、シニフィアンが上部に置かれることで、横棒の意味がソシュールの表記とはまったくべつのことを示すようになる。バルトは、ラカンのこの表記法について次のように述べている。「シニフィアンとシニフィエとのあいだにある横棒は特有の価値をもっている(ソシュールで明らかにそういう価値はもっていなかった)。これはシニフィエの抑圧を表わす」[41]。

語ることと象徴化

ここで、シニフィアン/シニフィエの構造にかんして、象徴的なものの観点から根本的なことを確認しておきたい。それは、象徴とはそれ自体ではなく代わりのものによる表出であるということである。この点からシニフィアンとシニフィエの関係もまたシニフィアンがシニフィエの代わりをしていると捉えることができる。

このようなことから、言語記号は象徴に属するものであるといえる。オルティグは、こ

---

41 ロラン・バルト「記号学の原理」(『零度のエクリチュール』所収)、渡辺淳訳、みすず書房、1971年,p.145,カッコないは著者による)。

の点について、象徴 symbole の語源である再統合 sum-bolon にふれながら、古代ローマでもちいられた象牙札を例に出す。二人一組の各々にひとつの札を二つに割って渡し、子孫にまで伝えられたその象牙札の片割れが、のちに身元や血縁を保証ないし確認するものとなった[42]。ここでの象牙札とはつまり、それをもつ人物の身元や血縁関係の代わりをなすものであり、この意味で象徴の役割をはたしている。これと同じように言語活動も、広義においては、ことばがそれによって表わしているものの代わりに表出されているという意味で、象徴的なものひとつとして考えることができるだろう。

この観点から、ラカンのシニフィアン/シニフィエのアルゴリズムからいえることは、シニフィアンがシニフィエの代わりとして表出されることに、抑圧が想定されているということである。だが、このように捉えるとき、すでにソシュールの言語学とはおおきな隔たりがあるといわざるをえない。ソシュールのアルゴリズムは、いうまでもなくコミュニケーションを可能にしている言語記号の構造を示したものである。そういうものである以上、シニフィアンによってシニフィエが的確に指し示され、そのことによってシニフィエの意味内容が明白になること、つまりシニフィアンとシニフィエのあいだの関係は透明であることが、議論の前提にある。

ソシュールは、シニフィアンとシニフィエは、一枚の紙の裏と表の関係であると述べた。つまり、シニフィアンが現われるとき、そのシニフィエは即座に明白にその意味内容が示されているのでなければならないと考えた。だが、ラカンのアルゴリズムが抑圧を示すものであるとき、そこにはシニフィエにかんしては無知であることが示されている。無意識に抑圧されているというのは、いうまでもなく抑圧されているものが意識にのぼることなく、不明なままにとどまることだからである。このとき、ラカンがどのような意味でシニフィアン/シニフィエのアルゴリズムを提出したかを理解するため、ラカンが象徴化ということをどのように考えていたかをみておかねばならない。

くり返しになるが、ソシュールの観点とラカンの観点はまったくべつであるということを断わっておきたい。それゆえラカンのいうシニフィアン/シニフィエは、もちろんソシュールを出どころとしているが、その意味するところはまったくべつなものになっている。後期に、ラカンは自身のこのような言語学趣味について、私の「言語学もどき linguisterie」とみずから呼ぶことになる。それゆえ、ここでのシニフィアン/シニフィエにかんしても、ソシュールと切り離して、精神分析のコンテクストのうえで理解しなければならない。そのために再度、1954年5月19日付のセミネールに戻ることにしたい。

象徴化における象徴化されえないもの

ラカンは、オオカミ男の 4 歳まえという時期が彼にとって象徴界の関与にさらされる時期であるというかぎりで、この時期のオオカミ男に注目した。それはラカンによって、想像的侵入によって刷り込まれたものが、象徴的統合をうけるとされた時期である。簡略に

---

[42] cf.E・オルティグ『言語表現と象徴』、宇波彰訳、せりか書房、1970,p.83.

述べるなら、イメージのみ与えられていたものが言語化され、意味が与えられる時期である。この意味が与えられる瞬間に、同時に抑圧も生ずる、とラカンは考えている。どういうことであろうか。ラカンは、四歳まえの時期にオオカミ男が決定的な象徴化を経験しているとしたのち、次のように述べている。

> この時期に、主体が統合しつつある象徴的世界そのものにおいて、なにかが主体から引き離されるのです。それ以降は、それはもはや主体に属するものではなくなってしまいます。主体はもはやそれを語りませんし、もはやそれを統合しません。しかしそれは、そこにとどまって、主体がそれについて主人ではないなにものかによって、どこかでいわば語られるのです。これが、その後、症状と呼ばれるものの最初の核です。(SéI215)

このようにラカンは、象徴化のさいに、象徴化されえないものすなわち意味作用を付与されないものが残されると考えた。つまり、象徴化において意味を知りえないものが生ずるのである。このように、ラカンの考える象徴化には必ず象徴化されえないものが残されるのである。こう考えることによって、ラカンのアルゴリズムにおける下部の抑圧されたものであるシニフィエを、象徴化されえず、それゆえ意味を知りえないものとして捉えることができる。このような意味において、それはフロイトが無意識と呼んだ領域に属するものなのである。さきに、ラカンは自身の言語学趣味を言語学もどきと呼んだことを指摘したが、ここにこそ、言語学と精神分析におけるコンテクストの違いがある。次節においては、この違いを明白にし、それによって精神分析の領域を明らかにしていきたい。

第三節　ディスクールにおけるしくじりとしてのパロール

ラカンによる「抑圧されたものの回帰」にかんする解釈

前節でみたように、ラカンは抑圧を象徴化と関連づけた。象徴化とは語ることである。それゆえ、語るとは抑圧することになる。このとき、象徴化されえないものが生ずるとされる。抑圧は、この象徴化されえないものが生ずることとかかわっている。では、このときフロイトがメタ心理学的理論において提出した抑圧されたものの回帰について、どのように考えられるだろうか。このことを考えることで、言語学と精神分析における語ることの違いを明らかにしたい。

フロイトは、抑圧されたものの回帰によって症状のメカニズムを示した。これについては、「抑圧が失敗する段階、一度抑圧されたものの再突出」(FP191)と述べられていた。簡略に述べるなら、意識において和解しがたい表象である性的なものが抑圧されるが、それが姿を変えて、症状として回帰してくるのである。では、抑圧を象徴化すなわち語ることと捉えるとき、抑圧されたものの回帰とはどのように捉えられるだろうか。

ラカンは、「抑圧と抑圧されたものの回帰は同じものである」(SéI216/ SéIII94)と述べる。これは、フロイトが「症状形成のメカニズムと抑圧のメカニズムとは一致するだろうか。それにたいしてさしあたりいえそうなことは、この両者はまったく違うものであり、(…)症状を作るものは抑圧それ自体ではなくて、まったくべつな過程から発生する抑圧されたものの回帰のしるしだということである」(DV114)と述べている以上、明らかにフロイトの考えとは違っている。このようにいわれるのは、ラカンが抑圧を象徴化によって解釈したからである。こうしてラカンにおいて、抑圧と抑圧されたものの回帰は両方とも、象徴界においてはひとつの現象として捉えられることになる。語ることは、それ自体において語りえないものを表現の水面下に沈めてしまう意味で抑圧であると同時に、そのものの代わりとして表出しているという意味では抑圧されたものの回帰と考えられるのである。

成功したディスクールとしてのコミュニケーションとそのしくじりとしてのパロール

ここでふたたび 1954 年 5 月 19 日のセミネールに戻りたい。このようなラカンの考えにかんして、マノーニは分析家の立場から、「そのことは、成功した抑圧もときどきみられるという考えかたを退けるものですね」と質問し、それにたいしラカンは「いや、そういう考えを退けはしません」(SéI216)と応えた。

「成功した抑圧」とはフロイトが論文「抑圧」のなかでもちいた表現であり、そこでは性的な表象が意識にまったく現われ出ないことが抑圧とされているため、症状においてそれが完全になされているなら成功した抑圧といわれている(DV115 -118)。これにたいし、ラカンの「抑圧と抑圧されたものの回帰は同じである」という発言は、たしかに、語ることは必ず語りえないものというしくじり erreur を生じさせるため、語ることそれ自体を症状とも捉えられる。この場合、ひとが完全なる沈黙のなかにでもいないかぎり、成功した抑圧ということはいえなくなるだろう。

だが、ラカンは成功した抑圧という考えを退けないという。このことからラカンには、成功した言語活動というのが想定されていることがうかがえる。それがコミュニケーションであり、言語学がその仕組みを追及している領域である。精神分析の言語活動をそれと区別するため、ラカンはパロール parole に独特の意味を与える。言語学も、精神分析も、「ひととひとが語る」という意味でのディスクールがその研究分野となるが、言語学はそこでコミュニケーションといういわば成功したディスクールの仕組みを追及し、精神分析はディスクールにおけるしくじりにかかわることを探究する。ラカンのいうパロールとは、このディスクールにおけるしくじりのことなのである。

コミュニケーションとは、ラカンの考えによれば、ことばを交わしている二人のあいだで「対象についての合致」を目指したものとされる (SéI126)。それは、「すべての意味作用は他の意味作用へと回付される」(SéI272 / E352,etc)と述べた言語活動において問題となる。ここに、伝達されなかったものつまり理解されえないものが残ったとすれば、それは失敗したコミュニケーションとされるだろう。だが、言語活動はそれだけに限定されるべきで

はない。これにたいしパロールというしくじりの残されたディスクールというのが想定されるのである。

ラカンが成功した抑圧という考えを退けなかったのは、言語活動にかんしてコミュニケーションの側面をラカンが想定していたからであろう。だがそれは、言語学の研究領域である。ラカンは、「無意識が発見されてからというもの、言語学へと入っていかないことは難しいことなのです」と述べながら、しかし精神分析は「言語活動にかんするすべてを言語学から、最終的には言語学者から切り離してしまった」(SéXX19)と述べる。簡単にまとめるなら、言語学がコミュニケーションを前提とし、それがうまくいく仕組みを言語記号の考察によって追及したのにたいし、精神分析はそれがうまくいかない点において誕生するのである。

だがこの区別は、厳密には、あるディスクールは成功したものと捉えられ、べつのものはそこにしくじりが残されるというふうに区別されうるものではなく、ひとつの言語活動の二つの側面であると捉えるべきだろう。

ラカンは、「真のパロールは、ディスクールをしくじり l'erreur へと捧げられたものとして現われさせる」(E351)と述べた。このしくじりにおいて象徴化されえないものが問題となり、このとき精神分析は誕生する。だがこれは、精神分析の観点からすると、あらゆるディスクールに内在していることといえるだろう。しかしそれが日常においていちいちとくにとりただされないのは、「成功した象徴的統合がすべて一種の正常な忘却を含んでいる」(SéI216)からであるとラカンは述べる。このようにコミュニケーションは、ある忘却のうえに成立していると考えられる(ここでの「忘却」はハイデガーの考えに則ったものである。第三部一章第六節を参照されたい)。

ことばによって意思を伝えることができたと思うこと、つまりことばによるやりとりがうまくいったと感じること、さらにそれによってお互いわかりあうことができたと信ずること、つまり共感すること sympathie、それらはあることを忘却することのうえで成り立っていると考えられる。この忘却されているものとかかわることが、精神分析の領域を切り開くことになる。ラカンは、抑圧を言語活動と結びつけることで、この領域を切り開こうとしたのである。

このように、ディスクールのしくじりにおいて問題となる象徴化されえないものによって切り開かれる領域があり、ラカンは、この領域をフロイトの抑圧と結びつけるのである。では、その理論化であるラカンのアルゴリズムをどのように捉えたらよいだろうか。これは同時に、フロイトにおいて抑圧されるものとされた性的なものを、ラカンがどのように捉えたかという問題でもある。この問題を検討するために、われわれはラカンにおけるシニフィアン概念の練り上げとフロイトにおける性的なものの関連性を明らかにしていきたい。

第四節　愛の要求と欲望　―ラカンにおけるシニフィアン概念の練り上げ１

愛におけるパロールのしくじり

ラカンが言語活動において注目するのは、ディスクールのしくじりとしてのパロールである。「真のディスクールは、提出されたパロールから約束にかかわることを取り消してしまうなら、パロールを嘘として現われさせることになる」(E351)とラカンは述べる。コミュニケーションがうまくいっていると双方が感ずるためには、暗黙のうちに前提とされていることがある。それは、その対話をおこなう人物が嘘をいっていないと信ずることである。その信頼が暗黙のうちになければ、コミュニケーションがうまくいっているかどうかを検討すること自体がナンセンスなことになってしまう。だが、精神分析の領域はまさにこの嘘でもありうるパロールによって切り開かれる。

ラカンは、フロイトが真理の条件にかかわる機知として提出した、「君はなぜ私に嘘をつくのだ(…)。そうだ、君はじっさいはクラコヴィーに向かっているのに、私がレンベルクに向かっていると思い込むように自分がクラコヴィーに向かっていると私にいって、嘘をつく。なぜなんだ」というものにかんして、「パロールのシニフィアンにたいする関係が、シニフィアンが最高頂を極める懇願 adjuration のなかで現われています」(E20)と述べる。対話のなかで相手のいっていることをまったく信じないこと、つまりそれを嘘とみなすという可能性は日常のディスクールにおいて忘却されている。逆にその点を気にかけすぎたなら、日常のやりとりがスムーズかつ迅速に進まなくなるだろう。

だが、ディスクールによっては、いやがおうにも相手にたいする疑いが生じてくるものがある。たとえば、恋愛のディスクールである。オセロを陥れるためイアーゴーは、オセロの妻であるデズデモーナが不義をおこなっているという嘘の密告をする。イアーゴーはいう、「嫉妬につかれた男には、空気のように軽いものが聖書のことばと同じ重みをもってくる」[43]。イアーゴーの嘘の密告にたいし、オセロはうえのフロイトの機知の人物のように息せき切って叫ぶ。「正直にいう、おれは妻の誠実を信じながら、同時にその不義を疑っている、またお前の正義を信じながら、その不正を疑っている。おれは是が非でも証拠がほしいのだ」[44]。ここにはコミュニケーションのしくじりがある。愛における嫉妬から生じた疑いが、ディスクールにおいてパロールを嘘でもありうるものとして、現われさせている。しかもこのしくじりは、ひとがことばをもちいるがゆえに生じるものであるため、解消されることはないだろう。だが、ここにこそ精神分析における言語活動の領域があり、ラカンがシニフィアン概念を練り上げるもまさにこのしくじりにおいてなのである。

ラカンは、「愛 amour は記号を生み出しますが、その記号はつねに相互的 réciproque です(行ったり来たりするだけです)」(SéXX11)と述べる。そして、「愛は、さらに、愛を要求」(SéXX11)してしまう。そしてこの愛の行ったり来たりする特徴のために、「ひとは無意識を

---

43 シェークスピア『オセロ』福田恆存訳、新潮文庫、1973,p.97.
44 シェークスピア、同上,p.100.

発明した」(SéXX11)と述べ、これを補足して「愛は、欲望についてなにひとつ知らない一個の情熱であるけれども、欲望をもはや放っておくようなことはありません」(SéXX11) といっている。

この一文こそ、じつはシニフィアンの定義でもあるのだが、その点については次節の結論でふたたびふれたい。ここでは、ラカンのシニフィアン概念の練り上げをみていくために、愛がラカン理論のなかではどのように位置づけられているか確認することからはじめたい。ラカンが愛について述べるとき、それは愛の要求としてであり、このとき欲求 besoin と欲望 désir との関係からそのようにいわれるのである。では、それらはどのように説明されているだろうか。

欲求、要求、欲望

「要求が欲求から分裂するときの余白から、欲望が芽生えます」(E814)。このように欲望は、要求と欲求のあいだのずれから生ずるとされる。なぜ、欲求と要求のあいだにずれがあるのか。それは、要求によって求められるもののうちに、欲求の満足を超えるものが含まれているからである。

このような考えは、フロイトの着想に則ったものである。ここでいわれている欲求を、フロイトのいう生の困窮から生ずる内側からの刺激つまり自己保存欲動であると捉えることができる。つまり、生理学的あるいは生物学的なものである。しかし、人間はそれが満たされるだけでは満足できないというのがフロイトの根本的な考えであり、このとき性的なものが問題となるのであった。ミルクを与えられ満たされているはずの赤ん坊は、おしゃぶりをする。なぜか。このことを説明するのに、フロイトは性的なものをもち出したのであった。

人間には、かつての充足体験が書き込まれており、その書き込まれたものの再現を目指さす揺動が蠢いているのである。この揺動をフロイトは欲望と呼んだ。つまり人間は、たんに生理学的欲求だけではなく、この欲望満足をも目指しているのである。このようなフロイトの考えを、ラカンは言語活動の観点から練り上げなおす。このとき、言語活動の観点から要求が取り上げられることになる。

ラカンのいう欲望も、それが生理学的欲求の満足では満たされないものとかかわっているかぎりで、フロイトの欲望と同じものと捉えることができる。だが、その欲望の生じる過程の説明には違いがある。フロイトはメタ心理学における心的装置のなかに充足体験の書き込みを想定したのにたいし、ラカンは言語活動の観点からアプローチする。だが、ラカンの理論はフロイトから遠ざかるものではない。むしろ、フロイトの考えのもと、あるいはそれに則って、再構築されたものだといえる。

フロイトにおいて充足体験とは、寄る辺なき人間の赤ん坊が成人した大人の助けを借りて、困窮状態を切り抜けることの体験であった。つまり、そこには他者の経験が重要なものとしてあった。同様に、ラカンの取り上げる要求もまた、他者への訴えかけである。こ

のときラカンは、このような要求を、愛の要求とする。「要求は、与えられうるものすべての特殊性を、愛の証 preuve d'amour へと変形させることで、取り消します(止揚します) annule《aufhebt》」 (E691)。

要求は要求されるものの数だけさまざまな特殊性を備えたものだが、それらはすべて愛の要求と捉えることができる、というのがラカンの考えである。このときその要求にたいして与えられたものには不満足が残される。なぜ要求したものが与えられたとしても、不満足が残るのか。それは、他者への訴えかけのなかに愛の要求が含まれているからである。

このとき、ラカンは明言していないが、フロイトにおける充足体験の書き込みとは愛の書き込みであると理解しなければならない。もっと正確にいうなら、他者から愛されたことの経験である。他者から与えられた充足体験とは、愛されたことの経験として書き込まれるのである。人間が欲求を満たすだけでは満足できないのは、人間がこの愛をもまた求めているからである。要求にかんして、ここでラカンのいう欲求と要求のずれを正確に理解することができるだろう。つまり、生理学的な欠乏から欲求が生じ、その欠乏するなにかをことばによって要求するとき、このとき語る存在は、他者をも、愛の要求の構造のなかに引き込むしかたで要求しているのである。それゆえ、与えられたものによって欲求が満たされたとしても、愛が不足しているがゆえに満足できないのである。

ラカンが、「要求が欲求から分裂するときの余白から、欲望が芽生えます」(E814)と述べるのは、要求がなされるとき、生理学的欲求を超えたものを愛の要求として他者へ訴えかけているからである。要求が愛の要求であり、生理学的な欲求の満足がそれを満たすことができないため、その余白から欲望が生じるのである。

第五節　大他者の欲望にかんする無知とシニフィアン　—ラカンにおけるシニフィアン概念の練り上げ2

大他者の欲望の欲望

では、愛の獲得ということはありうるのだろうか。ラカンの意味においては、それはありえない。「愛 amour は記号を生み出しますが、その記号はつねに相互的 réciproque です(行ったり来たりするだけです)」(SéXX11)。「愛は、さらに愛を要求」(SéXX11)してしまう。この点について、ラカンはどのように説明しているか。

さきほど、欲求と要求のずれにおいて欲望が生ずるというラカンの発言をみた。また要求とは言語活動によってなされる。つまり、要求は象徴化されたしかたでなされる。このとき愛の獲得がありないのは、この欲望の成就が象徴化されえないものとかかわっており、その無知によって不可能となるためである。

ラカンは欲望について、「人間の欲望は他者の欲望である」(E319)と述べる。これについては、「本質的な欲望とは、大他者の欲望の欲望、つまり欲望されたいという欲望なのです」(SéV271)とも述べられている。この意味するところは、「欲望とは、「私は、彼女す

なわち母親が欲望するものでありたい」」(SéV454)ということである[45]。つまり、愛が獲得されるには、みずからが相手から欲望される対象とならなければならないのであり、そのためには「汝、なにを欲するか」、つまり相手の欲望するところのものがなんであるかを知る必要がある。しかし、ここに言語活動の壁が立ちはだかる。言語活動において相手の発言を嘘とみなす可能性を消すことができない以上、その知を獲得することはできない。このように人間は言語活動によってみずからの欲求を要求しなければならなくなるが、このときのずれから生ずる欲望は皮肉にもその言語活動によって袋小路に陥ってしまう。そして、このような愛の要求における他者の欲望にかんする無知こそ、言語活動における象徴化されえないものの出現として捉えることができるのである。

このとき要求が向けられる他者、つまりなにを欲望するのかということが要求する者によって切実な問題となるような他者を、ラカンは大他者 Autre と呼ぶ。ラカンは大他者を、言語活動を可能している体系つまりパロールの場(SéV476)として提出する場合もあるが、要求を向けられる他者もまた大他者と呼ばれるのは、要求における他者にかんして精神分析にとって重要となってくるのが、言語活動によって覆われてしまった欲望、つまり大他者の欲望だからである。

> 大他者がわれわれにとって不透明なのは、大他者のうちに、われわれの知らないなにかが存在するからです。このなにかが、われわれを、われわれの要求にたいする大他者の応答から隔てています。それが、大他者の欲望と呼ばれているものにほかなりません。(SéV476)

語る存在を大他者の欲望という迷宮に入り込ませる愛の要求、これはいわばコミュニケーションとしての言語活動の裏側といってもいいだろう。この欲望としての言語活動における媒体を、言語学においてコミュニケーションとしての言語活動の媒体が記号 signe と呼ばれていたのにたいし、ラカンはシニフィアン signifiant と呼ぶ。

ここでジュランヴィルによるシニフィアンの説明を取り上げてみたい。彼は、「ラカンは記号についてではなくシニフィアンについて語っているのだ」と断りを入れながら、「シニフィアンが意味するものだとすれば(…)、それぞれのシニフィアンは、ほかのすべてのシニフィアンと同じものを意味する」とし、その意味するところのものを「汝、欲望せよ！」[46]であるとしている。

本章第四節において精神分析はディスクールのしくじりとしてのパロールに注目することをみた。ここで言語活動における欲望を取り上げることで、このしくじりがじつはこの欲望によって生じるものであることがわかる。

---

[45]引用では「母親」となっているが、これはエディプス・コンプレックスのコンテクストに則った発言だからである。必ずしも母親である必要はない。

[46] A・ジュランヴィル『ラカンと哲学』高橋哲也他訳、産業図書、1991,p.42.

シニフィアンと欲望

もういちどさきほどのフロイトの機知で考えてみたい。「君はなぜ私に嘘をつくのだ」という鬼気迫るような質問は、「君はそのようにいうことでなにを欲しているのだ」といいかえることができるだろう。このときジュランヴィルの説明するシニフィアンを理解することができる。この鬼気迫る質問をなしている者は、「汝、欲望せよ！」というシニフィアンにしたがって、相手の欲望へと向かわされている。つまりこの機知は大他者の欲望の知を追及する発言と捉えることができる。このようにパロールには、それ自体のなかに欲望が含まれている、つまり大他者から欲望されるという欲望が含まれているのだが、その大他者の欲望は言語活動の壁に阻まれ語る存在にとっては不透明であるがゆえに、そこに必然的にしくじりが生ずるのである。

この点をラカンは、人間のつまり語る存在の、言語活動を介した欲望とは大他者の欲望である、すなわち大他者から欲望されるという欲望である、と定式化したのである。だが、言語活動の性質上、われわれはそこに到達することはできない、つまりそれについて知ることはできないのである。ここに、言語活動における象徴化されえないものが生ずる。つまりそれは、大他者の欲望にかんする知なのである。

ここで前節において解釈を保留したラカンの愛にかんする言及を、シニフィアンの定義として捉えることができる。それは、「愛は、欲望についてなにひとつ知らない一個の情熱であるけれども、欲望をもはや放っておくようなことはありません」(SéXX11)というものであった。ここでの「愛」をシニフィアンと読み替えることが可能である。シニフィアンは、語ることの裏側で大他者の欲望を「放っておくことは」できないが、これについては「なにも知らない」。このように、ラカンにおけるシニフィアンとは、言語活動における欲望の側面を理論化したものなのである。

第六節　ラカンにおける愛とフロイトの肛門期における愛の交渉

抑圧と主体の問題

前節でみたようにラカンのシニフィアン概念は、いわばコミュニケーションの裏側に目を向けることであり、それによって欲望として言語活動を問題にするための概念であるといえる。このとき、そこには大他者の欲望の知という象徴化されえないものが残されることになる。ラカンは、この他者の欲望の知という象徴化されえないものが残されることとの関連から、抑圧を捉えるのである。

こうして語る存在のあらゆる発言は、すべてパロールと捉えることができ、そのとき発せられたことば自体をシニフィアンと捉えることができる。たとえば、「今日はいい天気ですね」というなにげない発言であったとしても、「あなたはそういうことで私になにを欲しているのか」という問いを向けることは可能である。このとき、この発言はシニフィ

アンとして捉えることできることになる。こうしてラカンがシニフィアン概念を提出することで、どのように抑圧を捉えたかについての手がかりをわれわれは得ることができたことになる。

$$\frac{S}{s}$$

だが、本章第二節でみた上記のアルゴリズムは、言語活動と抑圧の関係を正確に示したものとはじつはいえない。さきにバルトが横棒を抑圧として捉えた解釈をみたが、あくまでそれはその当時のラカンの考えをいうならば、という譲歩が必要である。ラカンのシニフィアン概念は、その練り上げとともにすぐにこのアルゴリズムでは十分に示せなくなる。とりわけ、抑圧をこのアルゴリズムのシニフィアンとシニフィエのあいだにみるという解釈は、フロイト/ラカンの抑圧解釈としては正確であるとはいえない。たしかにラカンにおいてシニフィエとは、シニフィアンが欲望を促すかぎりで、その指し示すところの不明なもの、つまり知として把握不可能なものすなわち象徴化されえないものであり、抑圧とはもちろんこの事態とかかわりのあることではあるが、ここには同時に主体の問題がかかわっているのだが、上記のアルゴリズムはこれをうまく表現できていないのである。

ラカンにおける抑圧をどう捉えるかにかんする議論は次章に、さらには第三部においてハイデガーの議論をひととおり確認したあとにまわさざるをえないが、ここでは、フロイトの最終的な考えからいっても、フロイト/ラカンにおける抑圧とは、フロイトが「自我の分裂 Ichspaltung」(IA392)と呼んだ事態、またラカンが主体にかんする「脱中心的位置」(E11)と呼んだ事態のことを示していることを指摘しておこう。つまり抑圧とは、ヨーロッパが近代以降「私」なるものを探究するための支えとしてきたアイデンティティーすなわち自己にかんする同一性というものにたいし、「否」といいはなつ考えなのである。

ラカンはそのような抑圧理論を、シニフィアン概念を練り上げることによって言語活動と結びつけた。それはつまり、ひとは語ることにおいて、その主人ではありえないとする思想である。ラカンによれば、われわれは語ることにおいて、われわれ自身から疎外される。この現象が抑圧なのである。だが、この点をみていくのは次章にまわし、ここでは最後に、このラカンの抑圧理論の再構築がどの点までフロイトの理論に則ったものであるかを見定めておきたい。

フロイトにおける愛の交渉

フロイト理論においては、肛門期において愛の交渉と呼ばれうるものが取り上げられた。人間の幼児は寄る辺なき存在であるため、困窮状態に陥ると成熟した他者からの補助を受けることが不可欠であった。このとき性的なものとは、この他者からの補助にかかわるものであった。このとき幼児は、なるべく快楽の状態を持続させ少しでも不快をわずかのものしようとするだろう。そのためには、自分の世話をしてくれるひとにできるだけ長いあいだ自分のそばにいてもらう必要がある。ここに、愛の問題が交渉というかたちで生ずる

とフロイトは考えた。

そして、この交渉は、肛門期に糞便を使って開始されるとフロイトは考える。「糞便は子供の最初の贈物であり、子供の身体の一部である。乳児は、愛する人 geliebten Person の勧告にしたがって糞便を分離し、それによってそのひとにたいする情愛 Zärtlichkeit を自発的に示す」(TA128)。世話をする大人は、自分の都合からあるいは赤ん坊の健康状態にかんする危惧から、糞便を決まった時間にできるだけきれいな状態でしてほしいと望むものである。また、この時期の寄る辺なき幼児にとって、糞便とは自分から切り離し相手に与えることのできる唯一のものである。こうして糞便は、両者において異なる意味をもちながらも、互いの関係性をつなぐ媒体となる。つまり、愛を獲得するための交渉の道具となるのである。ここに、ラカンにおける愛とは愛されることを欲することであるという考えの原型をみることは可能であろう。つまり、肛門期において幼児は、愛を要求する者として、つまり大他者の欲望を欲望する者として、愛の交渉をおこなうのである。

もちろん、フロイトは幼児がこれらのことを意識しながら、肛門期を経験しているとは考えていない。フロイトは「欲動とその運命」のなかで、「ここでは仮に愛を、快楽の源泉にたいする自我の関係と定義しておく」(TT98)と述べている。「快楽の源泉」とは、充足体験の書き込みのことであり、それと自我との関係とは、書き込まれた充足体験を再現しようとする心的営みの揺動と捉えることができる。この揺動をフロイトは欲望と呼んだ。このようなメタ心理学的理論は、意識や意図のかかわっていない人間の心的営みを説明するためのものであった。つまり、フロイトにおいて愛の交渉とは無意識の領野にかかわるものなのであり、その源泉に充足体験が想定され、その体験が他者から与えられたものである以上、「愛する」という能動的表現にあっても、「愛されたい」という受動的側面がその水面下では蠢いているのである。それゆえ、精神分析において愛はナルシシズム的なものとされる。ラカンもまた、「分析が証明するように、愛は本質においてナルシシズム的なものです」(SéXX)と述べる。そして、この「愛されたい」と欲する揺動こそ、肛門期における性的なもののありかたなのである。

このようにフロイトは、肛門期に、性的なものへの揺動が、愛の交渉として、糞便を媒体とした交渉というかたちで現われると考えた。フロイトの場合、この交渉は、発達論の第二段階で現われるものであるため、そののち、性器期にいたり、性器が自体愛の部位となったさい去勢の問題と遭遇し、抑圧されることになる。だが、フロイトにおいても抑圧されるものである性的なものが、いちどは愛の交渉のかたちをとると説明されているという点は注目すべきである。

「フロイトは、Verdrängung(抑圧)という現象は、シニフィアンの表現の次元に属するなにかが脱落することにある(…)と述べているのです」(SéIII204)とラカンは述べる。ここでシニフィアンの次元から脱落するなにかとは、大他者の欲望の知を象徴化することのできない事態をさしている。つまり、愛の交渉が言語活動によっておこなわれるようになるとき、その記号のやりとりの裏側で欲望の弁証法が起こり、そこで大他者の欲望にかんして

象徴化されえないものが生じること、それが抑圧であるとラカンは考えているのである。

このような考えは、フロイトが神経症の症状において重要な原因となると考えた性器期における抑圧の前段階に、性的なものが愛の交渉として現われる事態を取り上げていることからみても、フロイトの理論を逸脱したものではなく、むしろそれに則ったものであるといえるのである。

第二章　シニフィアン連鎖と抑圧

抑圧にかんするフロイトとラカンの理論化の違いから、二人のあいだには、抑圧されたものである性的なものをどのように捉えるかという点にかんしても違いが確認される。フロイトは、晩年の論文「終わりある分析と終わりなき分析」(1937)において原抑圧によって抑圧されたものつまり無意識の領野にかかわるものを「抑圧された揺動 verdrängten Regungen」(EU363)と表現した。

われわれは、この揺動というタームに注目したい。これは、メタ心理学再構築期の論文「無意識について」(1915)においても「無意識の欲動揺動 Triebregung」あるいは「抑圧された欲動揺動」(DU136)ともちいられており、さらにさかのぼり『夢解釈』第七章のなかでも、充足体験の記憶痕跡から、その体験を再現しようとする傾向性のことが「心的揺動 psychische Regung」(TD539)とされていた。さらに、この心的揺動は「欲望 Wunsch」といいかえられていた。このようにフロイトは、一貫して、メタ心理学的理論における抑圧されるものにかんし、揺動という表現をもちいている。

"Regung" とは一般には、「感情の動き」を示すことばである。この表現からは、ある一定の方向性、この場合は充足体験の再現という方向性をもった力のようなものが想像される。このようなことから、フロイトは抑圧されるものを流れのようなもの、あるいは力として捉えていたことがうかがえる。想い出していただきたいが、フロイトはメタ心理学的理論の特徴のひとつとして力動論的観点をあげていた。

だが、これについてはフロイト自身「それ(＝抑圧された揺動という表現)は表現上の無害な怠慢とでもいうべきものである」(DU136,カッコ内は引用者)とも述べていた。このような表現は、つまるところ無意識を、人知を超えた神秘的ななにかとしてイメージさせることになりかねない。フロイトは、無意識をそのようなものとして提示したのではなかったはずである。しかしフロイトは、この表現よりもさきへ進むことはなかった。これにたいし、ラカンは「無意識は力動的なものだというのでは十分ではありません。それでは、ある特殊な神秘をありふれた神秘の次元で置き換えたにすぎません。力、これは不透明な場を示すのに

一般的に使われるものです」(SéXI24)といって批判し、「無意識は言語活動のように構造化されている」(SéXI23)と定式化したのであった。こうして、ラカンによって無意識は言語活動と直接結びつけられたものとして理論化されることになったのであった。

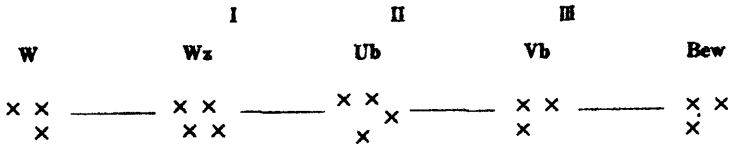
この定式についてラカンは、「この定式はフロイトの時代に比べればはるかに接近しやすくなった」(SéXI23)と述べる。このときラカンの念頭にあるのは、ソシュールに端を発する構造主義的な考えかたである。だが、前章でみたように、言語記号において意味作用が生ずる仕組みを説明するためのものであるソシュールの考えがそのまま採用されたわけではなかった。ラカンはソシュールのアルゴリズムから、シニフィアンをシニフィエから切り離し、シニフィアン独自の運動を見出すことで無意識をシニフィアン連鎖のかかわりから捉えなおすのである。結論からさきに述べるなら、ラカンはフロイトが揺動と表現した抑圧されたものである無意識を、シニフィアン連鎖として解釈するのである。だがこの解釈においても、フロイトの理論をけっして無視してはいない。むしろ、フロイトのメタ心理学的図式に則ったしかたで、理論的な再構築はおこなわれている。では、ラカンがフロイトの無意識を、シニフィアン連鎖としてどのように再構築したかをみていきたい。

第一節　フロイトにおける揺動とラカンにおけるシニフィアン連鎖

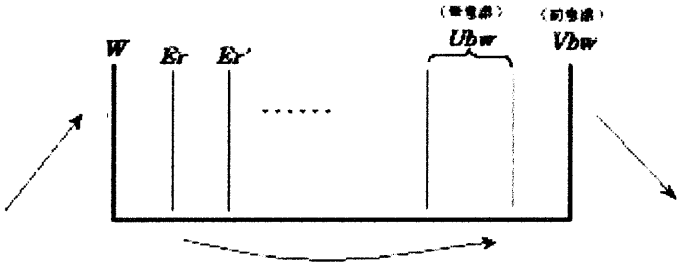
フロイトにおける揺動あるいは情動的なものと抑圧

ラカンは、われわれが第一部第一章においてみたフロイトのフリースへの手紙 112 におけるメタ心理学の図式のなかの知覚記号が、みずからの述べるシニフィアン、それも原初的シニフィアン signifant primordial にあたると明言する(SéIII177)。知覚記号は、『夢解釈』第七章においては回想痕跡とその呼称が変更されていた。もういちど、確認しておこう。

手紙 112 における図式



『夢解釈』第七章における図式



うえの図式にある Wz が知覚記号であり、したの図式にある Er が回想痕跡である。この図式自体は両者とも、左側から右側へと、量あるいは興奮の流れを示したものであった。想い出していただきたいが、フロイトによるメタ心理学的理論構築の狙いとは心的営みを量によって示すことであった。このため、フロイトが抑圧されるものとした揺動とは、まさにこの流れのことであると考えられる。つまり、この揺動の通過のうまくいかないとき、抑圧がはたらいているというわけである。またいっぽうでフロイトは、「意識と記憶 Gedäfhtnis とは互いに相容れず、排除しあう」[47]という一貫した考えをもっていた。この意識にのぼることのない「記憶」が、無意識の領域をフロイトに想定させた。流れを表わす図式のなかにある書き込みは、この記憶を表わしたものであった。

もういちど基本構造を確認しておくが、フロイトにおいて不快は有機体内の量を増大させるものと考えられた。そのため有機体は、神経-慣性の原理にしたがって、体内の量を一定に保とうとするため量を放出しなくてはならない。そのためには、量の増大が、意識へと伝達される必要がある。それによって、意識がその量の放出に適した行動をおこなうよう有機体にはたらきかけることができるからである。その量あるいは興奮の流れがこのメタ心理学的図式によって、左端の知覚(W)から右端の意識(Bew)への移行によって示されていた。

だが、この量あるいは興奮の流れは、スムーズにつまりなんの抵抗もなくおこなわれるわけではない。フロイトの考えによれば、それは三つの場所に区分けされていた。つまり、量あるいは興奮が知覚(W)から、その量が意識(Bew)へと到達するのに、三つの場所を通り抜けなくてはならないのである。これを、フロイトは記憶の三層構造として理論化したのであった。それが、知覚記号/回想痕跡、無意識、前意識という三つの場所であった。

---

[47] 石澤誠一『翻訳としての人間』,p.39.

まずは知覚記号あるいは回想痕跡であるが、これはじっさいに知覚がなされる場所とはべつの場所になにかが書き込まれなければならないという考えにもとづいている。もしこの二つの場所が同一であるなら、新しい知覚にたいしてそれ以前の記憶の痕跡が影響を及ぼしてしまうだろう。しかし記憶は独立したものとして無数にあることから、知覚が書き込まれる第一の場所として知覚記号あるいは回想痕跡が想定されたのであった。充足体験もまた、ここに書き込まれたもののひとつである。充足体験はフロイトにおいては性的なものの源泉となるものであるため、特別な痕跡となる。つまりこの痕跡とかかわりをもつ揺動にたいして、前意識と無意識にあいだで抑圧が生じることになる。

次に、症状や夢の考察からフロイトは、この痕跡にたいして、われわれが意識においてもちいているのとはべつの独自の文法、つまり圧縮と移動あるいは置き換えのはたらく場所がなければならないと考えた。それがなければ、夢の意味不明さ、支離滅裂さ、荒唐無稽さあるいは症状形成の仕組みが説明できないのである。その場所を、フロイトは第二層として無意識とした。

そして最後の段階として前意識が置かれることになる。これは意識と直結している場所であり、まえの二つと違い、そこに書き込まれているものは想い出そうとすればいつでも意識において想い出すことができる。フロイトはそこに書き込まれたものを思考と呼び、それらを言語記号と結びつけて捉えた。

抑圧が想定されているのはこの無意識から前意識のあいだであった。性的なものと関係のない知覚であれば、量あるいは興奮の流れは、そのままそれぞれの場所を通過し、意識へと到達するだろう。しかし、性的なものにかかわることが知覚され、それにもとづいた量あるいは興奮が流れ出すとき、あるいは生の困窮状態に陥り有機体内の量が増大し、知覚記号あるいは回想痕跡を源泉としたものから性的なものとかかわりのある量あるいは興奮が意識へと流れ出すとき、無意識と前意識のあいだで抑圧が生ずるのである。この場合、揺動が抑圧されるとは、この無意識から前意識への流れが、性的なものとかかわる痕跡をそのまま前意識へと通すことをせずに、流れ自体をせき止めるか、その痕跡を無意識の作業によってべつの表象と結びつきうるに置き換えて通過させることを意味している。

このように、抑圧のかかわるものがあくまで揺動とされていることから、フロイトの心的装置のなかで彼の念頭にあった移行はあくまで量にかかわるものであることがわかる。メタ心理学とは、そのような目論見のもと構築されたのであった。つまり、フロイトは無意識を情動的なものによって捉えているのである。後期の論文「否定」(1925)のなかでも、「知的な機能が情動的なプロセスといかに異なるかが明らかになる」(VN373)と述べられ、無意識を情動的なものにとして捉えるという考えは保持されている。フロイトがこの論文のなかで「知的な機能」と呼んでいるものは、言語活動である。このようにフロイトは、揺動あるいは情動的なものとして抑圧されるものを捉え、知的な機能の代表的なものとして言語活動を考えている。

また、フロイトのメタ心理学的理論構築において、言語活動は一貫して前意識に結びつけられていた。彼のこのような考えは、最後まで変わることはない。フロイトの無意識とラカンの無意識が大きく異なるのはこの点である。

ラカンにおけるシニフィアン連鎖と抑圧

これにたいしラカンは、「みなさんが真理を探究しようとするさい、情動的なものと知的なものという対置を使うこと、これを徹底的に放棄しなくてはなりません」(SéI302)と明言する。つまりラカンは、前章からみてきたように、言語活動においてコミュニケーションや意味作用とはべつのはたらきを見出し、そこに無意識を想定したのであり、抑圧もこのような言語活動とのかかわりから捉えるのである。

それがシニフィアン概念の練り上げによって理論化されていることは、前章においてみた。ここでは、ラカンによるシニフィアン概念の練り上げが、上記のようなフロイトとの違いがありつつも、そのほかの点ではフロイトの着想に則っていることを確認しておきたい。そのことによって、さらにラカンがソシュール言語学のどの点をみずからの理論形成において取り込んだかを明らかにし、さらにラカン理論におけるシニフィアン概念の独自性を明らかにしたい。

ラカンはフロイトの提出した上記のメタ心理学の図式に注目する。さきほどみたように、ラカンはフロイトのいう知覚記号を原初的シニフィアンに相当するものであると述べていた。つまり、このフロイトの図式から、シニフィアンにかんする理論構築をはじめるのである。だが、左側から右側への移行は、ラカンにおいては量の移行でも、興奮の移行でもない。ラカンにとって「無意識は言語活動のように構造化されている」。このときフロイトのメタ心理学的図式の左側から右側への移行は量の移行ではなく、ラカンにおいては、シニフィアンの連鎖とその諸効果であると捉えるべきなのである。

ラカンは、メタ心理学的図式から量の移行という観点を捨て去り、フロイトが指摘したそれぞれの場所での書き込みをシニフィアンが連鎖していく過程として読み替えたのだと理解できる。

シニフィアンが連鎖するのは、シニフィアンが「それ自体ではなにも意味しない」(SéIII210)からである。これは、言語記号に意味作用が生ずるのはほかの言語記号との差異によってであり、そのためにラングという構造を必要とするというソシュールの構造主義的な考えに則ったものである。しかし、ソシュールにおける構造とはあくまで静的な体系でありそこに連鎖という発想はない。これはラカン独自の考えであるが、この違いは言語記号の意味作用の仕組みを明らかにしようとする言語学と、その裏側で起こっていることを探究しようとする精神分析との根本的なコンテクストの違いに由来している。次節では、フロイトのメタ心理学的図式をシニフィアン連鎖の観点から捉えることで、ラカンがソシュール言語学をどのように受容し、いかなる点にラカンの独自性をみることができるかを

明らかにしたい。これによって、シニフィアン連鎖とのかかわりから抑圧を理解することができるのである。

第二節　メタ心理学的図式のシニフィアン連鎖による読み替え

原初的シニフィアン(＝S_1)と意味作用のための連鎖

第一部第一章でみたが、フロイトのメタ心理学的理論は、知覚記号あるいは回想痕跡において書き込み Niederschrift がなされることからはじまるのであった。その書き込みは無数にあるだろうが、精神分析で問題となるのは充足体験の書き込みであった。フロイトの考えでは、人間のばあい、たんなる困窮状態の生理的な満足のみが書き込まれるわけではなかった。寄る辺なき存在である人間の幼児は、内側からの困窮状態を打破するために、成熟した他人の助けを必要とした。このとき、他者から世話をされたということが愛されたという経験として書き込まれる。つまり、充足体験の書き込みとは愛の書き込みでもあった。

ところでメタ心理学再構築期にフロイトは、人間を内部から突き動かすものとして、欲動という概念を提出した。フロイトは二つの欲動を想定し、食欲のような生理的困窮から発せられる自己保存欲動とはべつに、この愛の書き込みにかかわる欲動を性欲動とし、それこそが精神分析において問題となる欲動とした。このように、『夢解釈』期において量や興奮の流れとされたものが、メタ心理学再構築期においては性欲動とされたのであった。抑圧という運命を被るのもまた、この性欲動であった。このような点から、フロイトは、無意識を流動的なものあるいは力として捉えており、抑圧されるのもこのようなものであると考えていたといえる。

これにたいしラカンは、フロイトにおいては量や興奮あるいは性欲動の流れと考えられる左側から右側への移行を、シニフィアン連鎖として捉えなおしている、というのがわれわれの考えである。では、メタ心理学的図式のなかに、ラカンのシニフィアン連鎖とその諸効果をどのように読みとることができるだろうか。

「フロイトは書簡 52(＝手紙 112)で、原初的「否定」は、すでに最初の記号化、つまり「知覚記号」から成り立っているということをはっきりと認めています。私が原初的シニフィアンと呼んでいる領野が存在していることを、彼は認めているのです」(SéIII177,カッコ内は引用者)とラカンは述べる。ここで「原初的「否定」」といわれているものは、書き込みが白紙を否定するものであるというラカン独自の考えから、このようにいわれている。それゆえ、最初の書き込みと捉えていいだろう。それが「原初的シニフィアン signifiant primordial」と呼ばれているわけだが、ここでそれが「原初的」とされていることに注目したい。

これは、この場所において書き込まれるシニフィアンがひとつであることを意味している。のちにラカンはこれを S_1 と記すようになる。この原初的シニフィアンは、第二部第一

章第一節でみた、「想像的侵入」あるいは「刷り込み」とラカンが呼んだものと同じものである。そのとき、そこではまだ言語化がなされていないため、それらはなにかを表わすということをしていないと述べた。シニフィアンもまた、「それ自体ではなにも意味しない」(SéIII210)とされた。つまり S_1 とは、単独であるためなにも意味することができず、いわばたんなる痕跡にすぎない。しかし、語る存在であるわれわれは、この痕跡をそのままにしておくことができない。「言語活動に住み着いた」(SéXX92)語る存在であるわれわれは、あらゆる痕跡に意味を見出そうという傾向性に支配されることになる。このため、シニフィアンは連鎖を余儀なくされる。

知覚記号あるいは回想痕跡と S_1、無意識と S_1,S_2…、前意識と a

このような考えには、ソシュール言語学が参照とされている。ソシュール言語学によれば言語活動による意味作用は、ラングという体系によって支持されるものであった。ある言語記号の意味作用は、ラングの体系内におけるほかの言語記号との差異から生ずるとされた。つまり、言語記号に意味が生ずるためには、最低二つの言語記号が必要とされるのである。

ラカンにおける原初的シニフィアンも、知覚記号あるいは回想痕跡の場所においては単独に書き込まれるわけだが、言語活動に住み着いたがゆえの傾向性に促され、意味作用へと向かわずにはいられない。このため、べつのシニフィアンへと連鎖するのである。のちにラカンはこれを S_2 と記すようになるが、この S_2 は、最初に書き込まれた S_1 以外のすべてのシニフィアンをさしている。ラカンがシニフィアンの宝庫を示すものとした A と同等のものと考えてよいだろう。フロイトが無意識とした場所を、ラカンは最初のシニフィアン S_1 が、S_2,S_3,S_4…と、純粋に象徴的なものとして連鎖する場所と捉えた。初期のラカンが無意識を象徴界と結びつけたのは、このためである。

ラカンの場合、連鎖におけるシニフィアンの結びつきが、荒唐無稽なものであるか、意識において理にかなったものであるかという点は、ひとまず問題ではない。それは、シニフィアンどうしの結びつきを他のひととコミュニケーションにおいて共有できるか否かという、結びつきから生ずる諸効果の問題である。結びつきを共有できるなら、これはフロイトが前意識において語表象のはたらきに想定した効果を見込んでいいだろう。

フロイトは手紙 112 からメタ心理学再構築期における論文「無意識」にいたるまで、前意識において痕跡が言語記号あるいは語表象との結びつくことを指摘していた。『夢解釈』第七章のなかで前意識における痕跡は思考と呼ばれ、いつでも想い出すこととのできるものとされた。フロイトは、このように想起可能性を意識の条件と考えていた。すなわち、フロイトは無意識を個人的な想起にかかわる問題として考えていたのである。これにたいしラカンは、第二部第一章第一節でみたように、無意識を具体的なディスクールによって生ずる第三項として捉えるのである。

では、無意識をこのようなものとして捉えたとき、言語活動から意識の条件についてど

のように考えられるだろうか。このとき、コミュニケーションのような、他者との共有可能性をあげることができるだろう。ラカンが、無意識をディスクールの観点から捉えようとする以上、彼が関心を示すのは、想起可能性よりもこの共有可能性のほうである。ラカンにおいてそのはたらきは、想像的なものが関与することによってなされる。つまり、純粋に象徴的なものにたいし、この場合はシニフィアンが連鎖したことによる効果として＋αのなにかがはたらくことで可能となる。この＋αを、ラカンは a と記した。つまり、ラカンにおいて前意識とは、シニフィアンの結びつきにかんして他人と共感できるような書き込みのなされる場所であるといえるだろう。これは言語学におけるコミュニケーションが問題となる場でもあり、ソシュールの提出した言語記号のアルゴリズムが有効なものとなるのはこの領域においてである。

こうして、フロイトのメタ心理学図式をラカンのシニフィアン連鎖によって次のように読みとることができるだろう。つまり、知覚記号あるいは回想痕跡と呼んだ場所は S_1 が書き込まれる場所であり、無意識は S_1 が S_2 と結びつく場所であり、前意識はその結びつきの効果として a が生じる場所である、と。

このように捉えるとき、フロイトが無意識と前意識のあいだにおいて、揺動にたいしてなされると考えた抑圧は、ラカンでは異なったしかたで想定されることになる。ラカンが抑圧を言語活動と結びつけたことは、第二部第一章でみた。そこでは、言語活動における欲望の側面が注目され、抑圧とは大他者の欲望にかんする無知にかかわるものとして、言語活動において必然的に生ずるものとされた。このようなラカンにおける抑圧を図式的に考えようとするとき、フロイトのメタ心理学的図式のように、一方方向に向かう流れがせき止められる、というようなものでは表わすことができない。結論から述べるなら、ラカンにおける抑圧は、ラカンが主体の「脱中心化」と呼ぶもの、つまりシニフィアン連鎖からの主体の脱落をみることによってはじめて理解することができる。このことについては次節にまわすとして、ここではラカンにおける抑圧を理解するために必要となるファルスという概念を確認しておきたい。

S1 とシニフィアン・ファルス

ラカンは、原初的シニフィアンである S_1 すなわちフロイトであれば知覚記号ないし回想痕跡とされていたものを、シニフィアン・ファルスとして理論化する。このとき、フロイトの理論とラカンの理論に、次のような相違点が生ずる。それは、フロイトにおける知覚記号ないし回想痕跡には、寄る辺なき幼児が経験した充足体験の書き込みが想定されており、それゆえその書き込み自体はそのまま永遠に変わらないものと考えられるのにたいし(フロイト自身、この点については明言していない)、ラカンにおける S_1 は、彼の理論のなかでは更新されうるものとなるという点である(この点については、第三部 B で取り上げる)。

ラカンの理論においてこのようなフロイトとの相違が生じたのは、彼が抑圧を言語活動と結びつけて再構築したためであると考えられる。第二部第一章において、ラカンが抑圧

を言語活動と結びつけることによって、言語活動における欲望の領域を扱おうとしていることをみた。このとき欲望にかんして、「人間の欲望は他者の欲望である」というラカンの定式を確認した。それは、大他者から欲望されることを欲望するという意味であった。このとき、大他者の欲望を表わすシニフィアンが、シニフィアン・ファルスとされるのである。

この点についてもう少しみておきたい。寄る辺なき幼児は、自分の世話をしてくれるひと(多くの場合は母親がこの人物の役割を担う)にできるだけ長いあいだ自分のそばにいてもらおうとするだろう。しかし母親も人間である以上、四六時中幼児のそばにいることは不可能である。これは、母親の側からするとたんなる気まぐれとでもいうべきことだろうが、幼児の側にとっては重大な意味ともつ。ラカンはこれについて、「大他者の気まぐれ caprice というゾウの踏みつけ」(E814)とまで表現する。というのも、「幼児はまず自分を、みずからが依存している者の気まぐれ(…)に根本的に従属させられる者として体験し、感じる」(SéV189)からである。

この母親の気まぐれに直面することによって、幼児は母親もまた欲望する者であることを知ることになる。つまり、母親が気まぐれである(そばにいたり、いなかったりする)のは、母親に欠如したものがあり、そのため母親もまた欲望する者なのだと考えるのである。幼児は母親を自分のそばにつなぎとめておこうとするだろう。こうして、幼児の欲望が大他者から欲望されることの欲望として生ずるのである。だがそのためには、みずからが母親から欲望される者にならなければならない。このとき、母親の欲望とその母親から欲望されたいという幼児の欲望をつなぐための場所として、ファルスが理論のなかに導入にされるのである

フロイトがファルスという概念を提出したのは、去勢コンプレックスの議論においてであり、それは母親の身体におけるペニスの不在にかんしてであった。第一部第三章第三節でみたように、去勢コンプレックスとは、性器期にある幼児が、母親にかかわる幻想を抱きながら、自分の性器を弄んでいることにたいして起こる出来事である。まずは、「そんなことをしていると、おちんちんを切っちゃうぞ」という去勢威嚇がなされるが、幼児ははじめその威嚇を信じることはない。しかし、母親の身体をみる機会があったとき、その身体にペニスがないことを目の当たりにし、それによって去勢がおこなわれることに信憑性が生じ、彼は去勢不安を感じるようになるのであった。このように、フロイトは、母親の身体におけるペニスの不在にかんしてファルスをもち出すのである。「(…)ここで成立しているのは性器の優位 Genitalprimat ではなく、ファルスの優位 Primat des Phallus なのである」(IG238)。ここでファルスがもちいられているのは、ペニスが問題なのではなく、あるべきところにあるべきものがないその場所(＝ファルス)が問題となっているからである[48]。

---

[48] フロイトの議論においては、このとき幻想と性別化が問題となる。つまり、男の子であれば、「人間や動物を含むすべての生物が、自分と同じような性器をもっている」(IG238)

ラカンは、以上のようなフロイトの議論を、言語活動における経験として再構築するのである。第二部第一章においてみたが、フロイトにおける幼児の充足体験とかかわる他者は、ラカン理論のなかでは大他者とされ、それは愛の要求という言語活動においてはじめて問題となる他者であった。このとき大他者の欲望が問題として生じ、それは知として獲得できないものとされた。このように、ラカンにおける大他者の欠如とはつまり、ことばの体系のなかに言語活動によって到達することのできない知が存在することを意味している。それが大他者の欲望にかんする知である。つまり、シニフィアンの宝庫であるAには、欠如しているシニフィアンがあることになり、それが大他者の欲望を示すシニフィアンであり、そのシニフィアンをラカンはほかのシニフィアンと区別し特権的なシニフィアンとして、シニフィアン・ファルスとして概念化したのである。「(…)ファルスはひとつのシニフィアンです(…)。ファルスというシニフィアンがその現前によって全体を条件づけるかぎりで、ファルスは全体としてのシニフィエの諸効果を指し示すよう運命づけられたシニフィアンなのです」(E690)。

第二部第一章でわれわれは、言語活動における「要求は、与えられるものすべての特殊性を、愛の証へと変形させることで、取り消します」(E691)というラカンの発言から、言語活動における欲望の側面へといたったのであったが、これをもう少し理論的に述べるなら、言語活動においてシニフィアン・ファルスを最初のシニフィアンつまり S_1 の位置に措定することで、あらゆる言語活動を欲望の領域において捉えることが可能となるのである。こうして、シニフィアン連鎖は($S_2 \rightarrow S_n$)は、大他者の欲望を指し示すシニフィアンであるシニフィアン・ファルスすなわち S_1 の、知へといたるためのものとして理解することができるのである。「このファルスというシニフィアンにおいて、ロゴスの役割が欲望の出現と接続されるのです」(E692)。

このようにラカン理論において、S_1 とはシニフィアン・ファルスという大他者の欲望のシニフィアンを指し示すものであり、それがシニフィアン連鎖のはじまりに措定されるのである。しかし、言語活動の構造上、それが意味作用によって回収されることはない。

このようにラカンによって、フロイトの知覚記号ないし回想痕跡は、ファルスを意味する S_1 によって読み替えられた。こうして、フロイトのメタ心理学的図式は情動的な量の流れではなく、言語活動の運動として捉えられるようになる。このような考えを手がかりに、われわれはラカンが抑圧を、言語活動と結びつけることでどのように捉えたかを正確にみることができる。では、次にラカンが抑圧をどのように解釈したかを検討してみたい。

という幻想が傷つけられ、女の子であれば、「自分にはそれ(=ペニス)がないことを知り、それを欲する」(PF261)ようになる。フロイトはこのように、母親におけるペニスの不在としてのファルスの場所が、性別化において決定的な役割をはたしていると考えた。ラカンにおいても基本的な考えは変わらず、彼はそれを性別化の式として、つまりファルスをめぐるもののいいかたとして、四つに定式化したのである。しかし、本稿では性別化の問題は扱わないため、ここではファルスにかんして男女の区別にはふれず、たんに母親の身体上の欠如の場所、大他者の欠如の場所として取り上げる。

第三節　抑圧と主体の脱中心化

主体を指し示すシニフィアン・ファルス

シニフィアンが連鎖するのは、人間が言語活動に住み着き語る存在となったため、あらゆる痕跡にたいし、意味作用を求めることを強いられるようになったからである。だが、S_1 あるいはシニフィアン・ファルスは意味作用に回収されないため、それにかんし象徴化されえないものが残される。それゆえ、シニフィアンは、意味作用をもとめ連鎖しつづけることになるだろう。

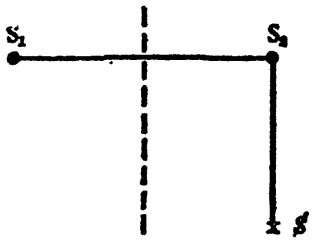
いいかえるなら、S_1 は、大他者の欲望をいいあてるために愛の証であるようなあらゆることばによってその知を獲得しようとするが、その知の獲得は不可能なのである。その知を獲得するため、すなわちそれにたいする意味作用を求めて、シニフィアンの宝庫でもある A のなかを、あらゆるシニフィアン($S_2 \rightarrow S_n$)が連鎖していくだろう。しかし、どのシニフィアンも S_1 をいいあらわすことはできない。

ところで、シニフィアン・ファルスとは、主体にかかわるシニフィアンでもある。つまり、S_1 を再現しようとする者すなわち愛を要求する者(あるいは欲望する者といってもいいだろう。だがこの場合の欲望はもちろん、大他者の欲望の欲望である)は、大他者の欲望であるファルスにみずからの存在を結びつけるからである。大他者から欲望されるところの者になること、それが彼の欲望なのであった。しかし、そのためのファルスがなんであるか、つまり大他者が欲望するものがなんであるかを知ることはできない。すなわち、欲望する者は、自身の存在について知ることができないのである。このとき S_1 の知を獲得しようとする者は、みずからを指し示してくれるはず知にかんして、それを知ることができないために、その連鎖から脱落せざるをえない。この脱落するもの(これもまたシニフィアンである)を、ラカンは $\$$ によって表わす。以下の図式は、このことを示すため、ラカンがセミネール 11 巻(1964)において提出したものである[49]。

---

[49] この図式こそ、ラカンの抑圧の構造を正確に示したものである。第二部第一章第二節において、われわれはバルトがソシュールのアルゴリズムから直接ラカンの抑圧の構造を指摘しているのをみたが、この図式を提出することによって、バルトの理解が暫定的なものであったことが理解されるだろう。ここでラカンの提出する図式は、第三部における四つのディスクールにおいても有効となる。

シニフィアン連鎖からの主体の脱落としての抑圧



ラカンはこれを疎外 aliénation と呼ぶ。それは、シニフィアン連鎖($S_1 \rightarrow S_2$)から、$が文字どおり疎外されるからである。これはシニフィアン・ファルスを S_2 によって意味作用に回収することの不可能性のために、欲望する者がみずからの存在の意味を獲得することができないことを示している。

このときの$こそ無意識の主体を表わしている。フロイトが晩年に自我の分裂と呼んだものを、ラカンは、シニフィアン連鎖($S_1 \rightarrow S_2$)から$が脱落してしまうことと読み替えるのである。べつのいいかたをするなら、語ることのために語る存在は脱中心化されるといえるだろう。精神分析において、自我とは本来分裂したものと考えられる。そして、本稿で主題として取り上げている抑圧とは、ラカンにおいてはまさにこの事態を示しているのである。

うえのラカンの図式を使って抑圧について述べるなら、S_1 が S_2 へと連鎖しながらも、S_2 が S_1 をうまく意味作用によって回収することができないために、この連鎖から$が脱落することであるといえるだろう。このとき、ハイデガーの脱-存と執-存の議論が参照とされているが、この点については第三部にゆずり、ここではラカンにおける抑圧を次のようにまとめておくにとどめておこう。つまり、シニフィアン連鎖($S_1 \rightarrow S_2$)において、ファルスが象徴化されえないものとして残される以上、語る存在にとって、まさにその語ることから、みずからの存在の意味が捉えられることなく、それは$として脱落してしまうこと、このような自我における脱中心化された事態、これがラカンの考える抑圧なのである。

もしシニフィアン連鎖の止まることがあるとしても、それは語る存在に意味作用が生じたからではなく、連鎖によって生じる効果としての a がうまく機能したからであると考えられる。シニフィアンの連鎖自体がうまくいかなくとも、それが連鎖した以上語る存在にたいしなにがしかの効果を生むことは十分考えられる。その効果が a であった。コミュニケーションにおいて、他人となにかをわかちあえたという経験は、ラカン理論においては、この a がうまく機能した効果であるといえるだろう。

ここでわれわれは、「ひとが語りはじめるとき、(…)まさにそこに抑圧があるのだと私は理解しています」(SéXX53)というラカンの発言を正確に理解できる。抑圧とは、無意識にアプローチするための理論であった。抑圧をこのように捉えるとき、無意識とは、本来の自分の所在などではまったくなく、自我が本来的に分裂している事態を示すための概念なのである。そして、その分裂はラカンによれば、ひとが言語活動に住み着いたため、必然

的に生ずる事態なのである。これはひとが言語活動に住み着いたがゆえに、語る存在として引き受けねばならない構造なのである。

第二部の結論

心的揺動あるいは興奮の流れを想定し、それらが性的なものとかかわりのあるとき、それが無意識から前意識へと通過するさいには、せき止められるかもしくはかたちを変形させられて通過することになる。フロイトがこのように理論化した抑圧を、ラカンは、言語活動の観点からシニフィアン概念を独自に練り上げることによって、再構築した。このようなラカンの試みは、抑圧されるものを揺動と捉えるか、シニフィアンと捉えるかの相違以外は、フロイトの着想に則っていると考えられる。さらにいえば、精神分析がことばをもちいた心理療法である以上、言語活動によって抑圧を理論化しなおすことは、よりフロイトの切り開いた領野にふさわしい理論化であるといえるだろう。

ラカンはフロイトの考えた充足体験を S_1 と捉える。充足体験を、フロイトは寄る辺なき人間の幼児が他者から世話されたときに書き込まれた経験、つまり愛されたことの経験であるとした。このことをラカンは、言語活動における欲望の領域を理論化することによって捉えなおしたのである。このとき、「人間の欲望は他者の欲望である」(E319)という定式が提出された。これは、他者から欲望されることを欲望するという、語る存在の欲望の本質を意味する。このとき、他者の欲望を示すものが、シニフィアン・ファルスとして想定されたのであった。こうしてラカンによって、S_1 はシニフィアン・ファルスという意味をもつ。そして、このシニフィアン・ファルスは他者の欲望の知を求めて、いいかえるなら S_1 が意味作用に回収されることを目指して、シニフィアン連鎖が生ずるのである。

しかし、愛にかかわることすなわち他者の欲望を知ろうとすることにおいては、日常のコミュニケーションにおいては問題にならなかったような点で、疑惑が生ずる、つまり、相手のいっていることが信じられない、あるいは嘘だと感じてしまう、ということが生ずる。このとき、言語活動におけるしくじりが暴露されるのである。ラカンは、そのような言語活動におけるしくじりを、特別にパロールと呼んだ。

パロールにおいてシニフィアンは意味作用を求めて連鎖していく。だが、ラカンの考えにおいて、シニフィアンは本来連鎖しつづけるものであり、どこまでいってもそこに意味作用が生じることはない。それでも、そこに意味作用と呼ばれているものが生じているよう感じられるのは、シニフィアン連鎖において生じた a にかんして他人との共感がなんらかのしかたで得られるからである。ことばによるコミュニケーションが可能なのは、この

ためである。だが、愛にかかわることは、往々にして、この a が疑いとして生ずるのである。

このように言語活動においては不幸にも、S_1 すなわちシニフィアン・ファルスの求める知を意味作用によって回収することができない。

さらにいえば、このシニフィアン・ファルスは欲望する者の存在の意味にかかわることでもある。欲望において、欲望する者は、他者の欲望の知を獲得することができるなら、みずからが何者であるかを知ることができるからである。しかし、この愛にかかわることにおいては、その知の獲得が不可能なのである。それゆえ、シニフィアン連鎖から主体にかかわることが脱落すると考えられる。ラカンは、そこに抑圧の構造をみる。「抑圧が作用するのはシニフィアンにたいしてです。主体とシニフィアンとの関係の周囲にこそ、抑圧という基本的なポジションが体制化されるのです」(SéVII,57)。

このように、抑圧をシニフィアン概念の練り上げによって理論化しなおすことで、ラカンは抑圧が主体にかかわる出来事であると考える。しかし、このような着想もフロイトの考えを逸脱したものではない。フロイトは、晩年の論文において自我の分裂を扱っていた。ラカンはまさにこの点を、シニフィアンによって理論化したのである。

このときラカンの思索はハイデガーと交差することになる。そして、ラカンによる抑圧理論の再構築は、哲学が問題としてきた真理の領域へと踏み込まざるをえなくなる。そこで、ラカンはハイデガーとともに、真理を主体とのかかわりから提出することになるだろう。こうして、真理の問題は倫理的なものとのかかわりから取り上げられることになる。

こうして、ラカンにしたがい抑圧を言語活動から捉えるとき、無意識は倫理的なものとして提出されることになるだろう。「無意識のステイタスは本来倫理的なものです」(SéXI34)。それはどのような倫理であるのか。第三部において、この点を検討していきたい。